SOMPO
安心・安全・健康のテーマパーク

Sompo侠

SOMPO伝とは

あらゆる人が、自分らしい人生を健康で豊かに楽しむことのできる社会。それが、SOMPO の目指す未来、パーパスです。SOMPO 伝は、社員一人ひとりが SOMPO という舞台で自分の志を実現していく物語を、『未来伝記』として書き記したものです。

SOMPOが掲げる「パーパス」とは

安心・安全・健康のテーマパークにより、あらゆる人が自分らしい人生を健康で豊かに楽しむことのできる社会を実現する。それが、私たち SOMPO の目指す未来、パーパスです。安心でいたい。安全でいたい。健康でいたい。そんな人々の想いにさまざまなソリューションで応え、もしものときに役立つだけでなく、暮らしに、人生に寄り添えるパートナーを目指しています。また、社員一人ひとりが、自分ならではの志「MYパーパス」を持ち、SOMPO という舞台で新たな価値を生み出し続けています。

-目次-

第1話　介護、そこにあるべきもの　SOMPOケア株式会社　圓藤香津子　1

第2話　技術と才能と仲間たち　損害保険ジャパン株式会社　早川裕子　2

第3話　未知と向き合う、その決意　SOMPOひまわり生命保険株式会社　松本洸徳　3

第4話　眩き非常識　損害保険ジャパン株式会社（Palantir Technologies Japan 株式会社　出向）　貝原太郎　4

第5話　世を、人を、深く想う　SOMPOホールディングス株式会社　櫻田謙悟　5

第6話　偏見は要らない　SOMPOホールディングス株式会社　原伸一　6

第7話　差別体験を相互理解へ　損保ジャパンキャリアビューロー株式会社　真杉公二　7

第8話　防災・減災へのロードマップ、その原点　損害保険ジャパン株式会社　池田和樹　8

第9話　少女の心を開いた日から　SOMPOチャレンジド株式会社　山﨑智美　9

第10話　最期まで豊かな人生を　SOMPOケア株式会社　廣畑恵　10

第11話　仲間の存在　SOMPOホールディングス株式会社　平野友輔　11

第12話　春風のなかの後悔　損害保険ジャパン株式会社　芝池淳一　12

第13話　自信と活力　SOMPOコーポレートサービス株式会社　塩田佳奈　13

第14話　組み立てることは、支えること　SOMPOビジネスソリューションズ株式会社　岡田大輔　14

第15話　北京、リオ、東京五輪の舞台の先に　SOMPOケア株式会社　小野真由美　15

第16話　新時代の『読み・書き・算盤』　SOMPOホールディングス株式会社　加藤素樹　16

第17話　自分を変えて気づいた使命　株式会社フレッシュハウス　河野雄介　17

第18話　心を受けてみる　損害保険ジャパン株式会社　後藤愛　18

第19話　介護職は「かっこいい！」　SOMPOケア株式会社　森田亜希恵　19

第20話　完璧主義者を変えた子育て体験　SOMPOひまわり生命保険株式会社　有賀千智　20

第21話　最後まで寄り添う食　SOMPOケア株式会社　真木大輔　21

第22話　坂本龍馬になりたい　SOMPOひまわり生命保険株式会社　菅原政道　22

第23話　チームプレイゆえの達成感　損害保険ジャパン株式会社　渡辺誠司　23

第24話　突然失われる日常　SOMPOひまわり生命保険株式会社　島田拓実　24

第25話　次は地域貢献　損害保険ジャパン株式会社　江川敦子　25

第26話　親の健康と、家族のしあわせ　SOMPOひまわり生命保険株式会社　田中宏典　26

第27話　「ふつうの生活」が一番大切　SOMPOケア株式会社　新坂彩夏　27

-目次-

第28話　事故のない世の中をつくる一歩　損害保険ジャパン株式会社　狩野繭子　28

第29話　みんなが自分らしく生きられる社会をつくる　SOMPOホールディングス株式会社　猪又竜　29

第30話　母の祈りを、教えを胸に　損害保険ジャパン株式会社　赤羽萌　30

第31話　ポジティブ思考　SOMPOホールディングス株式会社　新藤康子　31

第32話　苦しんだからこそ、できることを　SOMPOひまわり生命保険株式会社　相田剛　32

第33話　生きやすさ、働きやすさを支援　SOMPOコミュニケーションズ株式会社　古賀弘美　33

第34話　介護こそ究極のサービス　SOMPOケア株式会社　右近幸絵　34

第35話　大航海時代の見果てぬ夢を、今も　SOMPOホールディングス株式会社　石野宏治　35

第36話　情報化する社会、対応の最前線に　SOMPOコーポレートサービス株式会社　中神全弘　36

第37話　新しいテーマパークを作りたい　SOMPOケア株式会社　下川原恵　37

第38話　認めてもらうのを待ってちゃダメ　SOMPOひまわり生命保険株式会社　篠田香里　38

第39話　仲間の笑顔と、前向きな気持ちと　損害保険ジャパン株式会社　市川純　39

第40話　建設的な介護とは？　SOMPOケア株式会社　古澤隆　40

第41話　「当たり前」以外の選択肢がある　損害保険ジャパン株式会社　平野恵子　41

第42話　伝える力で、三方よしに　損害保険ジャパン株式会社　廣井賢　42

第43話　だれかの力になりたい　SOMPOケア株式会社　髙野直子　43

第44話　チーム力で解決　損害保険ジャパン株式会社　有末宏　44

第45話　人生を変えた吹奏楽とアルバイト　SOMPOコミュニケーションズ株式会社　吉里信吾　45

第46話　チームの無限の力を引き出す「笑い」　損害保険ジャパン株式会社　木下七海　46

第47話　笑顔が生み出すもの　損保ジャパンDC証券株式会社　横山肇　47

第48話　「人間万事塞翁が馬」を胸に　損害保険ジャパン株式会社　松嵜恵子　48

第49話　ハンドクリームと手紙の思い出　SOMPOヘルスサポート株式会社　恩田拡行　49

第50話　ご入居者さまの思いをかなえる　SOMPOケア株式会社　大井広和　50

第51話　防災、減災の大切さを　損害保険ジャパン株式会社　金井圭　51

第52話　みんなで支え合う　SOMPOケア株式会社　廣川秀人　52

第53話　徹底的に仲間たちと向き合う　SOMPOひまわり生命保険株式会社　岩村美香　53

第54話　自信の在り処　SOMPOケア株式会社　髙畑朱江　54

-目次-

第55話 あの叱正があったからこそ
SOMPOコミュニケーションズ株式会社
中濱江利奈 55

第56話 人生の最期を笑顔で。
SOMPOケア株式会社
髙坂匡広 56

第57話 人は、何度でも変われる
損害保険ジャパン株式会社
渡辺雅樹 57

第58話 両親の教えを胸に、挑戦を続ける
損害保険ジャパン株式会社
矢野隆志 58

第59話 家族の笑顔が伝播して
損害保険ジャパン株式会社
松木康浩 59

第60話 誰もが幸せになれる未来へ
SOMPO未来研究所株式会社
宮地裕太郎 60

第61話 新たな発想と挑戦
損害保険ジャパン株式会社
氏家亮介 61

第62話 二死満塁から、バットを振り抜く
SOMPOひまわり生命保険株式会社
吉川清隆 62

第63話 信頼、安心、幸せに働くこと
損害保険ジャパン株式会社
木戸梓 63

第64話 ゴッホの『ひまわり』が導く未来図
SOMPOコーポレートサービス株式会社
二瓶真由美 64

第65話 雨雲を抜けて、広がる青空
損害保険ジャパン株式会社
森永早春 65

第66話 スペシャリストを支える使命
SOMPOアセットマネジメント株式会社
泉川直毅 66

第67話 電話口で漏らした嗚咽
損害保険ジャパン株式会社
塩谷恵理子 67

第68話 若かりし頃の失敗を糧に
SOMPOリスクマネジメント株式会社
松尾弘史 68

第69話 だれにも後悔してほしくない、その覚悟
損保ジャパンパートナーズ株式会社
茶谷明美 69

第70話 新たな価値とニーズ
損害保険ジャパン株式会社
岩渕倫子 70

第71話 データを社会にどう活かすのか
SOMPOリスクマネジメント株式会社
島崇 71

第72話 お客様が楽しみ、自分も楽しむ
SOMPOケア株式会社
西本愛弓 72

第73話 ダウン症の兄が教えてくれたもの
損害保険ジャパン株式会社
小林広 73

第74話 「家に帰りたい」の声を胸に
SOMPOケア株式会社
堀江純子 74

第75話 伝えたい、健康のありがたさ。
SOMPOひまわり生命保険株式会社
佐々木美奈子 75

第76話 農作業を手伝った日々があればこそ
株式会社プライムアシスタンス
三浦梓 76

第77話 リスクマネジメント文化を浸透させる
損保ジャパンパートナーズ株式会社
原修 77

第78話 介護、見えない気配りとデータの視覚化
SOMPOワランティ株式会社
松田庸介 78

第79話 お客様の感動が品質向上の源
損害保険ジャパン株式会社
芦原葉子 79

第80話 どん底から救ってくれた人々
損害保険ジャパン株式会社
坪井正和 80

第81話 真摯に取り組めば、どうにかなる
MYSURANCE株式会社
金山雄大 81

-目次-

第82話　日々の暮らしを守る　損害保険ジャパン株式会社　井上慎一　82

第83話　人を元気づける喜び、楽しさ　損害保険ジャパン株式会社　渡邉美花　83

第84話　お節介焼きは母譲り　SOMPOケア株式会社　森田恭司　84

第85話　出向も、いい転機に　損保ジャパンパートナーズ株式会社　青木由美子　85

第86話　ありがとうの輪が広がる　SOMPOひまわり生命保険株式会社　三森宏美　86

第87話　チームケアを通じ夢の実現を　SOMPOケア株式会社　福士陽子　87

第88話　多様性を求め、故郷から世界へ　損害保険ジャパン株式会社　松原輝和　88

第89話　〝化学変化〟を生む声かけ　損害保険ジャパン株式会社　青本哲也　89

第90話　モダンバレエの体験を生かして　SOMPOビジネスサービス株式会社　福岡信代　90

第91話　分かち合い、一緒に成し遂げる　損害保険ジャパン株式会社　鈴木理恵　91

第92話　人を育てるプロとして　セゾン自動車火災保険株式会社　澁谷千尋　92

第93話　社会を支えるインフラとして　損害保険ジャパン株式会社　栄昭治　93

第94話　見えないところで支える力　SOMPOケア株式会社　長谷川公子　94

第95話　企業価値を高める営業力　損害保険ジャパン株式会社　柳井隆祐　95

第96話　躍進のための基盤づくりへ、一歩　SOMPOシステムズ株式会社　宇野明光　96

第97話　進化を支える力　SOMPOケア株式会社　伊藤将義　97

第98話　常にお客さまの味方であるために　損害保険ジャパン株式会社　市川大介　98

第99話　介護・福祉業界の不条理を解決する　SOMPOケア株式会社　馬来秀行　99

第100話　心の矢で的を射る心構えで　損害保険ジャパン株式会社　井上真梨子　100

新聞広告　101

第1話
介護、そこにあるべきもの

SOMPOケア株式会社　圓藤香津子

「圓藤香津子の強い想いが、介護の道を切り拓く」

「香津子ちゃんは、笑うてんのが、いちばんええね」

彼女の祖母はそう言って、かすかに震える手を、彼女の頭にやさしくのせた。

リウマチを患っていた祖母の部屋に食事を運ぶのは、孫の圓藤香津子の役目だった。

「そんなん言うけど、ばあちゃんは、じいちゃんに怒ってばっかりやん」

そう口をとがらせると、祖母は、ちょっと恥ずかしそうに笑った。

おばあちゃんっ子だった彼女は、その後、何かに導かれるように介護の道を選んだ。今は、地元大阪で介護福祉士として働いている。大好きだった祖母は、高校一年生のときに亡くなった。

「もっと、なんか、できたんちゃうかな」

祖母が亡くなって以来、そんな思いが、彼女を捉えて離さなかった。

自分で選んだ道ではあったが、介護の道はときに過酷だった。部屋訪問に、体調管理に、食事や排泄の介助。毎日がめまぐるしく過ぎていった。

しかし最近は、それらがデータの活用によりずいぶん楽になったと感じる。ベッドの上に敷くマットレス型のセンサーを使って健康状態をデータ管理することで、事務作業が効率化し、それぞれに合った介護計画を立てられるのだ。一人ひとりとゆっくり話す時間が持てるようになった彼女は、自然と笑顔になることが増えていった。

「圓藤さん、富士山には絶対、登ったほうがええよ。人生変わるで」

「圓藤さん、お肉はな、すりりんごにつけると柔らかくなんねん」

彼女がそばで話を聞くとき、どの人も嬉しそうに、目を輝かせる。

祖母の話も、もっと聞いてあげたかった。彼女は、自分の後悔の理由に気がついた。祖母が亡くなった頃、彼女は部活と勉強に追われ、祖母との時間をほとんど持てていなかった。もっと、そばにいてあげたかった。

「香津子ちゃんは、笑うてんのが、いちばんええね」

彼女は今日も、一人ひとりに笑顔で寄り添い続ける。

第2話
技術と才能と仲間たち

損害保険ジャパン株式会社　早川裕子

「早川裕子の想像力は、安心、安全の常識を変える」

「ゆうこちゃんの絵、へんなの」

友達に声をかけられ、八歳の早川裕子は、あたりを見回した。彼女を含め、十人ほどの子どもたちが、校庭にそびえたつ一本の柳の木を描いていた。しかしその葉を青、赤、黄などさまざまな色で塗っていたのは、彼女ひとりだった。カッと顔が熱くなり、思わず画用紙を両手で覆った。

「早川さんは、想像力が豊かなのね」

振り返ると、先生が笑顔で、こちらを見ていた。

あれから、時はすぎた。彼女は、ＳＯＭＰＯにいた。入社した決め手は、就職活動中に出会った先輩社員たちが、皆楽しそうに見えたから。要は、直感だ。しかし入社後、彼女はあることに気がついた。

「早川さんって、想像力が豊かですよね」

ことあるごとに、同僚たちに、こう声をかけられるのだ。そのとき、彼女は思い出した。自分の想像力を褒め、自信を与えてくれた担任の顔を。自分の使命は、この想像力を、社会のために役立てること。

いつしか彼女の中に、小さな炎のような想いが生まれつつあった。

現在ＳＯＭＰＯでは、いち早くお客さまに寄り添い、事故や災害による被害を最小限にするためのデータ活用がすすんでいる。そこに自分の想像力を掛け合わせたら？　例えば、豪雨直後の危険区域にドローンを飛ばし、その場所のデータを素早く収集する。そして、想像してみる――この地域は普段は雨が少ないから、排水機能が不十分なのではないか。だとすれば、優先すべきは人々が安全に避難すること――こんなふうに、仮説をもってデータと向き合うことで、被害はきっと、もっと減らせる。

「早川さん、よくこんなこと思いつきますね」

ふいに声をかけられ、彼女は振り返った。三つ下の後輩が、先ほど彼女が作ったばかりの資料を手に、顔を輝かせていた。この仲間と、安心、安全な社会を実現してみせる。彼女はそっと、心に誓う。

第3話
未知と向き合う、その決意

SOMPOひまわり生命保険株式会社　松本洸徳

「松本洸徳は、女性の未来と、人類の未来に光を灯す」

「私、PMSがひどくて」

「わかります。私もイライラしたり、食べ過ぎたりしちゃって……」

女性社員たちに囲まれた松本洸徳は、異国の地に迷い込んだかのような心境だった。彼が責任者を務める、フェムテック事業の打ち合わせでのことだ。PMS、ピル、月経困難症。出てくるワードのすべてがぼんやりとしか摑めない。そもそも男である自分がここにいて良いのだろうか。

「松本さんはどう思われますか?」

「え? いやあ……」

急に名指しされ、彼は面食らった。

「松本さん。このデータを見てください。これはもはや、個人の問題じゃないと思うんです」

部下のひとりが、熱を込めて言った。データを見た彼は驚いた。重い月経のせいで働きづらさを感じている人が、これだけいる。大きな労働損失だ。女性の健康を守ること。もっと働きやすい社会にしていくこと。それに取り組むべきは、人々の健康と幸福を守る使命を持ったSOMPO、つまり自分たちなのだ。彼は悟った。

女性が抱える健康の問題を、テクノロジーで解決する。そのために、まずリアルデータに着目した。女性個人の、実際の声から得られるデータだ。すると、女性の悩みを知るためのキーワードが浮かび上がってきた。月経、妊よう性、更年期の三つだ。これらの問題を解決するために必要な技術とは? サービスとは?

男だから。そんな気恥ずかしさは、いつのまにか消えていた。

松本のなかにある思いが芽生えた。リアルデータを活用すれば、もっと女性の役に立つサービスが生み出せるのではないか。例えば、女性特有の病気のリスクについて自覚していなくても、普段の行動を入力するだけで、そのリスクを可視化できる。そんなサービスが生み出せないだろうか。

彼らの挑戦は、はじまったばかりだ。

第４話
眩き非常識

損害保険ジャパン株式会社
（Palantir Technologies Japan 株式会社　出向）
貝原太郎

「貝原太郎は、デジタルの力を、人の生きる力に変える」

カリフォルニアの太陽がまぶしく降り注ぐなか、貝原太郎は、絶句していた。

（これが、世界と日本の差か……）

彼は、シリコンバレーに来ていた。世界の最先端を吸収するのだ、と大きな使命感を抱いていた。しかし。

「タロー、こういう保険があるの、知っている？」

あるスタートアップのプロダクトデザインを担当するジェシカは、彼にスマホを手渡した。

「スマートフォンから加入できる保険？　それなら日本にも……」

「いいえ」

ジェシカは、顔をさっと横に振った。その肌は、よく日に焼けている。

「これは、二十四時間、ユーザーの状況に合わせて保険の加入・非加入をスマートフォンからスイッチできるあたらしいモデルの商品よ。こんなふうに……」

そう言って、彼女が画面をスワイプすると、明るい画面に「ＯＮ」と表示された。

「そんな」

彼は面食らった。

「こんな仕組みが成り立つはずがない、これまでの自分自身の経験からすれば非常識、非現実的、逆選択の温床になるだけ、認可だって通るはずが……」

「あなたたちの常識からすれば、ね」

ジェシカは楽しそうに、白い歯を見せた。

「けれど、こんな風に柔軟に保険のオン・オフを切り替えられたら、便利でしょう？　常識はときに、固定概念になって、私たちにリアルを見失わせるわ」

人々の感情や生活に寄り添う、徹底的なリアル主義。それが、世界の最先端の地にはあった。これこそ、本当に価値ある体験を生み出す鍵だ。彼は静かに興奮していた。

ＳＯＭＰＯは今、リアルデータの活用を掲げている。さまざまな事業の、実際の現場で取得されたデータだからこそ、出所のわからないバーチャルデータと違い、よりリアルなニーズを発見できる。リアルデータを使って、デジタルの力を、よりよい形で世の中に届ける。力強く生きていける人を、一人でも多く生み出していく。それこそが、彼の使命だ。

第5話
世を、人を、深く想う

ＳＯＭＰＯホールディングス株式会社　櫻田謙悟

「櫻田謙悟は、安心・安全・健康のテーマパークを実現する」

広々とした校庭を風のように駆け抜けていく少年は、まさにクラスの英雄だった。その背中を睨みつけ、幼き日の櫻田謙悟は、まだ小さな奥歯を噛み締めた。櫻田は足が遅かった。彼がどんなに必死に手足を振っても、少年にはとうてい追いつけなかった。

「お前には、武道のほうがいいんじゃないか」

自室でうなだれていた彼は、父親の言葉に、顔を上げた。翌日、すぐに剣道場を見にいくと、うずまく熱気と、空気を切り裂く気合いの声に胸が震えた。自分にはこれしかない。彼はそう直感した。

強くなりたい。誰よりも強く。

彼は努力を惜しまなかった。足の速いあの少年の顔。それに黄色い声援を送る同級生たちの顔。それらのイメージをかき消すように、竹刀を振りつづけた。

強くなりたい。もっと強く。

必死の思いで、一冊の本を手に取った。宮本武蔵の「独行道」だ。剣の天才として、我が道を突き進んだ彼の言葉には、必ず学ぶところがあると考えたのだ。

しかし、そこに書かれていたのは、意外な言葉であった。

「身を浅く思ひ、世を深く思ふ」

自分のことだけを考えていては、真の強さを手にすることはできない。大切なのは誰かのために努力する精神なのだ、と。

彼はそののち、七万人の社員を抱えるＳＯＭＰＯグループの代表取締役社長に就任した。強く、かっこいい人間になりたい。幼い頃は、そんな想いを切実に追っていた彼だが、今は違う。彼の使命は、あらゆる人が自分らしい人生を、健康で豊かに楽しむことのできる社会を実現することだ。リアルデータを活用して、事故を減らす。被災を減らす。病気のリスクを減らす。日々の暮らしをより安心安全なほうへ、人々の人生をより健康なほうへ、変えていく。

宮本武蔵の言葉が今も、彼の行く道を照らしている。

第6話
偏見は要らない

ＳＯＭＰＯホールディングス株式会社　原伸一

「原伸一は、人と裸の心で向き合いたいと思う」

原伸一が進んだ中学校では、いつもどこかの教室の窓ガラスが割れていた。新しいガラスに交換しても、すぐに割られ、いたちごっこだった。給食で配られた紙パックの牛乳をわざと腐らせ、屋上から投げては彼らは喜んだ。テレビで「金八先生」シリーズが始まり、全国で「学級崩壊」が問題になったころのことだ。いわゆる〝腐ったリンゴ〟はどこの学校にもいた。

「あいつらに関わるとろくなことがない」

学校の先生も、級友も見て見ぬふりをした。

――ほんとはいい奴なんだけどなあ。

不良グループの何人かは、小学校時代の遊び仲間だった。近所の公園で一緒に三角ベースをしたり、ドロケイをしたり、日が暮れるまで遊んだ。中学に進むと、距離が離れたが、不思議といじめられなかった。それどころか、

「原ちゃん、ちょっと勉強を教えてくれよ。俺、高校に行きたいからさ」

と言われたこともあった。家庭の事情や学業の遅れで高校進学をあきらめざるを得ないだけで、本当はみんなと同じように生きたいという気持ちが痛いほどわかった。でも現実は思うようにならないから、わざと暴れて、目立とうとする。

「みんな、認められたいんだよ。一人の人間として」

彼らを偏見の目でしか見ない大人たちに言い返したかったが、いつしか原自身も〝その他大勢〟の一人になっていた。

あれから四〇年以上が経ち、ＳＯＭＰＯグループの人事戦略を統括する立場になった今、あのときのことがやたらと甦ってくる。これまでは生産性重視でスピードや売り上げ増が求められ、社員一人ひとりの個性など必要なかったが、はたして今後はそのままでいいのだろうか。ましてや、ＳＯＭＰＯグループが「安心・安全・健康のテーマパーク」をパーパスとして掲げ、新しい価値創造を目指している今、社員一人ひとりが使命感、やりがいを持ち、自発的に仕事に取り組まなければ会社も立ち行かなくなる。一人ひとりのＭＹパーパスと会社のパーパスが融合し、仕事を通して社員と会社が共に幸せになる。そのために１オン１ミーティングやＣＥＯのタウンホールミーティングを積極的に進めていかなければならないと、彼は改めて決意を固めた。

――もしもあのとき、周りの大人たちが偏見を持たず、彼らに心を開いて向き合っていたら……。

ときおり、原伸一はそんなことを思ってみたりする。

第7話
差別体験を相互理解へ

損保ジャパンキャリアビューロー株式会社　真杉公二

「真杉公二は、境界線を踏み越えていく」

小学六年生から中学三年生。この最も多感な四年間をイギリスで暮らした真杉公二にとっての毎日は、苦難以外のなにものでもなかった。

まだアジア人差別が根強く残っていた一九八〇年代のイギリス。片道一時間半の日本人学校への通学途中では、電車やバスで乗り合わせた見知らぬ大人に急に押されたり、物を盗られることは日常だった。毎日が生きるか死ぬかのサバイバルであり、まだ少年だった真杉にとってあまりに過酷な日々であった。

「人は自分とは異質な存在に出会うと、本能的に相手との間に〝線〟を引いて排除しようとする」

自分が受けた強烈な差別経験から、彼は身をもってこのことを学んだ。

どうすれば、相互理解に変えられるか。

入社後に携わった船舶保険で、ヨーロッパとの交渉に戸惑う同僚に、真杉は彼らの価値観や理解の仕方を教え続けた。

「もし誰かが無意識に相手に線を引いていたら、自分が正確な情報の提供者となり、理解してもらい、その線を踏み超えてもらいたい」――。

自分だからこそ、伝えられることがある。

そして現在、派遣業務のマネジメントに携わる彼は、データという心強い相棒を伴うことになる。データを蓄積し活用すれば、より正確に現状を把握できる。これこそ、思い込みや偏見とは無縁のファクトだ。ファクトに基づけば、正しい理解が進む。その点に惹かれ、真杉は自らデジタルスキルを習得し、社内勉強会も開いてきた。

あるとき社員が抱えるストレスについて、勤務時間のデータを収集し分析したところ、直近の残業時間よりも、過去四カ月の残業時間のほうが影響の度合いが強いことが見えてきた。多様なデータを活用すれば、より精度の高いストレスマネジメントができ、働きやすい環境づくりに繋がる。最初はＤＸという言葉に抵抗のあった社員も、数値からそんな事実が見えてくると一気に関心が高まった。

「人は、知らなかったことが分かると、〝線〟の向こう側にいってくれるんだ」。

今、あの少年時代にタイムマシーンで戻れるなら。一人イギリスで思い悩む少年に、「きっと君なら世の中を変えていけるよ」。そう力強く声をかけることだろう。

第8話
防災・減災へのロードマップ、その原点

損害保険ジャパン株式会社　池田和樹

「池田和樹は、関わる人々の心に〝元気〟と〝勇気〟の火を灯す」

新任地で迎えた誕生日。池田和樹は四十歳になった。

「不惑、いや、二度目の二十歳か」

二十年前を振り返る。テニスサークルでのコーチやアルバイトの塾講師をしながら、楽しく過ごしていた。

「先輩、試合に勝ちました！」

「先生、試験の点数が上がったよ！」

教えたり、長所を引き出したり、勇気づけたり。誰かの成長に役立つことが嬉しかった。その喜びが自分の心の糧になった。

社会に出て組織の中で働くようになってからは、関わるヒトの潜在能力を引き出し、活性化させることが楽しみになった。ヒトを活かし、自分も成長する。その先にお客さまの笑顔が見えるようになったのは、三十歳のとき。全社一丸となって、東日本大震災の発生から三週間後、被災地でのお客さまの支援に当たった。砂埃の舞うなか、瓦礫の山をかき分け、避難所や被災した家屋にお客さまを訪ねた。疲労困憊し、これからどうしたらいいのか途方に暮れている。ところが保険金が給付されると知ると、絶望的なその表情が一変する。

「ああ、これでやり直せる。――本当にありがとう」

希望の光が差した表情を見つめながら彼は、実感した。仕事を通して、被災したお客さまの、人生と生活と心を支援させていただくことを。そして、その社会的意義に、心が震えた。

あれから十年。常に自身を鼓舞しながら、ともに働く仲間の力を伸ばすことで、お客さまの笑顔に貢献するよう努めてきた。そして、彼が今後の使命として心に描いているのは、さまざまなデータを活用した災害の未然防止や被害の軽減、すなわち〝防災〟と〝減災〟だ。地域の災害データや気象情報、お客さまの過去の罹災歴やお客さまが保有されているデータ等を活用し、想定されるリスクや適切なリスク量を洗い出すためには、データ収集と分析が不可欠だ。池田和樹が描き始めたロードマップには、働く仲間の成長とゴールにあるお客さまの笑顔が見えている。

第9話
少女の心を開いた日から

ＳＯＭＰＯチャレンジド株式会社　山﨑智美

「山﨑智美は、生きづらさを抱えた人の背中を押す」

「何度も来ても無駄だからね、口をきくつもりはないから」

大学時代、山﨑智美は家庭教師をしていた。生徒は、小学五年生の女の子。クラスの子と口を利かない、学校の先生にも反発する。これまでに何人もの家庭教師が辞めていた。そして声をかけられたのが彼女だった。

学校のこと、友達のこと、少しずつ会話は増えていく。

「ねえ、先生。一緒に家族旅行に行こうよ」

中学校に上がるころに、少女は笑顔で誘ってきた。人が成長して変わっていくところを彼女は見た。

大学で生物学を専攻していた彼女は、広い世界を見てみたいと思い、損保ジャパンに入った。入社直後は生物学への思いが大きかった。しかし保険の奥深さを知り、学んでいこうと決めた。

「障がい者雇用の仕事をしてもらいたいんだ」

三年前、四十七歳になった彼女は、人事異動でＳＯＭＰＯチャレンジドに職場を移した。障がい者の雇用に特別に配慮した会社として、厚生労働大臣に認定されている。在籍障がい者のうち七割が精神障害者福祉手帳を持っている。彼女は会社について何も知らなかった。

世の中には、生きづらさを抱えている人たちがいる。急な変化に弱い。いつもとは違う業務、違う人との接触で体調を崩す。新しい職場で彼女は、他チームへの留学制度を実施した。参加者は大きな変化を経験する。きちんと出社できるのか不安だった。

「留学制度。行ってよかったです」

期間を終えたメンバーが笑顔で言った。その姿を見て、応募に消極的だった人が、自分も行きたいと手を挙げた。彼女は知った。環境の変化に弱いことと、できないことは別なのだと。

人は誰でも成長したいのだ。その背中を、リアルデータが押してくれる可能性もある。ウェアラブル端末で障がい者の緊張や睡眠のモニタリングし、いち早く体調の変化の予兆をキャッチし、不調のサインに対して早めに対処ができるようになれば、無理をしない働き方もできるのではないか。

だれもが生き生きと働ける社会作りに貢献したい。山﨑智美は、あらゆる人が成長できる環境を作っていく。

第10話
最期まで豊かな人生を

ＳＯＭＰＯケア株式会社　廣畑恵

「廣畑恵の介護の道を決定づけた十四歳の原体験」

その光景を目の当たりにして、十四歳だった廣畑恵は絶句した。

中学二年の職場体験の授業で訪れた高齢者介護施設。ホールでは車いすに乗せられた高齢者の方たちが、身じろぎもせず、塑像のように押し黙ったまま時を過ごしている。スタッフたちは忙しげに振舞い、彼らに声をかけようともしない。

個室は施錠され内側から開閉できなかった。高齢者の方たちは床に敷かれたマットに転がされている。衣服には勝手に脱いだり、おむつを外さぬよう南京錠が掛けられていた。床から彼女を見上げ、一人の高齢者は力なくつぶやいた。

「助けて……」

少女だった彼女は、言葉を失ったまま立ち尽くした。あの人たちに何の罪があるというのか。悲惨な老後を送る人たちのために、自分は何ができるのだろうか。

この強烈な原体験が彼女の人生を決めた。その後もボランティアでホームを訪れ、社会に出る際には迷わず介護の道を選んだ。

「最期まで豊かな人生を送れる社会を実現させるのが私の使命だと心に刻みました」

就職したのは、後にＳＯＭＰＯケアとなるホーム。ここは個々の高齢者の方に合わせた「カスタムメイドケア」を掲げていた。

「原体験が凄すぎたので、カスタムメイドケアなんか可能だろうかと半信半疑でした」

だが、彼女の考えはすぐに改まった。

「できるのだろうかじゃダメ。やらなきゃいけないのです」

介護スタッフからスタートし結婚と出産、子育てを経験。「少しは人生のキャリアを積めたかな」と彼女は肩をすくめてみせた。現在、グループホームと有料老人ホーム、二つのホームのホーム長を務めている。

「ご入居者さまが暗い顔をして車いすに座っているだけ、寝ているだけのホームにはしたくない。スタッフから積極的に語りかけ、あちこちで笑い声が出るよう心掛けています」

彼女はご入居者だけでなく、介護スタッフや看護スタッフ、ケアマネジャー、キッチンスタッフ、生活相談員らにとっても頼もしいリーダーだ。

「今後はご入居者さまのリアルデータを活用しながら、カスタムメイドケアを前進させていきます。ご入居者さまの健康情報を蓄積、分析することで効率よく最適なケアを導き出せますからね。信頼できるデータがあれば、スタッフにも余裕が生まれ、ご入居者さまとの対話も増えるはずです」

介護を必要とする人々が、豊かな人生を送れる社会に――十四歳の壮絶な原体験を糧に、廣畑恵は理想実現への道を突き進む。

第11話
仲間の存在

SOMPOホールディングス株式会社　平野友輔

「平野友輔は立ち止まって考えた。自分の人生の意味とは、何か」

小学校時代はサッカーでは誰にも負けなかった。まわりの連中は「ダメなやつばかり」に見えた。だが、いつしかサッカーからは距離を置くようになっていった。高校時代もサッカー部に入ってみたものの、すぐに辞めてしまった。

「もういい、俺は俺だ」

そんな自分を変えてくれたのは、大学のサッカー部の仲間たちだった。

「平野、小さい頃からサッカーやっていたんだって。一緒にやろうぜ」

パスを回してくれた気がした。チーム一丸となってゴールを目指す喜びが甦ってきた。

「一人が好きだと思っていたけど、やっぱり仲間と一緒のほうが楽しいな」

社会人になって最初に配属された青森支店でも、慣れない仕事で大変だったが、楽しかった。上司や同僚と一緒になって泣き、笑い、目標に向かってひたすら走り続けた。

それからキャリアを重ねるにつれ、仕事の内容も変わってきた。子会社の建て直し、人員整理、コストカット……自分ひとりで向き合わなければいけない案件が増え続けた。感情のコップはいつも溢れんばかりだった。

そんなときに出会ったのが人生の目標、自分のなすべきこと、MYパーパスだった。「自分と向き合い、なんのために生きるのか、なぜ働くのか、もう一度考えてみよう」。その櫻田CEOの言葉に、彼は足を止めた。そして考えた。この会社に入って、自分はいったい何を目指していたのだろうと……。

そしてついに見つけた。自分のパーパスは「より良い世界へ向かっての動力となる」ことだと。志を同じくする仲間とともに、会社や社会がより良い方向に向かっていく瞬間に立ち会えることが、自分にとってはなによりの喜びなのだと。それは、ゴールが決まって、チームメイトと抱き合って喜ぶ歓喜の瞬間に似ている。いつの間にか閉じていた自分が、また開きだした気がした。

彼はいまグループのサステナビリティ戦略の計画立案とパーパスの浸透を推進する仕事に取り組んでいる。社員一人ひとりの原体験にもとづく「ミクロのMYパーパス」と「マクロのパーパス経営」を重ね合わせることができれば、それは会社にとって大きなチカラとなる。

「何のために働くのか、もう一度考えてみよう」

彼はその問いかけを全社員に発信し続ける。フィールドでパスを回し続けるように。

第12話
春風のなかの後悔

損害保険ジャパン株式会社　芝池淳一

「芝池淳一は、あらゆる人が安心して暮らせる社会を実現したい」

やわらかな風に、春の香りが混じりはじめた、三月半ばのことだった。当時大学生だった芝池淳一の携帯電話が、突然鳴った。昔からよく遊んでいる地元の仲間のひとりからだった。

「どうしたよ？　また合コンか？」

へらへらと笑いながら電話に出た。しかし耳に飛び込んで来たのは、十年来の親友、ミキオの訃報だった。左折して来た大型トラックに巻き込まれてしまったのだという。いつも一緒にバカ騒ぎをして、くだらないことで笑いあった、あのミキオが……。信じられなかった。

あの事故は防げなかったのだろうか。その後も彼の胸のなかで、悔しさと無力感がじわじわと広がりつづけた。就職活動を始めた彼は、いつしか、ある思いを抱くようになった。

「あらゆる人が、安心して暮らせる社会を実現したい」

そんな熱い想いが進むべき道を指示していた。彼は損保ジャパンを選んだ。

ＳＯＭＰＯでは、独自の価値創造システム、リアルデータプラットフォームを構築している。さまざまな実際の交通データを活用することで、交通事故が起きやすい条件を割り出し、未然に事故を防ぐ。それだけではない。自動車系メーカーの事業データを活用・管理し、さまざまなリスクを減らすことで、安全技術の開発を陰で支えることもできる。会社の進む方向と彼のやりたいことが重なっていくのを日々感じている。

やわらかな風に、突然電話が鳴ったあの日のことを思い出す。春の訪れが近づくたびに、ミキオをうしなったときの悲しみに包まれる。もう何年も経つのに。

交通事故はまだ、なくなっていない。それどころか、いまこの瞬間も、どこかで事故や災害が起きている。だれかが、傷ついている。

「まだまだ、立ち止まるわけにはいかないな」

だれに話しかけるでもなく、小さく、彼はそう呟いた。

第13話
自信と活力

SOMPOコーポレートサービス株式会社　塩田佳奈

「塩田佳奈は、お客さまに寄り添う仲間を縁の下から支える」

「かなちゃん、まだ？　はやくはやく！」

十歳の塩田佳奈は体操服の着替えに手こずっていた。友達はそう彼女を急かすと、パタパタと校庭へ向かって駆け出した。必死にその後を追いかけながら、胸の奥がチクンとした。体育の着替えだけではない。授業中に問題を解く、課題の工作を仕上げる、給食を食べるスピード。何をするにも、友達よりワンテンポ遅れてしまう。

「なんでアタシだけ、みんなと同じようにできないんだろう。ダメな子なのかな……」

そんな小さな積み重ねが、少しずつ彼女の心から「自信」という灯火を消していった。

彼女が、もう一度心にその火を灯すことができたのは、社会人になってからのことだ。大きな時代のうねりの中で、自分の働く会社が「合併」する。彼女は、二つの会社の異なるシステムを統一する業務に明け暮れた。

取り組んだのは、自動車保険の支払い部署と、営業部署の収益を高める新たなスキーム。二社の関係各所と連携し、細かい調整をくり返す。相手の声に耳を傾け、最適な方法を模索するのは根気が要る作業だったが、苦ではなかった。みんなで協力して作り上げる喜びも知った。

「塩田さんは、大変な時でも前向きに頑張る姿がいいよ。みんなの模範になるね」

スキームの完成後、上司からそう労われると、彼女は胸が熱くなった。

「もしかして私、誰かの役に立てている？」

初めて強く実感できた瞬間だった。

その後、夫の転勤で一度仕事を離れたが、彼女は再びSOMPOにいる。新たな仕事は、四十三階建ての本社ビルの使用に関するルールを作る管理業務。「お世話になった人たちが働く本社ビルを、安全に快適に使えるように整えることで恩返しがしたい」

そんな思いで取り組み始めて一年半が経つ。コロナ禍でテレワークが続くなか、POPの工夫でゴミの分別を楽にするなど、小さな工夫も続けている。本当は実際に自分の足で社内をくまなく歩き、気づいたことを管理システムに反映させていきたい。温度や湿度、換気の調整と、社員の健康との関係。リアルデータが節電や感染対策など、さまざまな形で役立つのではないか。そんな予感もある。

血の通った管理システムで本社社員を支える。塩田佳奈の新たな挑戦は始まったばかりだ。

第14話
組み立てることは、支えること

ＳＯＭＰＯビジネスソリューションズ株式会社　岡田大輔

「岡田大輔はお客さまという灯火で保険の未来を照らす」

東日本大震災から二か月後、彼は壊滅的な被害を受けた石巻市の支社にいた。現地のスタッフの多くが被災したため、応援要員として駆けつけたのだ。

ある日、店頭に中年男性が訪れ、こう言った。

「津波に巻き込まれて保険証券も何もないんですが、自動車保険を解約してお金が戻るんなら、生活の足しにしたいんです」

男性は疲れ果てた様子で、表情は不安に満ちていた。

当時は震災による特別な規定により、本人確認が取れれば解約手続きが可能だった。彼は即座に処理を進め、わずかではあるが解約返戻金を男性に手渡した。男性は安堵したように笑みを浮かべて支社を後にした。

小さなころから、プラモデルを組み立てたり、旅行の企画を立てたり、モノや仕組みをつくるのが好きだった。自分のつくった企画や資料が友人から喜んでもらえると、彼はいきがいや喜びを感じた。それは、入社してからも変わらなかった。彼は営業として数々の販売戦略の仕組みをつくり、その成果は会社から評価された。

しかし、保険は人々の生活や人生に密着している。成績を上げる手段というだけでなく、いざというときに安心を提供することで、お客さまの笑顔がみられる仕事が損保なんだ――。東日本大震災は、入社してから十数年を経て初めて、取扱代理店を介さず、自分の目と心でお客さまという存在をとらえた経験だった。

現在、彼は専業の保険代理店を対象に支援策を立案し、運用する業務に携わっている。時には他社の保険代理店にアプローチすることもあり、企画には高い戦略性と積極性が求められる。専業代理店向けの新たな仕組みづくりもチームとして準備中だ。

しかし、いくら精巧な仕組みを作ってもお客さま視点の価値判断が欠けた戦略には意味がない。今、彼を突き動かしているのは、新たな価値を創造して、お客さまや代理店、周囲の仲間たちに喜んでもらいたいという想いだ。

そして目指す先は、お客さまからＳＯＭＰＯだから選んだといわれる会社にすること。その道には、震災で出遭った〝お客さま〟の笑顔が灯火のように輝いている。

第15話
北京、リオ、東京五輪の舞台の先に

ＳＯＭＰＯケア株式会社　小野真由美

「小野真由美は、介護現場で働く人々に光を当てる」

小野真由美は一年ぶりに、フィールドホッケーのコートに立っていた。日の丸とＳＯＭＰＯのロゴを胸に。

ホッケー日本代表「さくらジャパン」のユニフォームを再び着られることが、ただただ嬉しく、誇らしかった。彼女の胸には、十七歳で初めて日本代表入りしたときと同じ感動がよみがえった。

北京、リオデジャネイロとオリンピックの舞台を経て、現役から退いた彼女は一社員としてＳＯＭＰＯケアの広報部に所属していた。そんなとき、彼女に日本代表選手の選考会の話が届いた。

彼女の心は揺らいだ。三十三歳という年齢で三年後の東京オリンピックを目指せるか、身体的にも不安があった。そもそも選手として選ばれないかもしれない。ずっと代表選手としてやってきたというプライドも邪魔をした。

しかし、それ以上に強い想いが彼女のなかにあった。もう一度、自分のプレーでホッケーの素晴らしさを伝えたい。すべての不安と情熱をＳＯＭＰＯケアの当時の会長、奥村氏に伝えると、返ってきた言葉はただひと言だった。

「後悔のない人生を歩みなさい」

この言葉に背中を強く押され、彼女は現役復帰を果たした。

現役復帰から三年。東京オリンピックを前に彼女は引退した。オリンピックにもう一度出たいという気持ちはあったが、力が及ばなかった。後悔がないと言ったら嘘になるかもしれない。だが今は広報誌の制作に全力で取り組んでいる。落ち込むこともあるが、そんなとき、彼女の心を奮い立たせるのは、初めて介護現場を訪れた際の想いだ。

彼女の目には、介護現場で働くスタッフがアスリートと同じプロフェッショナルとして映った。すべてのご入居者に対して、「人間尊重」を体現し、その人らしい生き方に寄り添って接している。その姿はとても輝いていた。

彼女にとって一番キラキラしていた場所、それはホッケーのコートだった。

介護現場で働いている人にとっては、ここがコートなんだ――。そう彼女は気づいた。

介護現場というコートで、働く人たちがもっと輝けるように、その姿を伝えていきたい。現役時代、多くの人が応援し、背中を押してくれたように、今度は自分が介護業界のサポーターになる番だ。そう心に決め、小野真由美は新しい人生を力強く駆け始めている。

第16話
新時代の『読み・書き・算盤』

SOMPOホールディングス株式会社　加藤素樹

「加藤素樹は、世界に伍して戦える日本人を育てる」

「モトーキ、それ何？　黒い石みたいだけど」

海苔でくるんだおにぎりに興味を示したのは、両親がエジプト人のナギーブだ。

「食べられるの？」「もちろん。ライスボールさ」

加藤素樹が家族とともに米国ニューヨークに移り住んだのは、小学校三年生のとき。すぐに地元の小学校に通うことになった。そこはまさに〝人種のるつぼ〟だった。アフリカ系アメリカ人、イタリア人、韓国人、アラブ人、マレーシア人……肌の色も言葉も違う世界各国の子どもたちが同じクラスで学んでいた。

今日は子どもたちが自分の国の食べ物を持ち寄るランチ会。彼は大好きなおにぎりをお母さんに作ってもらったのだ。初めてみる料理に目を輝かせながら、子どもたちは見知らぬ国の話に耳を傾ける。「世界にはいろんな国があって、いろんな人がいる。だから面白いんだ」。彼はその多様性を肌で感じ取っていた。

三年後、日本に戻った彼のなかに、ひとつの夢が生まれた。いつか自分も世界を舞台に活躍してみたい。その夢はいつしか確固たる目標となっていった。

しかし、金融・保険の世界でグローバルに活躍することを目指し、実社会に出た彼が目にしたものは、旧弊な日本社会のありようだった。横並び重視の画一主義、悪しき前例主義、どれもが日本企業の足かせになっている。

「変化を恐れていては何も生まれない。古いやり方と決別しなければ、世界に伍して戦うことはできない」

その思いは、キャリアを重ねるにつれて膨れ上がっていった。四十代、ロンドンで買収先企業の経営に携わり、イギリスと日本の「彼我の差」を痛感したことが彼の背中を押した。「世界で通用する人材をこの手で育成したい」。会社への直訴だった。

帰国後、人事部に配属された彼はグローバルタレントマネージメントをゼロから立ち上げた。自身のなすべきこととは何か、と問われたときも、彼は迷わずに答えた。「社員一人ひとりが伸び伸びと働ける企業文化を作り、世界に伍して戦える強い日本企業を作る。そのための強い日本人を育てる」。それは揺るぎない信念だった。

そして、いま取り組んでいるもうひとつの課題がデジタル人材の育成だ。「リアルデータを活用して何ができるか、という発想を全社員が持つことが重要。そのためにも、新時代の『読み・書き・算盤』を習得したデジタル人材をこれから育成しなければいけない」。

米国時代、素樹少年の目に焼き付いた風景がある。アリゾナの雄大な自然だ。遠くモニュメントバレーの絶景を望む荒野を真っすぐに伸びる国道。それは五十歳となった彼の目の前に広がっている風景かもしれない。目指す目的地はすでに見えている。彼はひたすら車を駆って、前に進む。常にフルスロットルで。

第17話
自分を変えて気づいた使命

株式会社フレッシュハウス　河野雄介

「河野雄介は、笑顔をバロメーターに想像を超えていく」

「ここはちゃんと確認しておけよ」

河野雄介は営業所長として、いつものように部下に細かく指示を出した。

「わかりました」

そう返ってくるが、視線を合わせようとしない。いつからだろうか、この営業所から笑顔が消えたのは。

彼が育ったのは、笑顔の絶えない家庭だった。だからこそ、彼は強く思った。

このままではいけない。

彼はリフォームの営業として、やるべきことを細かく決め、それを淡々とこなすタイプだ。そのほうがお客さまや現場からのクレームが少なく、効率的だと自負していた。所長に就任し、五人のメンバーにも自分の仕事のやり方を指導した。しかし、部下たちがその通りに動くことはなかった。そして、売上も下がっていった。

人は変えられないと気づいたとき、彼は自分の考え方を百八十度変えた。まずは細かく指示するのをやめた。お客さまや現場からのクレームが増えたが、彼は部下を責めることなく、一緒に解決策、改善策を模索した。そうしているうちに、部下から相談されることが増えていった。そして何よりも彼の心を熱くさせたのは、営業所に笑顔が戻ってきたことだった。

それから三年。営業目標の達成が厳しかった月も皆で乗り越えることができた。過酷な状況だったが、皆の顔は明るかった。全員が同じベクトルを向いているのを感じた。

メンバー一人ひとりの営業としての個性も見えるようになった。現場に何度も足を運んだり、手紙を書いたり、スタイルはさまざまだが、それぞれがお客さまの声を聞き取るアンテナを持っている。それがお客さまの満足度につながるのだと気づいたとき、彼は心に決めた。

もっとアンテナの感度を上げて、お客さまの想像を超えた満足を提供したい。自分の使命は、メンバーが力を発揮できるように明るく透明性の高い職場環境をつくることだ。さらにリアルデータを活用し、ライフイベントに応じたリフォームのタイミングなど、よりお客さまの人生に添った提案も可能になるだろう。

「河野さん、所長に向いていますね」

そう部下から言われ、素直にうれしかった。笑顔で返すと、また笑顔が返ってくる。もう二度とこの笑顔を消してはならない。そう心から思う。

第18話
心を受けてみる

損害保険ジャパン株式会社　後藤愛

「後藤愛は、いろんな人の意見を聞き、つないで、心地良い場を創りたいと思う」

ダン、ダダッダ、ダン。中島みゆきの「地上の星」の荘厳なドラム音が鳴り響くと、舞台中央に集まっていたクラスメイト約四十人がスポットライトを浴びて動き出した。体育館を埋めた他のクラスや観客たちが、ザワザワとどよめく。あちこちで「おおっ」と驚く声が、舞台上の彼女にも伝わってきた。

鳥肌がたった。

高校三年生の秋、文化祭での伝統行事「クラス対抗歌合戦」のときのことだ。各学年ごとに九クラスがミュージカル風に歌とダンスを披露し、順位を競う。クラス全員が参加し、彼女は全体調整のような役を担った。曲を決め、歌唱練習、ダンスの振り付け、音楽編集など、各自が得意な分野を担当し、約三か月かけてひとつの作品を創りあげる。だが、その間、必ずしもみんなの気持ちが一つにまとまっていたわけではない。教室の外からセミの声が激しく聞こえた夏休みのある日、本格化した練習の休憩中、少しずつ不満が漏れてきた。

「受験もあるのに、そんなにできないよ」

「ちょっと、ついていけない」

声にならない声が、教室の隅から聞こえたように感じた。

「一度、本音で話し合ってみない」

彼女はそう声に出していた。知らないうちに周りが見えなくなっていたのかもしれない――。

あれから二十年が経った。今でも高校時代の同級生に会うと、あの文化祭のときの話になる。

「あのとき、本音で話そうって声をかけてくれたこと、覚えてるよ」

同級生が言ってくれた。

一人ひとり、個性も考え方も違う。二位になったことよりも、本音の話し合いをしたあと、クラス全員の気持ちがひとつになり、作品を創りあげていったときの充実感は今でも覚えている。それは、ＳＯＭＰＯに入社してからも、いつも心のどこかにあるような気がする。これまで、サステナビリティ推進や新事業開発に取り組んできた。社内外の多様な人と連携する機会も多かった。それぞれの関心のある分野や強みを活かし、さまざまな意見を出し合いながら物事を進めるよう心がけた。一人ひとりの意見を聞くという意味では、あの夏と同じだった。

「愛」という字は「心」を「受」けるという意味だと、彼女は聞いたことがある。

一月からは新しい部署に移ったが、どこにいても、いろんな人の心を受けて、つないで、心地よい場を創り続ける。

――なぜなら、私は後藤〝愛〟だから。

第19話
介護職は「かっこいい！」

ＳＯＭＰＯケア株式会社　森田亜希恵

「森田亜希恵は、介護に〝誇り〟を持てる社会をつくる」

風光る空、木洩れ日が踊る季節。大学で社会福祉学を専攻する森田亜希恵は、夏休みの数日間を、特別養護老人ホームのボランティアとして過ごした。だが、そこで見た光景は衝撃的なものだった。食堂には車椅子に座ったまま、うなだれているご入居者。献立がまったく分からないほどドロドロなペースト食。業務をこなすのに精一杯で、笑顔がないスタッフ。これが介護の現実かとショックを受けた。同時に彼女は覚悟を決めた。このままではいけない。高齢者の方が日々の生活に楽しみを感じ、スタッフもいきいきと働ける環境をつくれないものか。

「当社では嚥下状態の低下している方でも美味しく、目でも楽しく召し上がれる食事を開発しました」

就活時、ＳＯＭＰＯケアの前身となる介護事業会社の説明会にてホスピタリティを最重視する理念を聞いた彼女は「この会社でなら介護の現実を変えられるかもしれない」と思い、入社を決めた。

あれから十余年。予想もつかないことが日々起こる現場で葛藤と工夫を繰り返し、人間的に成長できた彼女はあらためて確信する。

「介護はだれにでもできる仕事ではない」

介護職は家政婦の延長とする古い時代の風潮を引きずり、だれにでもできる仕事だというイメージを持つ人は、いまだに多い。それゆえ三年前、ＳＯＭＰＯケアの遠藤社長が『介護プライド』を打ち出した際、彼女の考えとまったく同じ発言を聞いて、「この会社にいてよかった」と心から思った。彼女の夢は、介護を受ける人も、する人も、誇りを持てる社会をつくることだ。

高齢者の方は〝人生の達人〟だと彼女は思う。長い人生のなかで、さまざまな苦難を乗り越えてきたからこそ紡ぎ出される言葉たちに、何度も救われ、多くの学びや気づきをもらった。支援を受けることに対して「迷惑をかけて申しわけない」などと思わせてはいけない。同時に介護をする側も、「だれにでもできる仕事ではない」という誇りを持って働ける社会にしていかなければいけない。そのためには、提供するケアの品質、ご入居者の満足度をさらに向上させるＳＯＭＰＯのリアルデータの活用が不可欠だ。

残念ながら、介護職の意義が社会にうまく伝わらず、自分の仕事に誇りを持てないスタッフも少なくない。単なるイメージアップでなく、心の底から「通り一遍ではできない、奥の深い仕事に携われているのだ」ということを伝えていきたいと願う。

「介護職が『えらい』ではなく『かっこいい！』と思われる社会を目指して、私はこれからも声を上げていきます」

第20話
完璧主義者を変えた子育て体験

ＳＯＭＰＯひまわり生命保険株式会社　有賀千智

「有賀千智はオン、オフとも笑顔で成長していく」

職場の窓に夕陽が差し込んできた。

「いやだ、もうこんな時間！」

有賀千智は時の流れを止めてしまいたかった。まだ業務が残っている。だけど、すぐ会社を出て保育園に子どもを迎えにいかなければならない。その後は夕食づくり、洗濯や保育園の準備、入浴などをこなす。

「仕事はもちろん、子育てや家事もいい加減に済ませるなんてできない。だけど……」

後ろ髪を引かれる思いでパソコンを消す。思わず生あくびが漏れた。彼女は慌てて口に手をやった。子供は夜泣きが激しい。睡眠不足のまま目覚めれば、朝の家事と登園準備が待っている。夫に保育園への送りをお願いしたあと、急いで身支度を整え、仕事のスケジュールを確認する日々。つい、ホンネが出た。

「そろそろ限界かもしれない」

彼女の直面した事々は、多くの働く女性が抱える悩みでもある。

「でも、あの言葉で考え方が変わりました」

きっかけは、切羽詰まった気持ちで受けた育児相談。担当者は穏やかに語った。

「有賀さんはすごい。もう充分にがんばっています。でもね、お子さんは必死になっているママより、いつも笑顔でいてくれるママのほうが好きなんじゃないですか」

もう少し、のんびりと構えてみては？　そして失敗や心残り、イヤなことがあっても笑顔でいてほしい――こう諭され、胸にしつこく巣食っていたこだわりがストンと落ちた。

「素直な気持ちで、私や会社の人たち、家族と笑顔で成長していきたいと思いました。そして、これが私の使命になったんです」

彼女が保険業界に身をおいたのは、生命保険がお客さまと一生涯にわたってつながっていく商品だから。保険を通じて、お客さまの健康で豊かな人生をサポートできれば最高だから。

「だったら、なおさら笑顔でいなくっちゃ」

その後、彼女はもう一人、子供を産んだ。もちろん仕事を続けているが、以前の彼女ではない。心にゆとりを持つ効果は抜群だ。

「でも、子供を言いわけの道具にはしません」

彼女は取扱代理店を訪れ、目標達成をアシストしている。このところは、リアルデータの活用を提唱することが多い。

「がんの早期発見に役立つアプリや健康プログラムをお勧めしています。お客さまに情報提供しながらデータを収集することができれば、新サービスの開発にもきっと役立つはず。データを活かすことで、生命保険会社から健康応援企業へ成長していけると思っています」

かつての完璧主義者は今、にこやかに、軽やかにオンとオフを行き来している。

第21話
最後まで寄り添う食

ＳＯＭＰＯケア株式会社　真木大輔

「祖母の笑顔を思い出しながら、真木大輔は食の向上に精を出す」

旅館育ちで料理上手。大好きだった祖母は、真木大輔がフランス料理のシェフとして働き出すと大喜びし、いつしか「ダイくんのお料理が食べたいわ」が口癖になった。

彼もまた祖母が喜ぶ顔を見たくて、実家に帰るたびに自慢のフランス料理を振る舞うようになった。一度、鶏好きの祖母に鶏の赤ワイン煮を食べてもらったところ、「うまか！」を連発した。骨までしゃぶる姿を見て、料理人になってよかったと心の底から思った。

そんな祖母が突然、糖尿病で入院した。仕事の合間にお見舞いに行くたび、目に見えて痩せ衰えていく。認知症も発症し、「ダイスケが来たよ」と話しかけても、「だれかのう」とおぼつかない答えが。

なによりもつらかったのは、食事がのどを通らず、苦しそうにしているのを目の当たりにしたこと。「もう自分の料理を食べてもらえないのか」と思うと泣いてしまった。

止まらない涙をぬぐううちに、彼の中に強い思いが湧き上がってきた。

高齢になっても、そして病を患っても、人生の最期まで食べたいものを食べられる社会をつくりたい――。

彼はＳＯＭＰＯケアのホームで働きはじめ、ご入居者の食事提供に携わるようになった。

味、見映えに問題の多かった高齢者向けの形態食。だが現状に甘んじることなく、「もっといいものができるはずだ」と闘志をかき立て、メニューの改善、開発に没頭した。

嚥下機能が低下した人に向けてのピューレ食、その調理には水分が欠かせない。だが、薄味になるという課題があった。試行錯誤をくり返した結果、高栄養でしっかりした味の肉じゃがを完成させ、「とてもおいしくなりましたね。ありがとうございます」という喜びの便りが届いたとき、祖母の「うまか」が聞こえたような気がした。

そんな彼には、頼もしいパートナーがいる。ＳＯＭＰＯ独自のデータ管理だ。毎食ごとの食事摂取量が客観的なデータとして蓄積され、個々のメニューの改善精度が飛躍的に向上した。

食によって、だれかの人生を幸せにしたい。

彼の作るものがフランス料理からご入居者の食事になった今も、その思いは変わらない。祖母の死に立ち会ったことで、人生の最期まで豊かな食で寄り添うことが彼の使命となった。

ホームの食堂に足を運ぶたび、そこにいるご入居者お一人おひとりが、亡き祖母の面影に重なる。そのたびに真木大輔は思う。

いいものを、もっといいものをつくろう、と。

第22話
坂本龍馬になりたい

ＳＯＭＰＯひまわり生命保険株式会社　菅原政道

「菅原政道は人に寄り添い、その言葉に辛抱強く耳を傾ける」

憧れは、坂本龍馬だった。

下級武士の家に生まれながら、最後には仲間とともに歴史に残る偉業を成し遂げる。二十歳の菅原政道は、そんなふうに生きてみたいと願っていた。しかし、昔から何事もそつなくこなす反面、何かに打ち込み、成し遂げたという経験に乏しいのがこれまでの彼の人生だった。胸のうちで、坂本龍馬へのコンプレックスのような感情が膨らんだり縮んだりしていた。

彼を変えたのは、当時家庭教師をしていた、十四歳の少年との日々だった。少年は最初のころ、勉強にも、彼自身にも、興味を示してくれなかった。しかし、彼は粘り強く少年に話しかけた。春が過ぎ、暑い夏がやってきても、少年のもとに通った。勉強だけでなく、自分が興味を持っていることを語り、少年がポツリポツリと話すことを熱心に聞いた。少年はやがていろんな話をしてくれるようになり、彼が教える勉強にもやる気を見せるようになっていった。

翌春、少年は志望の高校に合格した。そのころにはもう、彼と少年は、まるで兄と弟のように語り合う仲になっていた。

――やっと、成し遂げられたか。

桜が舞うなか、得も言われぬ充足感と誇りが胸のうちにみなぎるのを感じた。人に寄り添い、その言葉に辛抱強く耳を傾け、偉業をなす。そんな坂本龍馬の生き方に、少しだけ近づけたような気がした。

現在、ＳＯＭＰＯひまわり生命の支社長として、管下社員二十五名のマネジメントを行う彼は、部下に寄り添うこと、彼らの声に耳を傾けることを大切にしている。彼らは〝仲間〟だ。仲間たちの心と体の健康を保つのも、大切な役目だ。そもそも社員一人ひとりが健康でなければ、お客さまに対して健康の大切さを伝えられない。

自らが扱う保険という商品も、万が一の備えであるだけでなく、もっとお客さまの人生に寄り添うものであってほしい、と彼は考えている。健康に関するさまざまなデータを収集・蓄積し、お客さま一人ひとりのための提案を進めていく。リアルデータの活用は、お客さまの人生を、もっと健康で充実したものに変えていくはずだ。

この国に新しい光をもたらした坂本龍馬の背中が、いま、菅原政道には見えている。

第23話
チームプレイゆえの達成感

損害保険ジャパン株式会社　渡辺誠司

「渡辺誠司のミッション・ドリブンが、メンバーに伝播した日」

家では仕事の話をしない父が、ふと言った。

「日本で一番いい会社、どこか知ってるか？」

「え？」

「俺が勤めている会社だよ」

何気ない会話だったが、彼の心の片隅に残った。就職活動を始めると、次第に父と同じ業種を回るようになり、最終的にＳＯＭＰＯを選んだ。

一件、一件、小さな契約を積み重ねていく営業職を十年。〝個人で稼いでなんぼ〟という地道な世界で一生懸命がんばった。大きな契約を一人で取って、評価も受けた。

十一年目、本社で大きなディーラーの担当になった。初めての複数人でのチームプレイが思いのほか肌にあった。一人の業績を褒められたときよりも、チームで褒められたほうが達成感に満たされることを知った。

それからは組織での仕事に夢中になった。朝から晩までメンバーとともに過ごし、目標に向かって走った。仕事が面白くて仕方なかった。そのとき、仲間が心をひとつに立ち向かうことの強さ、面白さを思い知った。

これこそが、自らの使命に突き動かされ、働きがいを実感しながら働くことにより、価値を創り出すこと、つまりミッション・ドリブンであることを実感した。

この経験は、部をまとめる立場となった今も大きな指針となっている。今期、ミッション・ドリブン文化を部に浸透させるための新プロジェクトを立ち上げた。部長である彼は旗振り役であり、実際の活動は公募したメンバーに委ねた。

気づくと、メンバーは自らの意思で映像や冊子を作ってミッションを共有し、議論の場を作っていた。みな生き生きと輝き、楽しそうで、部はポジティブな空気に満たされた。そんなある日、メンバーの一人がふと漏らした。

「忙しいけど疲れませんよ。家でもプロジェクトについて、こうしたらいいのではないか、ああしたらいいのではないかと考えてしまうんです」

彼はうれしくなった。ミッション・ドリブン文化が確実に広がってきていると。この感覚を一人でも多くの人に持ってもらいたい。そう思いながら、今日もメンバー一人ひとりに目を配り、そっと背中を押していく。

第24話
突然失われる日常

ＳＯＭＰＯひまわり生命保険株式会社　島田拓実

「島田拓実は後悔の念を胸に、前へ進む」

島田拓実にはいまだ消えない後悔の念がある。

三年前のことだ。大学卒業後、ＳＯＭＰＯひまわり生命で働くことが決まっていた彼は、最初の赴任先が秋田支社となり、「だとすると、おばあちゃんにしばらく会えないかもしれないな」と考えて、静岡にいる祖母を訪ねた。自他ともに認める「おばあちゃん子」だ。社会人として厳しい日々を過ごすことになる前に、ゆっくりと甘えておきたかった。

祖母は自身も好きだという海の幸をたっぷり膳に並べて彼を迎えてくれた。しかしそのとき、祖母がしきりと背中のあたりを気にしていることに気づいた。

「ここんとこ急に、背中が痛いのよ。なんだか息苦しいような気もするしね」

祖母の年齢を考えると、あちこち痛くなってくるものかもしれない。彼は、「あんまり痛いようなら、お医者さんに診てもらいな、ね？」とだけ返した。

「そうだねぇ、拓ちゃん。歳はとりたくないねぇ」

と答える祖母の笑顔を見るのはそれが最後になった。二日後、祖母は急逝した。虚血性心疾患だった。あのときの背中を気にする様子はその前触れだったのかもしれない。医師でもない彼が予兆に気づくことはできなかっただろうと慰められたが、「なにかできたのではないか。おばあちゃんに、もっと違う言葉を掛けられたのではないか」という後悔が消えることはなかった。

身近な人が突然この世を去るのは初めてではない。高校生のとき、同級生が亡くなった。クラスは別々になっていたが、前日も普通に言葉を交わしていた。

「なあ、お前さあ、本当は……」

同級生に掛けられなかった言葉が彼の中に残った。

あるのが普通だと思っていた日常が突然、変わってしまう。そしてあとに残される、「あのとき、ああしておけば良かったのに」の想い。その後悔の念は消えない。だから彼は、せめて自分の言葉や行動で人々を支え、一人でも多くの人の助けになりたいと思うようになった。

ＳＯＭＰＯひまわり生命で働くようになってから、その思いは強くなった。いまではそれが自分の使命だと感じている。

豊かな自然に恵まれた秋田の地では、人々はゆっくりで優しい。彼はそんな優しい人たちに「まさか」に備えてほしいと語りかけている。そしてリアルデータを活用することで、ご契約者の備えがより確かなものになっていくのではないかと考えはじめている。

北の日本海の幸に舌鼓を打ちながら、「これ、おばあちゃんにも食べさせたかったな」と彼は胸の内で祖母に話しかけている。

第25話
次は地域貢献

損害保険ジャパン株式会社　江川敦子

「江川敦子は前に進む。自分が自分らしくあるために」

学校からの帰り道、クラスメイトの安子が小走りで追いかけてきた。

「うちさぁ、今度のテストの平均点が八十点以上だったら、親に小遣い上げてもらえることになったんじゃ。いいじゃろ？」

「そうなんじゃね。よかったじゃん。頑張りんさいよ」。江川敦子はどこかぎこちない笑顔で、安子の背中を見送った。

普通の家はそうなのだろう。でも、うちは違う。彼女は小さい頃から親にほめられたことがなかった。テストで百点をとっても、クラスで代表に選ばれても、両親からは厳しい反応しか返ってこない。「いい成績をとるのは当たり前」。「勉強以外のことに力を入れても意味はない」。

一生懸命やっているのに……。あたしってダメなのかなぁ。幼い頃、そんな思いにとらわれたこともあった。でも、近所のおばちゃんやクラスメイト、学校の先生たちは、いつも彼女をほめてくれた。「敦子ちゃん、算数、得意なんだねえ」「江川のおかげで、体育祭盛り上がったよ」「敦子のアイデア、サイコー」。小、中、高、大学と、まわりの人たちからの称賛が彼女のこころの安定剤となった。

数字やデータを扱うのが好き。自分で企画を立てるのが好き。人前に立って新しい提案をするのが好き。自分の得意なもの、自分の強みを発揮することで、まわりの人はちゃんと評価してくれる。そんな会社で働いてみたい。先輩社員たちの〝人柄〟に魅かれて入社した損保ジャパンで、彼女はＭＹパーパスと向き合うことになる。

自分を内面から突き動かすものとは何か。自分のミッションとは何か。彼女が導き出したＭＹパーパスは、「自分が自分らしく」生きること。そして、自分のまわりの人が「その人らしさ」を活かしていける環境をつくること、だった。

ＭＹパーパスの実現にむけて、彼女はすでにアクションを起こしている。昨年度は中国地区内の七部署でストレングスファインダーの「強みワークショップ」を開催、講師を務めた。ＭＹパーパスと同様に、原体験にまで遡って自分の強みと仲間の強みを知ることで、相互理解を深めようというものだ。

「まずは自分に向き合ってもらう。そして自分の強みをどう発揮すればいいのかを、一人ひとりに考えてもらう。その気付きが大事です」

彼女の強みがいかんなく発揮できそうな大きな案件が待ち構えている。地元広島への地域貢献だ。

「近年、広島では自然災害による大きな被害が出ています。例えばリアルデータを活用して防災・減災につなげたり、広島の皆さんに喜んでもらえるような、ＳＯＭＰＯにしかできないことを仲間たちと今後一緒に企画し、実行できたら、地元やまわりの皆さんへの恩返しになると思っています」

自分が自分らしくあるために。江川敦子の声は弾んで聞こえた。

第26話
親の健康と、家族のしあわせ

ＳＯＭＰＯひまわり生命保険株式会社　田中宏典

「田中宏典は、子育て世代が健康に過ごせる社会を目指す」

子どもにとってクリスマスや年末年始をはさむ冬休みは、ワクワクした特別感がある。だが、田中宏典の九歳の冬は、いつもと様子が違っていた。小学校の終業式が終わると、自分だけ祖父母のもとに預けられたのだ。

「お父さんね、おなかを治すのにもう少し入院が必要なの。ヒロくん、おにいちゃんだから大丈夫よね？」

幼稚園に通う五歳下の弟はまだ手がかかる。兄弟二人の世話をしながら、毎日病院へ行き、父の介助もしなければならない母の負担は大きくなっていた。

祖父母は大好きだったが、家族で遊びに行くのではなく、家の事情で自分一人預けられることに心細さが増した。

「お父さんが元気じゃないと、家族はバラバラになっちゃうんだな」

子ども心に深く刻まれた出来事だった。

それから三十年の時が流れ、彼は生命保険の営業現場にいる。

あのとき、幸い父は半年ほどで退院できた。小学生の自分には、入院が長引けば、経済的な不安や負担が膨らんでいくという現実まで見えていなかったが、その後、中学時代に事故で父親を亡くした友達を介して、生命保険の重要性を知った。

「万が一の備えって大事なんだ。自分や家族の人生に関わることなら、知らないまま過ごすより、ちゃんと理解したい」

そう思って飛び込んだ世界だった。

生命保険の役割はここ数年で広がり、「万が一」に備えて経済的な保障をするだけでなく、その「万が一」をできるだけ無くす健康サポートまで担う提案もできるようになった。〝人生百年〟と言われるなかで、健康寿命を延ばすことは重要な柱の一つだ。介護や認知症に対する備えにはさまざまなリアルデータが活用され、カスタムメイドのケアが可能になっている。

一方で、彼自身も家庭を持ち、当時の父親と同じ年代になったことで、子育てにお金のかかる二十代、三十代の健康サポートの重要性も痛感している。糖尿病、がんや認知症などとの関連性が指摘される歯周病のデータを取れば、将来的にさらに「万が一」を無くす一助になるのではないか。そんな想いもある。

「親である自分が健康でいることが、家族のしあわせにつながる」

それを広く伝えるために、担当代理店の営業社員と田中宏典の二人三脚の日々は続く。

第27話
「ふつうの生活」が一番大切

ＳＯＭＰＯケア株式会社　新坂彩夏

「新坂彩夏は、皆が笑顔で楽しく過ごせる世界のために働く」

下町に生まれた新坂彩夏は、幼い頃から高齢者の方と接する機会が多かった。同居する曽祖父母の世話を率先して手伝い、祖母と行く近所の特別養護老人ホームでの交流会も楽しみだった。新舞踊を長年習っていた祖母は、ボランティアでご入居者に娯楽として舞いを披露していたのだ。

「お年寄りは耳が遠いから、低い声のほうが聞きとりやすいよ」

保育園の先生にそう教わると、使い終わったラップの芯を口元に当て曽祖父に話しかけた。〝ありがとう〟。言葉を介さずとも笑顔でコミュニケーションをとれることが、なにより嬉しかった。人に喜んでもらうことが大好きな彼女は、小学生になると祖母と同じ新舞踊を習い、ボランティアに参加するようになった。将来は介護士になりたい。その夢を叶えるため、大学は社会福祉士の資格を取れる福祉学部を選択し、実習で多くのことを学んだ。

「ご入居者さまは一時的に施設にいるのではなく、そこで生活をされている。だからこそ『ふつうの生活』が一番大切なんだ」

自分らしい介護のあり方について真剣に考えた結果、彼女が選んだのはＳＯＭＰＯケアだった。就活でＳＯＭＰＯケアの施設を見学した際、「ここには私が目指すご入居者さまの『ふつうの生活』がある」と感じたからだ。ＳＯＭＰＯが取り組むリアルデータプラットフォームがあれば、例えば「今は薬を飲みたくない」というご入居者に対して、蓄積されたデータから理由を判断し、望むタイミングで勧めることができる。スタッフたちもそうした情報を共有し業務分担することで、より手厚い個別ケアに専念できる。

「いつもありがとうね」

入社五年目の彼女は、これまでご入居者一人ひとりに「誕生日カード」を渡すことを提案したり、若いスタッフ同士の交流の場として「仲間の会」を企画するなど、コミュニケーション重視の環境整備に取り組んできた。職場がさらに明るくなったことがご入居者にも伝わり、廊下でのコミュニケーションも増えた。長年住んでいる方から「今が一番いい」と声をかけられたときは、頑張ってきてよかったと心から喜んだ。

小学生のころから祖母と習った新舞踊。ホームでもレクリエーションで時折披露する彼女の舞踊は、歌舞伎好きのご入居者にも大好評だ。

「これからも私は、私の周りのすべての方が笑顔で楽しく過ごせるような、介護のプロを目指します」

第28話
事故のない世の中をつくる一歩

損害保険ジャパン株式会社　狩野繭子

「狩野繭子の想いと活動が、社会に安心をもたらす」

あのときの「ありがとう」は、今でも狩野繭子の心に焼き付いている。

働き盛りの夫を事故で亡くしたお客さまは、小さな子どもを二人抱え呆然としていた。その姿が心配で、たびたび電話をしては、様子をうかがった。お客さまの事故対応担当者として責務をまっとうしたかっただけではない。安心してこれからの人生を歩んでもらいたいという思いでいっぱいだった。

すべての対応を終え、涙声の「ありがとう」という言葉を聞いたとき、思わず胸が熱くなったのを覚えている。その間、わずか二カ月足らず。でも、記憶に刻まれる時間だった。

そもそも、自分がこんなふうに仕事をするなんて、思ってもいなかった。前職で図らずも接点を持ったのが、損保ジャパンの社員だ。自分と同じ年ごろの女性が、「任せてください」といわんばかりにテキパキと仕事を進める姿に憧れて、転職を決めた。

損保ジャパンで働くにつれ、憧れよりも、新たな気持ちが日増しに強くなっていった。それは、事故をなくさなければという思いだ。事故に遭って悲しむのは、被害者やその家族だけではない。「生涯、どうやって謝罪していけばいいのか」と、苦しみ続ける加害者の家族は多い。彼らの怒りや悲しみを目の当たりにするたび、歯を軋ませた。

交通事故をゼロにする第一歩は、ドライブレコーダーを社会に普及させることだ。データを使った安全運転支援サービスも活用できるし、なにより、運転を記録することは、ドライバーの安全意識につながる。不幸にして起きてしまった事故においても、より満足度の高い対応が実現している。これまで蓄積したデータやノウハウを活用すれば、過失割合のＡＩ判定ができるようになり、これまで以上に迅速にお客さまへ安心をお届けできる日が来るかもしれない。

「ドライブレコーダーを、一台でも多くの自動車に」

その思いを実現するために、いま彼女は、あらゆる機会を使ってお客さまにドライブレコーダーを提案している。地道な活動だが、こうした取組みが、人々の安心な暮らしに繋がると信じている。

世の中から事故がなくなれば、あのときのような「ありがとう」を聞くこともないだろう。でも、それでいい。そんな日が、一日も早く訪れればいいと願っている。

第29話
みんなが自分らしく生きられる社会をつくる

ＳＯＭＰＯホールディングス株式会社　猪又竜

「生まれつきの病を持つ猪又竜は『人間のバリエーション』を伝え続ける」

就職が決まらず、すさんだ日々を送っていた彼に、母が新聞を渡して言った。

「あんた、ダメ元でここに応募しなさい」

就職欄に載っていたのは損保ジャパンの社員募集だった。

彼は電話をして、とりあえず聞いた。

「障がい者は募集していないのですか？」

採用担当者はすぐに履歴書を送ってくださいと言った。とんとん拍子で話が進み、採用が決まってしまう。

彼には生まれつきの障がいがあった。

先天性心疾患。心臓に異常があり、脳が酸欠状態なのでいつも頭痛がする。

古生物学者になるという夢をあきらめたのも、この病気が理由だった。

ある障がい者施設で大量殺人が起きた。このとき彼は決意する。

「こんな悲惨な事件が起きるのは、障がい者について社会で理解されていないからだ。ならば当事者である自分が人々に直接会って伝えよう。姿を見てもらおう」

有給休暇を取って学校を中心に講演を行うと、その活動が新聞などに掲載され、職場にも知られるように。やがてＳＯＭＰＯの社員として各地で講演をすることになった。なんと仕事の一環となったのだ。

講演で、いつも伝えていることがある。「人間のバリエーション」だ。

「みんなの周りにも、私のような病気の人や、目が見えない人、車いすの人が当たり前にいるんですよ」

そして、次のように付け加える。

「人間にはいろんな特徴の人がいて、みんなが同じことができるわけではないんです。だれもが得意なこと、苦手なことがあるのだから、できないことは得意な人に頼みましょう。『助けて』、『手伝って』と声を上げていいんです」

学校で話すたびに、彼のもとにはたくさんの感想文が寄せられる。「気持ちが楽になりました」という子どもたちの感想を目にするたびに、心がグッと熱くなる。

彼が生まれたころ、多くの先天性心疾患の子どもは長く生きられなかった。

だが医学の進歩によって、彼は四十代なかばの人生を迎えている。

病気や障がいがあるとかないとか関係なく、みんなが自分らしく生きられる社会づくりのために。

そう思って、今日も彼は壇上に立つ。

第30話
母の祈りを、教えを胸に

損害保険ジャパン株式会社　赤羽萌

「赤羽萌は、常に相手の気持ちを考え、寄り添う」

「周りの人からどう見られるかをいつも意識しなさい」

昔からしつけには厳しかった両親。なかでも母からよく聞かされたこの言葉は、社会人となった今も折に触れ思い出し、もはや赤羽萌の行動指針にさえなっている。

実際、母の言うように相手を意識することで、社会人として欠かせない礼儀や言葉、挨拶、所作が自然と身についた。それだけではない。コミュニケーションにおいても、常に相手の気持ちを考え、寄り添い、想像を働かせる癖がついた。

「相手の表面的な言葉に惑わされず、会話のなかから相手の真意を読み取るよう常に努める」

このコミュニケ―ションスキルこそ、今や彼女の強みの一つだ。

思えば、彼女のなかでは常に母親が大きな存在を占めてきた。彼女にとって、母親は自分自身を照らす鏡のような存在。母の言葉が彼女の生活に深く根を下ろす一方、普段から娘の自分に対して感情豊かに話す母のことを受け入れつつ、面倒くさいなと感じることもあった。

「例え悩みを抱えていても、自分は職場の同僚や身近な友人、知人にはなるべく相手が笑顔になれるよう、明るい雰囲気で話をしよう」――。これは、母の言葉や姿がいつも自分の根っこにあったから。

だから彼女と話していると、楽しくて、いつの間にかみんなが笑顔になる。

この冬、何年かぶりに実家に帰った。懐かしい実家の匂いとともに出迎えてくれたのは、少しだけ老いた母。そして久しぶりに会ったからこそ、いつも以上に感情豊かに話す母。その変わらなさぶりにあきれつつ、ほっとしながらも、母の表情からは、東京で働きながらどんどんたくましくなる自分のことを誇らしく感じてくれているのが、ちゃんと伝わってくる。

彼女の希望は、今の部署で経験を積み、ヘルスケア事業に関わることだ。目の前にいる両親が、老後に幸せに暮らせるサービスってなんだろう。母と話しながら、あらためて考えた。自分はこの会社でやっていきたいことがまだまだたくさんある。社内でも、個人・法人のお客さまにも、すべての世代の心と体の健康に関わりたい。

「よし、充電できたし、またがんばろう」――。赤羽萌は思いを新たにし、実家をあとにした。

第31話
ポジティブ思考

ＳＯＭＰＯホールディングス株式会社　新藤康子

「〝あきらめない女〟新藤康子は自身のキャリアと家族の介護の両立を目指す」

「十年後の自分について、考えてみて」

上司と定期的に行なっている面談の場でそう問いかけられ、新藤康子は初めて真剣に想像してみた。自身と家族の十年後の姿。自分はこの会社を勤め上げた後、何をしているのだろうか。そして、四国の実家にいる父と母と障害をもつ妹の三人の暮らしは……。毎日、畑で穫れた野菜を自ら運転して市場に運び、その日の売り上げをスマホでチェックするのが生きがいの母。今は要介護1と認定されているが、十年後はもっと介護度が進んでいるかもしれない。耳の遠い父と、今は仕事に出ている妹も、果たして十年後に今と同じ生活ができているのかわからない。心配になってきたのを機に、彼女は心を決めた。

「これから社会福祉について勉強して社会福祉士を目指す。そして、自分自身の仕事や生き方もあきらめずに、遠方で生活する家族の介護に備えていこう」

さっそく、総務省が推奨する「ふるさとテレワーク」を会社に申請し、約二週間、帰省して実家やホテルでテレワークを実施。コロナで約二年間、会えなかった家族の生活状況を観察し、母の主治医やケースワーカーと面談を重ねた。結果、彼らの知り得なかった細かい情報を伝えることができ、普段の生活を見守る必要性と、情報を共有することの大切さを痛感した。介護施設で入居者一人ひとりの健康状態がデータ管理されているように、在宅で介護する場合でも、家族と関係者が日常の細かいデータを共有し合えるようなシステム作りが、いつかできたらいいなと思った。

思い起こせば学生時代から特別支援教育の教員に興味を持ち、社会福祉に関心が強かった。それはやはり、身近な妹の存在があったからだ。時を経て、改めて自分がやりたかったことにチャレンジしたい気持ちが強く湧き上がってきた。

この春から、彼女はＳＯＭＰＯの「ライフ＆キャリア応援休暇」を利用して、大学の通信教育で社会福祉士の勉強をスタートさせる。ある日の櫻田ＣＥＯとのタウンミーティングで、「言葉が悪いが会社を利用して自分と向き合って将来を考えて欲しい」という言葉を聞き、これだ！　とすぐに行動に移し、実現することが決まったのだ。学生時代から打ち込んでいるバレーボールを今もママさんバレーで続けているように、仕事でもプライベートでも〝決してあきらめない、あきらめたくない〟が信条の彼女。今後もその気持ちを心に掲げて生きていく。

第32話
苦しんだからこそ、できることを

ＳＯＭＰＯひまわり生命保険株式会社　相田剛

「相田剛は、不調と闘いながら働く人の苦しみを知っている」

「おっ、今日はいいパフォーマンスができそうだ」

ウェアラブルウォッチと連動したスマホの健康管理アプリには、相田剛の睡眠データが蓄積されている。入眠直後に深い眠りができた翌日は、仕事で力を発揮できることがわかってきた。睡眠状態が良くないときは、その日の体調と仕事のバランスを調整する。

これが彼の日課になって久しい。

実は、数年前、突然めまいに襲われた。その後も症状が残った。とくに梅雨と台風の時期がいけない。医師は一、二カ月で治ると言ったが、なかなか完治しなかった。仕事に全力投球したいのに、思うように働けない。悔しかった。部署を転々とした。

「闘病しながら働きつづけるには、どうしたらいいのか。自分らしい働き方で成果を上げるには、どうしたらいいのか」

悩んだ。考えた。そして気づいた。健康の悩みを抱えながら、懸命に働いている社員、いやお客さまは、自分以外にもたくさんいるのではないか。

いまの部署に異動。現在グループマネージャーである彼の重要な職務の一つに、ライフカウンセラーを通じてお客さまの健康を応援する情報を発信することがある。振り返ると、学生時代から、人に意見を求められることが多かった。自分は、物事を観察した結果や収集した情報を分析し、それをわかりやすい言葉で伝えることが得意かもしれない。ならばこのスキルを活かし、働く仲間やお客さまの健康維持と体調改善を応援したい。

ライフカウンセラーを通じてお客さまの反応が返ってくる。

「相田さんが言っている、『病気にならないこと、健康を支える機能をお客さまに提供できるよう生命保険は進化している』ということを伝えたら、お客さまから共感できると言ってもらえましたよ」

一人ひとりのリアルデータを蓄積し、その人なりの体調管理に役立て、健やかに働く。お客さまの健康を応援する仕事を通して、今日も相田剛は働く喜びを実感している。

第33話
生きやすさ、働きやすさを支援

ＳＯＭＰＯコミュニケーションズ株式会社　古賀弘美

「古賀弘美は、壮絶な闘病経験を、働く人の支援につなげる」

「ギラン・バレー症候群です」

二〇一六年八月の真夜中、古賀弘美は単身赴任中の東京の社宅マンションで、激しい腹痛にうめいていた。救急車を呼び、這うようにしてマンション入り口まで下り、搬送された。

人事システム刷新プロジェクトに参画していたが、休日を削る激務でも、病気ひとつしない自分の身体に自信があった。

「点滴してもらったら、すぐに戻って、出社しなくちゃ」

だが、下された診断は、炎症性・多発性の神経障害の難病のひとつだった。自力で起き上がることも、立つことも、できない。搬送数時間後にはＩＣＵで、全身の筋力が落ち、寝たきりの状態。

母子家庭で大切に育てた一人娘は、出身地の福岡で大学卒業後、新社会人として就職したばかりだった。「完全看護だから」と、心配して上京しようとする娘の申し出を断った。

「あなたが結婚して孫ができたら、絶対に世話をしたい！　だから、お母さん、頑張るからね！」

二か月間の入院治療と、更に二か月間、専門病院でのリハビリに励んだ。

「飛行機に乗って、娘に会いに行く！」「仕事にも、絶対に復帰する！」

元来、粘り強くコツコツと頑張れるタイプだ。「立ち上がる」「歩く」と自分で目標を定めては、クリア。主治医にも「アスリート並みに熱心だね」と褒められた。

救急搬送されてから七か月目に復職し、その後約一年間は通院リハビリを仕事と両立させて、なんとか完治することができたのだ。

古賀弘美は、闘病生活を通して、気づかされたことがあるという。

病気やケガで休職を余儀なくされた社員が、焦ることなく安心して療養できる環境は、「復職へのスムーズな道筋があってこそ。その整備が急務だ」と。

復帰して携わったのが、「ホワイト５００（健康経営優良法人認定制度）」の認証申請。従業員の健康維持・増進を理念として公表し、経営を行う企業を表彰する制度だ。

まさに、壮絶な闘病経験を乗り越えてきた彼女にうってつけの仕事。

「闘病は、自分の人生の中で、決して無駄なことじゃない」と思った。

「生きていくことを支援する仕組みがあればあるほど、生きやすくなる」

古賀弘美はそう信じて、これからも働く人の支援に携わっていく。

第34話
介護こそ究極のサービス

ＳＯＭＰＯケア株式会社　右近幸絵

「右近幸絵は、介護に関わるすべての人が輝く環境を目指す」

十二年前、まったくの未経験で介護業界に足を踏み入れた右近幸絵は、本当に自分にできるのだろうかと不安だった。前職の飲食業界では人と接する仕事を通じ、長きにわたってサービスやおもてなしの精神を学んできた。それゆえ出産を経て復職する際、この経験を生かせる新たな現場に挑戦したいという思いが湧き上がった。

「介護こそ、究極のサービスではないか」

現実は想像以上に大変だったが、支援を必要とする高齢者の方たちに心から喜んでもらえることは何よりの宝。こんな大切な仕事に迷いを感じている暇はない。まずは自ら率先して行動し、奉仕する。「ＤＯ」と「ＧＩＶＥ」を心がけることが彼女の指標だ。

その思いは五年前、勤務先が会社統合でＳＯＭＰＯケアになり、人事制度や勤務体制、教育体制などあらゆることが整い、格段に良くなりつづけていることを実感するたび、ますます加速していく。

「難しいから、面白い」

実力不足を感じた時は、管理者研修で聞いたＳＯＭＰＯケアの遠藤社長の言葉に何度も励まされてきた。遠藤社長は保険という異業種から介護事業の経営を任された際、まずは現場を知らねばと全国約百二十カ所の事業所を訪問。スタッフにヒアリングを行い、「教育の充実」を求める要望に応え、わずか四か月で現場のホームやご入居者の居室と同じような環境で学べる大規模な研修センターを作り上げた人物である。

施設のホーム長としてさまざまなご入居者と関わるなか、彼女は要介護状態の方や認知症のある方が「もう何もできなくなった」と寂しい表情で話す姿に何度も遭遇してきた。現場でご入居者と接するスタッフがときには心をすり減らし、作業的になっている光景を目にすることもある。ＳＯＭＰＯが進めるリアルデータプラットフォームなら、ご入居者の情報や勤務の流れを一括で見られることで作業時間が短縮され、スタッフの余裕も生まれやすい。いきいきと笑顔で働くことで自然とご入居者の笑顔も増え、その先に本当の自立支援や生活の質の向上が実現できるはずだ。

現在、彼女は社内で有志の参加を募り、セクションや肩書を超えたフラットな対話の場「ＳＯＭＰＯ ｋａｉｇｏ カフェ」を運営。さらに地域連携の一環で、週末にホームのグランドピアノを外へ出し、自由に弾いてもらうストリートピアノも実施している。

「難しいから、面白い。私にはまだやるべきことがたくさんある」

第35話
大航海時代の見果てぬ夢を、今も

SOMPOホールディングス株式会社　石野宏治

「石野宏治は、笑顔を絶やさない社会を作る」

「現在の海上保険はね、大航海時代に始まったんだ。見果てぬ海に冒険に行く、それを可能とするものだったんだ」

大学二年の石野宏治は、講義室で熱心に教授の話を聞いていた。高校時代に、塾でOBに話を聞いてからずっと興味を持っていた教授の講義だったのだ。

父親が生命保険会社、祖父が銀行という金融一家に生まれたこともあり、損害保険のなかで最も歴史のある海上保険に興味を持った。その後、彼は教授の教える海上保険のゼミに入り、保険の歴史や社会での役割について学んだ。興味の輪を外に広げるためにアルバイトをして海外にも行った。アメリカ西海岸、イタリア、ギリシア。卒業時はヨーロッパ一周に旅立った。旅行のための保険を自分でも利用した。保険が一気に身近なものになった。

損保ジャパンに就職してからは大阪の営業店に所属する。海外旅行は好きだが英語は得意ではなかった。そんな自分が海外で働くことは想定していなかった。海外事業企画部への異動で、各国に赴任することに。ロンドンには二年いた。海上保険の老舗ロイズビルの中でも仕事をした。世界で起きた船の事故や大災害の歴史に触れた。

その後、ニューヨーク、イスタンブール、海外での仕事を経験することになるが、海外赴任前となる二〇二年に彼は本社で働いていた。

「私にも行かせてください」

東日本大震災が起きた。損害査定のために応援社員を現地に送りこんだ。しかし彼自身は行かせてもらえなかった。そして最後のクール、六月にようやく許可が下りた。

仙台中を走り回った。毎日、十件以上の損害査定を行なった。自分の担当以外にも、お客さまと連絡が取れず滞留している案件を見つけてはお客さまを探しつづけた。苦には感じなかった。人のために役立っている実感があった。それぞれの未来に向けて歩いていける社会を作りたい。そのために働いているという実感があった。

あれから十年以上が経ち、世の中は少しずつ変わっている。損害の査定にもドローンが活用されている。損害保険会社には、過去の事故のリアルデータがある。保険の支払いは、最終手段、事故を回避することが最良だ。そのためのリスクを減らすデータ活用。万が一の事故や災害を回避できる方法の提供。リアルデータの活用が保険を変えていく。

事故や災害を減らし、笑顔を絶やさない社会を作る。石野宏治は、そのための仕事に取り組んでいる。

第36話
情報化する社会、対応の最前線に

ＳＯＭＰＯコーポレートサービス株式会社　中神全弘

「中神全弘は、市井の法律家として社会と向き合う」

中神全弘は二浪して大学に入学した。法律を学び法曹関係に進もうと思っていた。

春に行われた法職課程教室のオリエンテーションで、教壇に立った民法の先生が、学生たちに向けて言った。

「法曹になれなくても、市井の法律家になれ」

彼はそれを、周りの一年生とともに聞いた。〝なれない〟とはどういうことか。そのときはまだ、先生の言葉の意味が分からなかった。

一学年の人数は五百人から六百人。そのなかで司法試験に合格するのは数十人しかない。彼は、その数十人になれなかった。大学卒業後、一年間、司法浪人をした。人生の選択肢が狭まっていくのを感じた。大学進学時にも一年遠回りをしている。一般企業に勤めるならば、ここで就職活動をしなければ厳しいことはわかっている。

司法試験を受け続けるのか、企業を目指すのか。大学一年生の春に聞いた先生の言葉が甦る。あのときにはわからなかったことが、実感をともなって迫ってきた。

「市井の法律家になれ、か」

彼は決断した。それも一つの人生だと思い、新しい扉を叩いた。そして損保ジャパンに入社した。

市井の法律家として、日本の会社というキャンバスに自分の画を描く。

そうした思いは、すぐに実現したわけではない。入社して三年間は、経理に配属された。次の四年四カ月は、有価証券部で株式の運用などさまざまな業務に取り組んだ。法務の仕事に携わりはじめたのは、七年以上が経ってからだ。回り道はしたが、すべての経験は無駄ではなかった。会社の数字を見てきたことは法務でも役立った。

現在、彼は、ガバナンス、コンプライアンス、内部統制に関わる業務をしている。ＳＯＭＰＯグループのさまざまな業務を受託する会社での勤務だ。契約書の電子化、ウェブ経由での会議、役員会の議事録の電子化など、ＳＯＭＰＯはデジタルを取り入れる会社へと移行している。個人情報の保護など、次々と変わる法律や社会への対応が求められる。その最前線に彼は立っている。そして自身の経験をグループ各社に広げようとしている。

市井の法律家として、高度に情報化していく社会と向かい合う。中神全弘は、法律と関わることで、日本の会社を変えていこうとしている。

第37話
新しいテーマパークを作りたい

ＳＯＭＰＯケア株式会社　下川原恵

「下川原恵は、小さな気遣いを大きな信頼に変える」

施設の食堂から漂ってくるのは、香ばしい焼き鳥の香り。そして、ご入居者たちの笑顔。気がつけば、その場はお祭りのような賑わいを見せている。この日はスタッフ総出で一日限りの焼き鳥屋さんを開店した。

「最近、Ａさんの食が細くなっている」、とあるご入居者に関する報告を耳にした下川原恵は、考えた。日常の何気ない会話のなかでＡさんがふとつぶやいていた「昔は商店街で焼き鳥を食べることが好きだった」という言葉が浮かんだ。

「ならば、食堂を焼き鳥屋さんにしちゃおうか」

突拍子もないアイデアだったがスタッフも賛同してくれた。そして、手作りの焼き鳥屋さん計画は実行された。

そこには楽しそうに焼き鳥を頬張るＡさんの姿が。賑わいのある焼き鳥屋さんの雰囲気が、Ａさんの食欲を増進し、さらには表情まで変えてくれた。計画は大成功、うれしい瞬間だった。

最初は事務職として関わっていた介護の仕事。現場で起こる数々の出来事に触れ、心のなかに芽生えたのは「介護士の仕事がしたい」という気持ちだった。その情熱に突き動かされ、ほぼ未経験だった介護の世界へ飛び込んだ。一から勉強を始め、資格を取得し、現場に飛び出した。大きな転身だった。

「〝お願いして本当に良かった〟と、ご入居者さまのご家族から喜びのお言葉をいただけることが本当にうれしい」

現在彼女はホーム長になった。これまで、いくつの問題を解決してきただろう。だが、それもすべて経験という財産になり、今も走り続けている。できないことができるようになっていくご入居者の姿を目の当たりにして、家族とともに喜びを感じる日々。最も大切にしているのは「信頼」。小さな気遣いが大きな信頼に変わっていくことを知っている。

「人と人との関わり合いがもたらす信頼はもちろん、そこに喜びを加えて、安心・安全・健康のテーマパークを作りたい」

キラキラと瞳を輝かせ、未来への展望を語る。その情熱は止まることはない。

第38話
認めてもらうのを待ってちゃダメ

ＳＯＭＰＯひまわり生命保険株式会社　篠田香里

「篠田香里は、自分を信じて、更なる高みにチャレンジし続ける」

逆境や障壁があるほど燃えるタイプなのかもしれない。

ＳＯＭＰＯひまわり生命に入社して数年経った頃、聴覚障がい者と働く機会があった。健常者との間に壁があるように感じた篠田香里は、筆談で積極的にコミュニケーションを試みた。すると、健常者中心の職場で障がい者は疎外感をもっていることがわかった。

「だったら私たちから働きかければいいんだ！」

そう思った彼女は聴覚障がい者の社員とともに手話教室を企画。有志十人ほどが定期的に集まり、お昼ごはんをとりながら和気あいあいとコミュニケーション。互いの理解が深まり、手話での会話も活発に。職場の雰囲気がいいように変わっていく体験を得た。

その後、彼女は三人の子どもを出産。都度、産休育休を取得し、時短勤務も経験した。当時は子育て中の女性社員は多くなく、周りの理解が得にくい環境。会社に貢献したいのにやりがいのある仕事は任せてもらえない。頑張ったつもりでも評価がついてこない。

「社会人としても母親としても中途半端だな……」

いきいきと働く同期社員と距離を感じ、ポツンと一人、足踏みしているように思えた。

でも、彼女は腐らなかった。逆境には強いのだ。

「認めてもらうのを待ってちゃダメだ」

気づいた彼女はすぐに行動を起こした。ダイバーシティ・マネジメントを支援するＮＰＯ組織の活動に会社の代表として参加。会社では体験したことがない大勢の前でのプレゼンテーションや、こだわって成果物を作り上げる楽しさを経験した。さらに、活動の分科会ではリーダーに立候補。勇気と度胸が付き、チャレンジの面白さに開眼した。

プログラムが終わって会社に戻ると、上司が言った。

「行ってよかったね」

一段、階段を上ったような気がした。

誇りと自信をつけた今、挑戦すべき新たな山が見え始めている。担当する保険金・給付金の支払いを、いかに「迅速に」「感動的な体験で」お届けするか、である。そのために、あらゆるデジタルソリューションの導入や、ワークフローの見直しで、秒単位の効率化や感動体験の創出に挑んでいる。

また、保険金・給付金の支払い業務には、病気や事故に関するたくさんの情報が集積する。そのリアルデータをお客さまの健康支援に活用できないかと考えているのだ。

病気を未然に防ぎ、いかに健康を維持してもらえるか。病気になったお客さまにいかに早く回復してもらえるか。健康応援企業ＳＯＭＰＯひまわり生命の一員として、さらなる高みにチャレンジする。

第39話
仲間の笑顔と、前向きな気持ちと

損害保険ジャパン株式会社　市川純

「市川純は、相手にとって、自分にとって大切なものを考え抜く」

市川純はリラックスした気分で、一枚の画用紙に、雑誌の切り抜きや撮りためた写真をぺたぺたと貼りはじめる。海、沖縄の島、焚火、子どもや友人の笑う顔、そして季節のしつらえ。あ、この古民家の写真も素敵だな。

子どものころから好きだったもの、心がときめくもの。

ただ、それだけを考えながら切っては貼るを繰り返し、自分の深層心理にアプローチする「偏愛コラージュ」。ふとやってみようと思い立った彼女はいま、オリジナルのコラージュ作成の真っ最中だ。

思い出すのは、入社後、長く所属した企業営業部門での経験。社有車を何千台と抱え、事故件数の多さが課題だった企業の事故防止施策を任されたときのこと。

「まずは安心安全が根底で担保されてこそ、より前向きに事業に取り組んでいただける」

そう考え、企業の経営風土改革、管理者研修、社員への安全マニュアルの作成など、あらゆる角度から考え抜いた彼女のチームの提案が、全面的に受け入れられた。

相手の立場に立てる共感力、課題を前にしたときに真摯に向き合い、自ら動き乗り越える経験。すべては相手のためにと頑張るうちに、気づけば自己肯定感もどんどん高まっていた。

「自分の行動で、相手の気持ちが前向きになり、行動変容の機会が生まれること。これこそ、自分の幸せ」

彼女は昨年、人事部へ異動となった。営業部時代に行き着いた自分の想いがいかんなく発揮できる、念願の人事部へ。

「困っている人がいたら助けるだけじゃなくて、自立して前向きになれることがとても大切。心が前向きになり、挑戦しようと思える自己肯定感を高めるきっかけを作れるよう、社員一人ひとりをサポートしていきたい」

完成したオリジナルのコラージュを前に、あらためて彼女は確信する。

「私の大切なものって、やっぱりこれなんだ」

家族や仲間の笑顔、あたたかな気持ち、心地よい空間。

「これを実現していくことこそ、私の使命」

第40話
建設的な介護とは？

ＳＯＭＰＯケア株式会社　古澤隆

「古澤隆の〝チーム〟はリアルデータの活用を通じて絆を深める」

「あれ、おばあちゃんは？」

出張先から久々に帰ってきた我が家は、どこか様子が変わっていた。真っ先に迎えてくれる、祖母の姿がない。いたずらを見つかっても、いつも味方になってくれた、あのやさしい祖母が。

母が重い口を開いた。

「心配すると思って言わんかったけど、おばあちゃん入院したの。寝たきりになっちゃって……」

大好きな祖母と離れ離れになってしまった。それは受け止めきれないほど、つらい体験だった。

幸い祖母は体調が回復し、三年後に自宅に戻ってきたが、失って初めて実感した、家族がいることの幸せ。

古澤隆はＳＯＭＰＯケアに入社し、ひとりでも多くの家族が一緒に暮らせる社会をつくろうと、懸命に汗をかき始める。

彼がホーム長を務める施設に、ひとりの女性がご入居された。聞けば息子さんと娘さんが介護を巡って対立し、ご入居された女性はもう三年も娘さんと会えていないという。

家族をまたひとつにしてあげたい、その思いで彼は一肌脱いだ。ご入居された女性はもちろん、介護を担ってきた息子さんのお話に耳を傾け、やがて息子さんの暮らしが落ち着いてくると、こじれていた関係が修復されていく。

そして、待ち望んでいた瞬間が訪れた。三人が抱き合ったときのことを、彼はいまも忘れていない。

「またみんなで会える日が来るなんて……」

号泣するご入居された女性の姿がにじんで見えた。

ホーム長としてなによりも大切にしていることがある。それは人と人とがつながることで生まれる、チーム力だ。

施設では従来、管理職が現場のスタッフを指導するケースが多く、スタッフが受け身の姿勢になりがちだった。そこでスタッフだけの勉強会を始めたところ、当事者意識が高まり、現場で助け合う光景が増えてきた。

ＳＯＭＰＯの強み、リアルデータも、現場の一体感の醸成に役立っている。

介護は、目の前の困りごとに忙殺されるのが常。しかし蓄積されるリアルデータから未来を予見できるようになり、わずかな変化でもスタッフの間で共有し、先を見据えた建設的な話し合いができるようになった。

いまも彼のもとには、あのときの息子さんから連絡が届く。

「古澤さん、お変わりないですか？」

家族の絆を守ったことで生まれた、新たなつながり――。

理想の社会はゆっくりと、しかし確実に近づいている。

第41話
「当たり前」以外の選択肢がある

損害保険ジャパン株式会社　平野恵子

「平野恵子はＳＤＧｓを目指している」

平野恵子は会社が大好きだ。職場の仲間が大好きだ。心の底から〝いい会社に入れて良かった〟と思っている。どうしてそんなに好きなのか。ひと言でいえば〝懐が深い職場〟だから。

「東京の人って、そう考えてはるんや」

京都で生まれ育った彼女は、中堅になる頃の四年間、東京本社勤務を体験し、狭い日本に大きく広がる多様な価値観にびっくり仰天した。こんな体験させてくれてありがとう！　ここから彼女の〝会社愛〟が生まれた。

成功したときも、失敗したときも、上司や仲間が見守ってくれていた。だから天狗にならなかったし、奈落の底に落ち込まないで済んだ。賞賛や叱責の言葉より、その視線の温かさと頼もしさがありがたかった。守ってくれる人がいるからこそ、安心して働くことができる。〝人を大事にする〟職場の一員でよかった。自分もそうありたいと感じた。

「平野さん、ちょっと聞いてください。実は……」

四十代を迎えた彼女は、今、職場の女子たちの相談役となっている。

うん、家庭があるから残業させられないとか、子供がいない人は残業すべしとか、おかしい。一人ひとりにいろいろな背景や事情があって、結果として「今」があるのだから。

平野は、どんな話にも真摯に耳を傾ける。決して、自分の価値観は押し付けない。押し付けはしないけれど、世の中にはいろいろな人がいることや、さまざまな価値観があるということだけは、相手と共有する。

「それ、あかんと思うで。ＳＤＧｓって言ってるやんか」

多様な価値観や生き方を受け入れる未来社会に向かって進む会社であり、職場の仲間であってほしい。彼女は社内ＳＤＧｓを目指しているのだ。

「世の中の〝変化〟に対応するには、私たちが〝進化〟しなきゃ。いろんな人がいるのが当たり前の、共生できる、そんな社会を作りたい」

第42話
伝える力で、三方よしに

損害保険ジャパン株式会社　廣井賢

「廣井賢は、多角的な情報発信で、防災・減災を目指す」

突然ドーンと下から突き上げる強い縦揺れ。二十歳の廣井賢が東日本大震災に遭遇したのは、大学でアメリカンフットボール部の練習に参加していたときだった。自分たちにケガはなく、ことの深刻さに気づいたのは、携帯電話で津波のニュース映像を見た直後のことだ。

「えっ、嘘だろ……」

逆流する褐色の海水が、自動車や建物を一瞬で飲み込み、街が消えていく様子に、彼は言葉を失った。

自転車を必死になってこぎながら隆起した道を戻ると、家族は無事だったが、自宅は地震保険の全損認定を受ける大きな被害。マンションの壁には亀裂が――。その後の余震で構造がゆがみ、玄関のドアが開かなくなった。ガスや電気が止まり、雪がちらつくなか、毎日食料を探しに行く。カギがかからない状態で二カ月を過ごした。

つらい日々だったが、被災していても、自分より被害が大きな地域へボランティアに行く人たちがいた。こういうときこそ助け合わないといけないのだ。心に熱いものが生まれた。部活の仲間と一緒に津波の被害があった地域へ行き、土砂の撤去を手伝った。

「困っている人たちを助けたい」

強い想いがはっきりとこみ上げた。自宅は保険に入っていたが、マンション自体は地震保険に未加入だったことが判明。翌年以降に修繕積み立て費が上がり、「いざという時、保険って大切なんだな」と痛感した。

自動車保険の加入率はおよそ九割。約一割は無保険のクルマが走っている。そこを一〇〇％にできれば、被害に遭っても保険でちゃんと救済できる。さらには火災保険、ケガの保険。さまざまな形で情報を提供し、理解を深めてもらうことが社会の役に立つ。

水害・土砂崩れなど災害のリスクが高い地域だと言われていても、実際に住んでいる人はいる。さまざまなデータを活用して、この地域に住んでいるとこういうリスクがあるという知識を持ってもらい、備えをしてもらう。事故や被害があった時にだけお支払いするのではなく、減災、防災につながるようにしたい。

一人勝ちではなく、みんながハッピーであるのが一番いい。

アメフトでは「縁の下の力持ち」といわれるガードが彼のポジションだった。これは現在の仕事にかぶっているようで、悪い気持ちはしない。

第43話
だれかの力になりたい

ＳＯＭＰＯケア株式会社　髙野直子

「チャレンジする人を支えたい。髙野直子がライフワークに出会うまで」

「この先、長く生きられる可能性は五分五分かと……」

十年前、中一の末っ子に突きつけられた急性白血病の宣告。ＩＴ業界で働きながら三人の子育てをする髙野直子は、ショックのあまり泣き崩れた。

「私たち親子は、いったいどうなってしまうのだろう……」

暗闇のなかをさまようかのような、息苦しい日々が始まる。

だが、彼女は孤独ではなかった。病院の先生や看護師たち、そして末っ子が通う学校の教師たちが、陰になり、日向になり闘病生活を支えてくれたからだ。

末っ子の病状は快方に向かい、いつしか彼女の心に新たな使命が芽生えた。

「助けてくれた皆さんに恩返しをするためにも、今度は私がだれかの力になりたい」

彼女はＳＯＭＰＯケアで働きはじめ、高齢者の方たちに寄り添うようになった。

ホームには驚くほど前向きな人が多く、お琴や手芸など多くのアクティビティが盛んに行われていた。ある日の誕生日会でお琴の演奏のために着物姿になった彼女を見て、いつも控えめにしている女性が、しばらく考え込んでこう話しかけてきた。

「死んだときに着せてほしい、着物があるの……」

次の瞬間、思わぬことを口走っていた。

「死んだときなんて言わずに、生きているいま、着ましょうよ」

生きているから、できることがある。それは病を克服し、たくましく成長する末っ子が教えてくれたことでもあった。

「せっかくお琴もされていたのですから、そのお着物を着て私と一緒にお琴の演奏会をやってみませんか」

なかば強引に勧める形で始まった、お琴の稽古。やがて女性は進んでお琴を手にするようになり、自身の誕生会で着物姿とお琴の演奏を披露することになった。

子どもや孫、多くのご入居者に見守られての演奏会は大盛況に終わり、女性は彼女の手を握りしめて何度も頭を下げて言うのだった。

「私の人生に、こんな楽しいことが残っていたなんてねえ。ありがとうございます」

チャレンジする高齢者の方たちを支えようと、ＳＯＭＰＯのリアルデータにつながる睡眠センサーを国内施設の約一万七千床へ導入するために奔走した彼女。人生はおもしろい。暗闇にしか思えなかった末っ子の闘病生活の先に、かけがえのないライフワークが待っていたのだ。

第44話
チーム力で解決

損害保険ジャパン株式会社　有末宏

「有末宏は、多くの人と共に歩み、喜びを分かち合いたいと思う」

「有末さん、出張で東京に来たんだ。一緒にランチでもどうだい」

昼休み前、突然鳴り出した携帯電話に出てみると、懐かしい声が聞こえた。もう七年ほど前になる。有末宏が岐阜に勤務していたころ、岐阜に本社を置く有力企業に、代理店と一緒に猛アタックを仕掛けたことがある。声の主は、その有力企業の総務課長だった。

「懐かしいな。有末さんが東京の本社勤務になって寂しいよ。あのころは、毎月のように訪ねてきては、保険以外にも、いろんな相談に乗ってもらってたよな」

箸を進めながら、彼は自然と当時を思い出していた。有力企業の工場の安全業務管理や建物・設備の老朽化診断を、ＳＯＭＰＯリスクマネジメント社の担当者にしてもらったり、当時、義務化されたばかりの従業員へのストレスチェックのやり方をＳＯＭＰＯヘルスサポート社にお願いしたり、総務課長が抱えていた問題を毎月一つひとつ解決していった。総務課長が困った顔をしていると、ＳＯＭＰＯグループのさまざまな事業会社に連絡して、該当する担当者を紹介してもらい、解決策を一緒に考えた。そうして半年ほど経ったころだろうか、

「海外出張者用の保険を、今度、君のところでお願いするよ」

と言われたときは、思わず小さくガッツポーズしていた。自分のことを信頼してくれていると感じた瞬間だった。代理店だけでも、損保ジャパンだけでもできない、まさにＳＯＭＰＯグループのチーム力が評価されたのだ。多くの人とつながり、共に課題を乗り越えていったそのときの充実感を、彼は今でも忘れられない。

「ところで、本社ではどんな仕事をしているの？」

彼の現在の仕事は、お客さま対応を主とするカスタマーセンターの運営に関する業務だ。カスタマーセンターには、お客さまのさまざまな声が直接寄せられる。困ったこと、苦情、よくわからないこと、保険に関してありとあらゆる要望が集まってくる。そのお客さまの声を集約し、新しい商品開発に役立てたり、全国の社員や代理店に有力情報を伝え、より良いサービスを提供してもらったりする。最近も、カスタマーセンターから新商品の情報をお客さまに案内し大変満足いただいたため、より多くのお客さまに伝えてもらうよう全社にノウハウを共有した。全国のカスタマーセンターが起点となり、全社と代理店がひとつのチームとなってお客さまの「安心・安全・健康」に貢献することが彼の使命だ。

「有末さんはお客さま第一で変わらないな。頑張れよ！」

総務課長の後ろ姿を見送りながら、有末宏は小さく頭を下げた。

第45話
人生を変えた吹奏楽とアルバイト

ＳＯＭＰＯコミュニケーションズ株式会社　吉里信吾

「吉里信吾は、リアルとデジタルのコミュニケーションの融合を目指す」

「今年は吹奏楽班、危ないだろうね」

中高一貫の学校。中学生、高校生合同で参加している、全日本吹奏楽コンクール。毎年受賞を目指して頑張っていた。部員の人数はぎりぎりだった。優秀な上級生が卒業した年、ＯＢ、親、学校関係者たちが不安を口にした。

期待は低かった。当時中学三年生だった吉里信吾は、仲間たちと奮起した。一致団結した結果、これまでよりも、よい賞を得ることができた。

大学に進学後、アルバイト先として、後にＳＯＭＰＯグループとなる会社で、事故対応に関わるコンタクトセンターのオペレーターとして働いた。電話越しのコミュニケーション。事故の内容を聞き、処理を行い、必要な部署に引き継ぐ業務。人命に関わる緊急性が高い仕事で、迅速性、正確性が要求された。

受話器の向こうから緊張感が伝わる。はじめは抵抗感を持っていた相手が、次第に心を許し、最後には世間話までして電話を終えることも。中学、高校時代の、仲間と分かち合った喜びを思い出す。コミュニケーションの大切さを、強く感じた。

アルバイトからの登用制度を利用して正社員になった。現在は人事部に所属して、人材戦略、人材育成の仕事をしている。

新型コロナウイルスの流行でニューノーマル社会がやって来た。社内でも大きな変化があった。アナログからデジタルへの、コミュニケーションの移行。これまでは、隣の机にいる人と気軽にできた業務の確認が難しくなった。まだまだデジタルを活用できていないことを痛感した。

年間何十万件と蓄積される、お客さまからのお問い合わせ。すべてのデータは保存されているが解析やソリューションの提案は追いついていない。リアルデータの活用やＤＸの推進で、今よりもよいものにコミュニケーションが変わっていく。受動的な面が強いお客さまとの接点で、能動的な提案が可能になるはずだ。

コミュニケーションにおいて、リアルとデジタルの融合を目指す。吉里信吾は、その基盤となる社内制度のアップデートに取り組んでいる。

第46話
チームの無限の力を引き出す「笑い」

損害保険ジャパン株式会社　木下七海

「木下七海の技が冴える、『笑い』のエッセンス」

「やだ～、木下さん！　笑わせないでよ～」

職場に響く笑い声。眉をひそめる者もいるだろう。

「笑い合えるって、心から居心地がいいと思えなければ、できないから……。このタイミングでひと言おもしろいことを言ったら、和むよな、というところを、チームリーダーとして攻めていきたい」

木下七海の「笑い」の原点は、高校生まで暮らした札幌の実家にある。両親と二歳上の姉、木下、二歳下の弟は、本当に仲が良かった。

札幌近郊には良質な温泉が点在しているから、休日になると、家族そろって出かけた。

思春期真っ盛りの年ごろに、家族と行動する彼女を、友人は珍しがった。

「母の天然ボケがあるから、笑いが絶えない。その血を私が引き継いで、高校生になる娘との掛け合いは、漫才みたいって。いつも、笑い合ってる」

彼女はそう言い、「家族と過ごす時間が、私にとっては一番の安心剤」と、心の内を明かした。

三歳の娘を連れて、横浜から札幌の実家へ戻った。必死で仕事を探した。

運よく正社員として採用されたのが、ＳＯＭＰＯだった。横浜にいたころ、周囲の女性がイキイキと働く姿に圧倒された。

「あんなふうにかっこよく仕事をしたい！」と、コツコツと勉強を続けた。平日夜間や休日に発生する自動車事故の初動対応業務に就き、チームリーダーとして、メンバーの事案フォローや苦情対応、個人目標達成に向けたサポートを行なっている。

決して、楽な仕事じゃない。苦情に、気持ちが引きずられることだってある。

「電話を通して、不安なお客さまの心に寄り添い、安心をお届けするためには、まずは私たちの環境が、心から安心できなければ」

だから彼女は、「笑い」が居心地のよい環境をつくるエッセンスだと信じている。

「同じ志を持った仲間が力を合わせれば、どんな困難だって乗り越えられる。安心して楽しんで業務に励める環境があることが、私にとってハッピーなこと」

木下七海は、今日も「笑い」のある環境で、無限の力を引き出すことを目指している。

第47話
笑顔が生み出すもの

損保ジャパンDC証券株式会社　横山肇

「風通しのいい社会をつくるため、横山肇は今日もほほ笑む」

就活をいったんあきらめ、氷河期の雪解けを待ちながら始めたファストフードのアルバイト。気がつけば店長に懇願されて、リーダー職になっていた。

頭の中は「みんなに気分よく働いてもらわなきゃ」という思いでいっぱいだった。入れ替わりが激しいアルバイト。職場になじめない人は休みがちになり、リーダー自らシフトを埋めなければならない。

「自分を守るためにも、みんなに信頼されるリーダーにならなきゃ」

そう思って、丁寧に挨拶をするようにした。

「ユウちゃん、おはよう。体調どうですか？」

「マキさん、お久しぶりです。お子さんの運動会いかがでした？」

名前を呼んで、ひとこと。笑顔もそえて。職場は次第に明るくなって、無断欠勤も減っていく。

アルバイト仲間にスリランカの若者がいた。言葉の問題があるせいか、同僚と打ち解けず、いつも表情が硬い。

「あいつ、よくシフト飛ばすんだよ」

リーダー職の仲間がこぼしていた。店では無断欠勤することを「シフトを飛ばす」という。

「せっかく一緒に働くのだから、楽しく働いてほしいな」

なにかにつけて声をかけ、「きみも仲間だよ」というメッセージを送っていたら、若者は次第に明るくなり、パートナーのことまで話してくれるようになった。やがてはムードメーカーになってくれた。

就職氷河期は依然続いていたが、彼はアルバイト生活に見切りをつけて就活を再開。やがて損保ジャパンDC証券で働き始める。

この会社で、自分はなにができるのだろう。そう思ったとき、スリランカの若者の人なつっこい笑顔がよみがえった。

微笑みかけると、だれかの不安は安心に変わる。笑顔が連鎖すれば、職場は、社会は居心地がよくなっていく。その一歩に、自分はなりたい。アルバイト時代、そうだったように。

出社してだれかに会うたび、彼はにこやかに挨拶をするようになった。

「山田さん、おはようございます。暖かくなりましたね」

同じ部署の仲間はもちろん、ふだんは接点がない社員にも分けへだてなく。

確定拠出年金についての折衝を行う現在の仕事は、アルバイト時代のそれとは大きく異なる。だが笑顔になれる環境なら、だれでも生き生きと自分を表現できるようになるという想いは、いまも変わっていない。

おずおずと仕事について聞いてきた若手を「よく気づいたね」とほめ、消極的な部下がいれば「どんなところが不安なの？」と目線を同じにして励ます。

風通しのいい職場には、今日も横山肇の温かい笑顔がある。

第48話
「人間万事塞翁が馬」を胸に

損害保険ジャパン株式会社　松嵜恵子

「松嵜恵子は、新しい生き方を体現することで未来を照らす」

松嵜恵子は学生時代からグローバルビジネスに憧れ、中国での事業開発という希望を胸に就職活動を行なった。

「恵子のひいおじいちゃんは戦前、日本から中国に渡って上海の大学に学び、繊維事業を興したんだよ」

周囲の同級生が欧米に目を向けて英語を学ぶなか、曽祖父の話を両親から聞かされていた彼女に迷いはなかった。これからはアジアの時代が必ずやって来る。損保ジャパンに入社してまもない二〇〇一年、中国がWTO（世界貿易機関）に加盟。まさに市場を開いていこうとするタイミングで、希望通り新会社立ち上げメンバーの一員として上海に赴任することになった。

当時はまだ女性の社会進出も現在ほど進んでおらず、女性の海外駐在員は珍しかった。

新しい人たちと毎日出会い、新規開拓に励んだ。チャンスをもらったからには期待に応えたい。その一心から仕事一色で頑張った。だがいつしか希望して飛び込んだ世界は、「しなければ」にあふれるようになった。

とある真夜中、腹部に激痛が走った。脂汗がにじみ出るなか、自分でタクシーを呼び、病院の受付で名前を言った後は記憶がない。強い責任感からのオーバーワークだった。仲間に迷惑をかけて申し訳ないと自責の念を感じながら、帰国の途についた。

やがて家庭を持ち、親になり、外の世界と触れ合うことで、仕事は人生のなかの大切な一部分として存在するようになった。縁あって携わることになった人材開発の仕事で人について学び、働くことは「しなければ」から「したい」に変わった。自分のあり方を変えることで、幸せな働き方を知り、それを実現できるようになった。

いまの仕事は天職だと思っている。とても仕事をしているとは思えない。遊んでいるときのように、わくわく熱中している。毎日が楽しく、とても幸せだ。

「人間万事塞翁が馬」

つまずきが幸運を呼び込むこともある。父が教えてくれた中国の言葉だ。

あの頃の私のように「しなければ」と自分を叱咤激励し、〝ねばならない〟や〝するべき〟で働いている人はまだ多い。でも、私たちはもっと幸せに、もっと働くことを楽しめる。働くことが楽しくなれば、人としての生活も豊かになる――。

そんな世界を作りたいと松嵜恵子は考えている。

第49話
ハンドクリームと手紙の思い出

ＳＯＭＰＯヘルスサポート株式会社　恩田拡行

「恩田拡行は、困っている人と支援者の間の架け橋をつくる」

いつもと同じ朝だった。アルバイト先の配達物を届けるために見慣れた町をまわっていた。ある家のポストに近づくと、そこにはハンドクリームと畳んだ紙が置かれていた。かじかむ手で紙をそっと開いた。

「いつも一生懸命な恩田くんの姿を見ています。頑張るのはいいことだけど、もう少し自分のこともケアしてください」

さかのぼって前日夜のこと、恩田拡行はその家に集金にきていた。

「いつもありがとう、来月もまたよろしくね」

ごくいつもどおりのやりとり。でもそのとき、お客さまはあかぎれだらけの彼の手を見逃さなかった。

ただのアルバイトである自分のことを見てくれる人がいる。ここまで気にかけてくれる人がいる。それまでの自分には想像できない優しさに触れた気がして、しばらく涙を止めることができなかった。と同時に気がついた。高校卒業後、親に負担を掛けまいとアルバイトをしながら勉強をし、友だちとの交友関係も絶って生きていた時期。自覚はなかったが、実際には重圧と孤独でギリギリの精神状態だった。

この出来事は、人生の分岐点となった。人の心の健康に興味を持った彼はその後、進学した大学で精神保健福祉を専攻。さまざまな勉強や実習を経るなかで、働く人の心の健康を守る仕事に関わりたいと決意した。当時は今ほどメンタルヘルスの重要性が叫ばれていなかった時代。新卒時は人材業界で企業の人事部と接しながら社会の仕組みを勉強。メンタルヘルスのマーケット拡大を機に、ＳＯＭＰＯグループのヘルスケア事業に加わった。

メンタルヘルスの土壌づくりに奔走したこの十年で企業の意識は大きく変わったと実感する。今では社員のメンタルヘルスは会社側の当然の責務。その環境のなかで彼が目指すのは、何かにつまずき思い悩んでいる人と、手を差し伸べられる「身近な人」が素早くつながる社会。また、メンタルヘルスの専門職がより身近な人に感じられるようにもしていきたい。培ってきたノウハウとともに、これからは蓄積したさまざまなデータを活かし、そうしたニーズを高い精度で予測し人と人をつなげていく仕組みを作れないか――。

「人を救うのは人である」という強い信念が、今なお恩田拡行を突き動かしている。

第50話
ご入居者さまの思いをかなえる

ＳＯＭＰＯケア株式会社　大井広和

「〝大変な日本〟の最前線に飛び込んだ、大井広和の心意気」

「急な話で申しわけないんだけれど、うちの旅館ね、たたむことになってね……」

下宿先にかかってきた、突然の電話。代々続く旅館の廃業を告げる母の声を聞いて、大井広和は目の前が真っ暗になった。

いつかは家業を継ぐもの――。

幼いころから当然のように描いていた、未来へのレールがぷつりと途切れた瞬間だった。

だがやがて、大学の大教室でぼんやりと聴いていた必修科目「人間福祉学概論」の講義が頭のなかによみがえる。

「二〇〇〇年あたりまで九千万人ほどいた生産人口が、二〇五〇年になると五千万人にまで激減します。超高齢化社会を迎える日本は、大変な時代に直面するのです……」

そのとき、頭のなかにある考えが浮かんだ。

そうか、だったら大変な日本を支える仕事も悪くはないか。

「わざわざ大学に進んだのに、そんな大変な業界に進むことはないんじゃない？」という友人たちの声を振り切るようにして、彼は介護士として働きはじめる。

あるとき、寝たきりの女性が入居された。

「私はずっと寝たきりでいたくないの。がんばって、自分の足で歩きたいのよ」

女性の言葉とは裏腹に、それは難しいのではないかという声が上がっていた。

しかし彼とスタッフは根気強く介護やトレーニングに付き合い、女性は徐々に力を取り戻していく。そしてついには、付き添いなしでお手洗いにも行けるようになった。

「こんな日がまた来るなんて。本当にありがとうございます」

満ち足りた女性の表情を見て、この仕事に出会えてよかったと心の底から思った。

現場での経験を積むなかで、気になりはじめたことがある。

介護職のスタッフは、医師、看護師の人と話し合うとき一歩引いてしまうことが少なくない。医療のプロの意見を優先させてしまう。

「介護に携わる私たちは、ご入居者さまの生活全般を支えるという自らの職種に、もっとプライドを持っていいはずです」

私たちは介護のプロだ。

その強い信念を胸に、大井広和は今日もケアマネジャーとの意見交換、ケアスタッフへの技術指導に奔走する。すべてはご入居者の思いをかなえるために。

第51話
防災、減災の大切さを

損害保険ジャパン株式会社　金井圭

「金井圭が大震災で痛感した損保会社の使命」

金井圭は新聞紙を重ねて細長く折りたたんでみせた。

「腕にあてがうと副木に早変わりします」

たちまち子供たちから、「本当だ」「身近な物が役立つね」の声があがる。彼はうなずきながら、続いてポリ袋のポンチョや毛布の担架なども紹介していく――彼が取り組む「防災ジャパンダプロジェクト」のひとコマだ。

彼は子供たちに語りかけながら、「世のため、人のため」という人生の指針を再認識し、その原体験となった、地震被災地での日々を思い出していた。

二〇二一年三月十一日十四時四十六分。彼が本店営業部から現職の前身CSR室への異動を告げられた瞬間、大きく足元が揺れ、危うく膝をつきかけてしまった……。

ここから東日本大震災との深い関わりが始まる。彼は時をおかず、宮城県気仙沼市へ急行するよう命ぜられた。東北を代表する漁港は津波と火災で無残な姿になっていた。魚の焦げた強烈な臭いが鼻をつき、基礎だけ残った家屋の跡には花が手向けてある。呆然とするばかりだったが、すぐ現実の業務に引き戻された。ひっきりなしに、被災者からの悲鳴に近い連絡が入ってくる。

「家が焼けたんだ、保険金はどうなる？」

「津波に流された場合もお金はおりるの？」

火災保険だけでは地震災害をカバーできず、地震保険の加入が必要。ところが当時の加入者数は多くはなかった。

彼は誠心誠意を尽くして説明した。ほとんどの顧客が頭を垂れ、深いため息をつく。彼はいたたまれなくなると同時に、損保会社の果たすべき使命を痛感したのだった。

「もっと防災、減災に取り組まなくては！」

彼はそれから七年間、啓蒙活動に従事した後、三年の営業職を経て二〇二一年の春、元の職場へ復帰する。CSR室は「サステナビリティ推進部」に名称を変えていた。

だが、彼の防災・減災に対する熱意はいささかも衰えていない。ワークショップを企画、運営する一方、リアルデータプラットフォームの周知にも積極的。大学やセミナーの講演で力説している。

「ここに蓄積されていく災害関連データは貴重な財産。防災、減災、介護に応用すれば、まさに〝世のため、人のため〟になります」

地震は日本の宿命でもある。だからこそ、金井圭は原体験を胸に刻み、今日も業務に邁進する。

第52話
みんなで支え合う

SOMPOケア株式会社　廣川秀人

「廣川秀人は〝開かれた老人ホーム〟を目指し、奮闘する」

「お前ら、なにやってんだー！」

そう叫びながら駆けつけてくれた村のじいちゃんの姿が、今も廣川秀人の記憶に鮮明に焼き付いている。

小学校六年生のときだった。友達と山へ行き、ふざけて道端のお地蔵さんを持ち上げようとしたら、意外に重くてバランスを崩し、倒れたお地蔵さんはそばの斜面を転がり落ちて、下を流れる川にはまってしまった……。

子供の力ではどうにもならず、じいちゃんを呼びに走った。数分後、現れたじいちゃんたちがお地蔵さんを縄で縛って引き上げ、山に戻してくれた。

「何か困ったときは、あのじいちゃんに言ってみなよ」

子供の頃から親にそう言われて育った。彼が生まれた新潟の村では、住民のほとんどが顔見知り。両親共働きの家も多く、子供は近所のじいちゃん、ばあちゃんが見守りつつ、みんなで支え合う人間関係が自然とできあがっていた。

高校卒業後は東京に出て調理師免許を取り、飲食店に十数年、勤務した。しかし忙しすぎて、生まれた我が子に自分の顔を忘れられそうになって、離職。次の仕事を探していたとき、介護業界の求人が目に飛び込んできた。

「高齢者の方を支えて、喜んでいただくというのはいい仕事だな……」

二十代の頃には一度も思い出すことがなかった故郷のじいちゃん、ばあちゃんへの思いが湧き上がってきた。彼らに恩返しをするような気持ちで介護士の仕事に就いて、十二年。九年前からはホーム長を務めている。

近隣住民の方々にホームを身近に感じてもらいたい。その思いで、コロナ禍の前は地域の高齢者にホームをカフェのように解放し、ご入居者やスタッフと交流を図る取組みを毎月行なっていた。さらに彼自身、〝住んでなくても大丈夫だから〟と住民から熱望されて、ホームのある町内会の役員も務めている。つながりができれば、自宅で介護をする人から相談を持ちかけられたり、一緒に問題を解決していくこともできるようになるはずだ。

「ホームで過ごす人も街で過ごす人も、同じ地域の住民。だから、みんなで支え合う地域を作っていきたい。何かあったら自分も駆けつける」

そう、あのじいちゃんたちみたいに……。それが廣川秀人の強い想いだ。

第53話
徹底的に仲間たちと向き合う

ＳＯＭＰＯひまわり生命保険株式会社　岩村美香

「岩村美香は、社員一人ひとりが能力を発揮する居場所をつくる」

岩村美香には後悔がある。

「もう仕事を続けられない」「こんな仕事をしたかったわけじゃない」

ＳＯＭＰＯひまわり生命で構造改革が進んだ時期、尊敬する先輩が、苦楽を共にした仲間が、疲れた表情でそう言い残し、会社を離れていった。大事な人を支えられなかった。苦い思いはトゲとなり、ちくちくと彼女の胸を刺した。

ＳＯＭＰＯは変革を起こしながら、より強靭な企業体へと進化してきたグループだ。変化は時に衝突や摩擦をもたらす。悩む同僚らに声をかけられなかった。

その頃、彼女自身が限界を迎えていた。元気だった父が、突然脳梗塞で倒れたのだ。憔悴した母を支えようと、不安を押し込めて普段どおりに振る舞った。

会社では仕事をこなすのに精一杯。周囲を気遣う余裕はなかった。しかしあるとき、孤独感と無力さがないまぜになり、通勤中、こらえきれず涙があふれることがあった。

保険は人が真ん中にいる商品だ。だからこそ、働く一人ひとりが健やかでいなければならない。今度こそ、だれもが安心して働き、能力を発揮できる居場所をつくろうと誓った。

彼女にできるのは、地道な積み重ねしかなかった。あるとき、同じ職場の女性社員が業務変更を言い渡され、戸惑いや不安を感じていた。彼女はその女性社員に徹底的に寄り添った。疲れた様子に気づけばお茶に誘い、何度も何度も会話を重ねた。やがて岩村の人財開発部への異動が決まった日、その女性社員はこう明かした。

「岩村さんがいなければ辞めていたかもしれない。仕事だけでなく、心も支えてもらったおかげで、今もここにいられます」

かつて去っていった仲間たちの姿が頭をがよぎった。今度は、間に合った。今度は、手が届いた。

現在は人財開発部で若手育成に采配を振るう。データ活用の時代を担う若手社員が、存分に自身の感性やスキルを発揮できるよう、安心して仕事に打ち込める環境を整備する。

「人が人を想う気持ちこそが保険の原点。リアルデータを用いて、これからさらに良い価値を生み出すためにも、社員一人ひとりが自分を信じ、能力を伸ばしていける居場所をつくりたい」

岩村美香はそう信じて、今日も社員と向き合う。

第54話
自信の在り処

ＳＯＭＰＯケア株式会社　髙畑朱江

「髙畑朱江は、『正しく、楽しい』職場環境にしたいと思う」

「そのままで、いいと思います。髙畑さんの判断は、間違っていません」

五年程前の出来事だ。

何気ないひと言だったが、髙畑朱江にとっては予想だにしない、上司の言葉だった。

――彼女は高校卒業後介護の仕事に就き、その後介護福祉士の資格を取得。自らも介護サービスを提供しながら、管理者として訪問介護士のシフト表やスケジュール管理、介護計画を立てるようになっていた。ちょうどその頃、当時の上司から仕事の効率アップを求められた。それ自体は当然のことだが、高卒の新人介護士をいきなり一人で訪問させるように指示されることもあった。まずは、ご利用者の安心を優先すべきだ。そう直感的に思った彼女は自らの判断で、ベテラン同行者を付けるシフトを組んだ。その分、効率が悪くなってしまうが、「正しい」と思った。同時に会社の指示に背いているという自覚もあった。それでもいい、と心を閉ざした。

何事にも自分の本心を打ち明けなくなったのは父親の影響が大きいな、と彼女は思う事があった。彼女の父親は元国体選手でばりばりの体育会系育ちということもあり、小さいころから帰宅時間やしつけにうるさく、ちょっとでも守らないと殴る、蹴る、バケツの水を頭から浴びせるなど体罰はしょっちゅうだった。娘が心配のあまりという気持ちもわからないではなかったが、彼女はいつしか父親の顔色をうかがうようになった。父親だけではなく、周りの人の表情をいつも観察し、自分の本当の気持ちを表現しなくなった。分かってもらえなくてもいいと、心を閉ざすようになった――。

そんなときだ。「髙畑さんの判断は、間違っていません」のひと言に、彼女は救われた。

――私は正しかったんだ。

彼女は密かに自慢に思っていることがある。「正しく、楽しく、仕事をする」というずっと大切にしてきた考えを、ともに実現させる仲間が増えていること。以前はその「正しさ」は自分の中だけのものだったが、今は違う。自分の考えを信じ、本音で向き合い、仲間を信じられる。そう自信を持って言える。大切な仲間と一緒にこの職場環境を守りつづけていきたい、と髙畑朱江は思っている。

第55話
あの叱正があったからこそ

SOMPOコミュニケーションズ株式会社　中濱江利奈

「中濱江利奈のコンタクトセンターを見渡す暖かいまなざし」

中濱江利奈の職場は常に緊張の糸が張りつめている。しかも二十四時間、三百六十五日休みなしの稼働だ。そんな職場での日常に、同情的な声をかけられると、彼女は肩をすくめてこう答える。

「交通事故は時と場所を選びません」

東京・新宿新都心の高層ビルに二フロアを占める東京センター。ここでは、三百人から三百五十人のAD（アドバイザー）が対応にあたる。彼女はグループリーダーとして人材育成や人事評価、労務管理を任されている。

ADが顧客からの電話をとった。

「すぐにレッカー車の手配をレッカー会社におつなぎいたします」

彼女の意識はADのひと言ひと言だけでなく、表情や声のトーンにまで注がれる。気づかい、思いやり、冷静さ、そして事故状況の把握……チェックすべき点は多い。

「さっきの対応、とてもよかった」

彼女はコンタクトセンターSV（スーパーバイザー）を呼んで、顧客との応答を終えた若手ADの評価を伝える。

「とくに『雪と寒さで大変でしょうけど』なんて、お客さまの状況を踏まえた言葉が出るようになったのは大きな進歩。がんばったね、と伝えてもらえますか」

SVに声をかけられ、若手ADの顔に喜びの色が浮かぶのが見えた。彼女も頬を緩めた。こういうとき、脳裏に自分の新人時代のシーンが蘇る。

若かりし頃、彼女は懸命に事故の受付から保険金のお支払いまでの業務をこなしていた。ただ、アルバイトの経験も少なく、世間知らずのまま入社したのは事実。それまで、人生を左右されるような強烈な言葉や体験と出逢うこともなかった。だから、周囲の大人たちには物珍しく映ったのかもしれない。「新人類」「宇宙人」なんて、苦笑まじりで言われることも。

――そんな私があのときから変わった。

顧客との対応を終えた彼女に、ある先輩が別室へ来るようにと言った。書架と書架の間の狭いスペースでふたりは向き合った。

「さっきの受け答えはなに？　もう少し、お客さまのことを考えて対応しなさい」

辛辣な指摘が続き、彼女は青ざめる。だが、そっと上目づかいに先輩をみて、ハッと気づいた。先輩は私のことを思い、悪役を買って出て真剣にアドバイスをしてくれている。これは、早く一人前になれというエールに他ならない。

「先輩、ありがとうございます！」

思わず大きな声が出た。先輩は一瞬、虚をつかれたようになったが、しかめた眉をすっと収め、白い歯をみせてくれた。

現在の立場に就き、彼女はあらためてあの先輩から受け継いだ意志、チームとしてやるべきことを心に刻む。

――今までの感謝を次代へ繋ぐ。

だが、時代は移り変わり、職場のメンバーとの接し方は様変わりせざるをえない。それでも彼女は声を荒らげない。自分から挨拶を口にする。いいところを見つけて、週に一度は褒める。

――スタッフの笑顔がお客さまの満足につながれば、それがいちばん。

中濱江利奈は今日も、厳しさのなかに暖かさのこもった眼でコンタクトセンターを見渡している。

第56話
人生の最期を笑顔で。

SOMPOケア株式会社　髙坂匡広

「悩みを乗り越え、髙坂匡広がつかんだ働く意味」

子どものころ、日曜日が待ち遠しくて仕方なかった。父と過ごした公園の展望台からの景色、売店で買ってくれるメロンクリームソーダの味が忘れられない。やさしくて格好よくて、自慢だった父。しかしその父が、いつからか変わってしまった。体調を崩して、やがて会社に行かなくなった。笑い声が絶えなかった家庭が、重い空気に包まれていた。

父との日々は、彼に大切なことを教えてくれた。

「人間って、一人じゃ幸せになれないんだ」

それなら、と彼は思った。

「困っているだれかを助けて、周りにいる人たちにも幸せになってほしい」

そして彼は、介護士として働きはじめる。

だが、しばらく経って壁にぶつかった。来る日も来る日も、同じ仕事のくり返し。介護の仕事に、意味を見出せなくなってしまった。このままずっと同じ時間が流れていくのか……。

「もういいや。辞めよう」

そう思ったとき、脳裏に次々と笑顔が浮かんできた。

「このホームに来られて、ほんとうによかった」

「お兄さんに会えて、私の人生幸せだったわ」

人生の最期を迎えようとしているご入居者の笑顔、そして感謝の言葉。

こんなに尊い仕事ってあるだろうか。彼は顔を上げ、再び歩きはじめた。

彼がいまホーム長を務めるホームは、「未来の介護創造プロジェクト」の先行ホームとして、ご入居者個人の体調、行動、運動能力などのデータ化を積極的に行なっている。

ご入居者一人ひとりへの援助が最新データとして蓄積されるようになり、よりこまやかな対応ができるようになってきている。このデータが将来的にリアルデータプラットフォーム構築に役立つのではないかとも考えている。

システムの充実だけではない。大切なのは、凡事徹底。彼がだれに対しても丁寧な言葉遣いを心がけることで、ホーム全体にだれかを思いやる姿勢が広がった。

あのとき得た、人間は一人では幸せになれないとの思いが彼のなかで生きている。

人生の最期を笑顔で迎えてほしい。

その願いが、今日も髙坂匡広を駆り立てる。

第57話
人は、何度でも変われる

損害保険ジャパン株式会社　渡辺雅樹

「渡辺雅樹は、人生を変える気づきや出会いを作っていく」

渡辺雅樹は、七歳で阪神大震災を経験した。早朝、激しい揺れでベッドに頭を打ちつけ、飛んできた両親と抱き合いながら、揺れがおさまるのを待った。当時は地震保険があるなんて知る由もなかった。

高校時代は暗黒だった。成績は下位。スポーツもできない。何をやっても上手くいかない。まるで地べたを這い回っているような気分だった。しかし、変わるきっかけがあった。微分積分が、急に分かるようになったとき。たったそれだけの出来事なのに、急に他のこともできるようになった。そして理系の大学に進み、生命情報科学の研究をはじめた。

「研究者になるんだろうな」

漠然と考えていた。しかし人が変わるきっかけは一度ではない。大学時代に参加したゼミ。人材育成研究の教授に出会うことで人間に興味を持った。いろいろな業種の人と話したい。就職先として選んだのは損保ジャパンだった。

入社当時には、周囲と衝突することも多かった。ここはおかしいのではないか、お客さまに不利益が出るのではないか、と。

「相手と自分、お互いの個性を認めていなかったのかな」

思いを伝え合うことで次第に解決できるようになった。現在は、金融機関の営業担当をしている。保険にとらわれず、ＳＯＭＰＯグループの持つ多様なサービスを駆使し、顧客にソリューション提供を行なっている。

二年ほど前に、学生時代の後輩からメッセージが届いた。

「〝おとなのゼミ〟に参加してみませんか？」

大学のときに影響を受けた教授が顧問についていた。さまざまな業界の卒業生が参加し、ノンジャンルで、各自の得意分野を紹介し合っていた。自分は職場の人とだけ接して、世界が狭くなっているのではないか。自分はまだ変われると思った。

人生の新しいきっかけは、気づきや出会いによってもたらされる。顧客をよく知るためのリアルデータ。まだ彼の業務での活用はできていないが、これから多くの発見があるはずだ。きっかけがあれば、人は何度でも変われる。さらなる人生を切り拓く気づきや出会いを、渡辺雅樹は作っていく。

第58話
両親の教えを胸に、挑戦を続ける

損害保険ジャパン株式会社　矢野隆志

「だれかのために。矢野隆志は、健康で幸福な社会を目指す」

島根県出雲市で生まれ育った矢野隆志は、学校の研修で高齢者施設を訪れたり、医師である父から話を聞いたりして、健康、病気、老いについて「自分ごと」として考える高校生だった。「人は必ず老いていくが、なんとか健康寿命をのばせないものか」。地域の人たちと接して、加速度的に進む高齢化に、いつしか深刻な問題意識を抱くようになっていた。

だが、彼が本気でヘルスケア分野、とりわけ予防医療の仕事に携わりたいと願うようになったのは、社会人になって間もなく、父と母をがんで立て続けに亡くしたことがきっかけだ。医師として地域医療に心血を注いできた父と、そんな父を温かくサポートし続けた母を。

「何をもってしても、心身ともに健康でいることが一番の幸せ」

最愛の両親を失い、心の底からそう思った。

その幸せが当たり前の社会を目指したいと、現在は海外研修（SOMPO Global University）の一環として、NPO法人クロスフィールズが提供している国内留職プログラムにおいて、医療政策のシンクタンクである日本医療政策機構（HGPI）で実務経験を積む日々だ。ここでは産官学民のマルチステークホルダーが結集し、認知症やメンタルヘルス、NCDs（非感染症疾患）、女性の健康、データヘルスなど、世界が抱える様々な健康・医療課題の解決に向けて政策提言を発信している。加えて、彼は幼少期から打ち込んできたテニスを通して培ってきたグローバルで多様な価値観を武器に、シンガポールの大学のオンライン講義で経営知識の習得にも励む。

これらの経験を踏まえ、今後手掛けていきたいのが、データとデジタル技術を活用したヘルスケアビジネスだ。何より、ヘルスケア事業、介護・シニア事業を営むSOMPOには、豊富な介護・ヘルスケア関連のデータが集まっている。これを蓄積し、分析すれば、病気・介護予防につながる新しいサービスを生み出せるに違いない。

矢野家の家訓「やればできる」。母からは「相手の立場に立って考えること」。彼を支えてきたこれらの言葉を、これからは世界の人々の幸せにつなげよう。そんな自分を両親はずっと温かく見守ってくれていると、矢野隆志は確信している。

第59話
家族の笑顔が伝播して

損害保険ジャパン株式会社　松木康浩

「松木康浩は、次の世代に残せる社会創りに貢献する」

「お父さん、ほら見て！　たくさん釣れたよ！」

最初はおそるおそる水面を覗き込んでいた六歳の息子と四歳の娘が、目をキラキラさせて魚釣りに夢中になっている。その姿を見ながら、松木康浩はあらためて「家族と過ごす時間」の大切さを噛み締めていた。

大学進学のため富山から上京し、サークルでは幹事長を務めた。二〇〇四年、損保ジャパンに入社。保険会社を志望したのは「商品が人に近しい」という点であり、人となりによってあげられる成果に違いが出る世界で自分を試してみたい、と思ったからだ。仕事は多忙だったが、しっかりした手応えを感じることで毎日充実していた。

やがて結婚し、子供を授かり、転勤のため三年前に家族四人で京都へやってきた。現在は京都所在のグローバル企業を顧客とするマーケットで、損害保険分野を中心とした企画営業を行なっている。

「あとの世代に残せる、より良い社会を創りたい」

これまで仕事中心だった彼が、そんなことを考えるようになったきっかけは、昨年の夏、家族旅行で京都の舞鶴と福井の小浜に行ったことだった。

虫が苦手な我が子たちに自然の素晴らしさを体験させてあげたい。早朝四時に起き、車で二時間かけて日本海側へ向かうと、街中ではなかなか出会うことのない光景が目の前に広がった。川でメダカを捕まえ、堤防では魚を百匹釣った。子供たちが虫嫌いも克服し、少し成長した姿を見ることができて幸せを感じた。

「豊かな自然に触れ、家族が豊かになる時間を大切にしたい。この子たちの明るい未来のため、自分に貢献できることはないか」

ここ数年で「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）」を方針として掲げる企業も、ずいぶん増えた。仕事先でサステナブルに関する話題が出ることも多い。社会人である自分も、まずは出来ることから始めようと心がけている。

コロナ禍のステイホーム期間を経たことで、視野が広がったなと感じる。家族の笑顔が伝播したのか、「表情が柔らかくなったね」と言われることも増えた。そのおかげか、新たな取引先との商談もまとまりつつある。子供たちもすっかり釣り好きになったようだ。

「また海に連れて行ってね。約束だからね！」

第60話
誰もが幸せになれる未来へ

ＳＯＭＰＯ未来研究所株式会社　宮地裕太郎

「宮地裕太郎は、新しい働き方をデザインする」

「子宮に大きな筋腫があります。さらに大きくなると切迫流産するかもしれません」

妻の妊娠中、そう医師から告げられたとき、宮地裕太郎は眼前が真っ暗になった。それまで何事もなく生まれてくるものだと信じていた。

妻の、病院のベッドから動くこともままならない日々が始まった。彼は週末や仕事帰りにデパ地下で彼女の好きな総菜を買って、病院へ通った。難産ではあったが無事に生まれてきてくれた娘を抱いたとき、彼にある想いが沸き上がった。

人がこの世に生まれてくるのは決して簡単なことではない。せっかく生まれてきたのなら、誰もが幸せになる権利があるはずだ。

銀行マンだった父親の背中をみて育った彼は、もともと金融業界に興味があった。金融が経済活動、ひいては社会を支えていると考えたからだ。入社してからも、保険の営業やマクロ経済の調査研究などに専心していた。しかし、娘が生まれてから、彼の視点は営業や経済指標の数字だけではなく、働く人々にも向くようになった。

彼は今、ＳＯＭＰＯ未来研究所で新しい働き方をデザインしている。少子高齢化が進む日本では、今後多くの人々が、より長い職業人生を送ることになるだろう。どの世代でも活き活きと働くことができれば、肉体的にも精神的にもそして社会的にも満たされたウェルビーイングにつながる。さらに、個人のウェルビーイングを高めることによって、会社の生産性が向上し、結果、国や社会が豊かになる。そんな好循環の仕組みが作れないだろうか。

その実現に向けて、リアルデータの活用も視野に入れている。例えば、ウェアラブルデバイスで身体状態などのリアルデータを得ることができれば、心身の健康を維持しつつ個人のポテンシャルを活かせるようなアドバイスも可能になるだろう。

自殺や殺人といった理不尽なニュースが飛び交うたびに彼は思う。もう個人の努力や周囲のサポートでどうにかなる時代ではない。組織や社会が変わっていく必要があるだろう。自分にできることは限られているが、よりよい社会を築くために少しでも貢献したい。

「お父さん、どう？」

成人式へ出かける晴れ着姿の娘が幸せそうに笑う。幸せを実感できる社会を次世代につなげていかなければ……。あらためて心にそう誓った。

第61話
新たな発想と挑戦

損害保険ジャパン株式会社　氏家亮介

「氏家亮介は、企業のリスクマネジメントの未来を創る」

運転免許を取得して、大学の部活仲間と初めての湾岸ドライブ。

高速道路を降りてホッとした矢先のことだった。ガシャン！　という強い衝撃を受けて顔を上げると、氏家亮介の自動車はガードレールに突っ込んでいた。

「おい、みんな、ケガはないか？」

目的地を目前に、まさか事故を起こすなんて。親の自動車を借りたのに。後輩四人を乗せ、人の命を預かっていたことも急に怖くなった。

「何やってんだ、オレ。どうしよう……」

警察や保険会社に状況を説明するなかで、半分パニックになった彼を電話口でやさしくなだめてくれたのは、損害保険会社の担当者だった。

「初めての遠出だったんですか？　雨のなか、カーブでスリップしたんですね。同乗者の方もひどいケガはないようですし、だいじょうぶですよ。あとの対応は私がしっかりお手伝いしますから、安心してくださいね」

彼の気持ちが落ち着くまで、その人はくり返し言葉をかけてくれた。本当に心強かった。

「こういう仕事があるんだな……」

彼は初めて保険会社の存在を意識し、ありがたく思った。

あれから二十年の時が流れ、彼は損保ジャパンの企業向け保険営業の分野で手腕をふるっている。

この六年、サポートしているのは、食品・飲料メーカーだ。

カバーする領域は、会社が所有する自動車の自動車保険、建物や設備などに対する火災保険、食品飲料のリコールに関する保険、賠償関係に関する保険、商品の流通に関わる保険、従業員の個々の保険など、じつに多岐にわたる。

しかも、メーカーが新しいことにチャレンジすれば、それに伴うリスクが生まれ、新たな補償の提案も必要になってくる。

その精度を上げるには、業界の特性や、同業他社の商品の傾向などのデータ分析も不可欠だ。

最近は、食品ロスなどの社会的な課題も、保険会社として取り組めることはないか。そんな視点で考えるようになった。

「集計したデータを駆使して、企業への新しい提案につなげていくなかで、〝着眼点が面白い〟と感じてもらえたときは喜びがある。オーダーメイドで、いかに先んじてご提案できるか。そこにやりがいがある」

あの日、自分が感じたのと同じように、メーカーが抱える不安に寄り添い、安心を提供したい。柔軟な発想で真摯に向き合う氏家亮介の挑戦は、今日も続く。

第62話
二死満塁から、バットを振り抜く

SOMPOひまわり生命保険株式会社　吉川清隆

「吉川清隆は、相手に期待し、期待に応えて成長する」

吉川清隆の〝成功〟の原体験は、高校の野球部だ。三年生が卒業したあとの新チーム。二年生の彼は、四番に抜擢された。野球は小学生の頃から続けてきた。初めてチームの要になり、大会に出場した。ツーアウト満塁、フルカウント。期待が一身にかかる。震えるほど緊張した。フォアボールを狙うこともできる。

しかし、彼はバットを振り抜いた。

「あのとき、バットが振れたことは、今でも僕の原点だと思ってます」

快音が響き、懸命に走る。結果はセンター前ヒット。仲間たちは喜びに湧いた。

「野球は、〝間〟があるスポーツだ」

イニング、カウント、一つひとつのあいだに時間があり、考えることができる。期待される場面で、何をすればよいのか考えて選択する。チームの勝利に貢献したことが自信につながった。

大学を卒業して、外資系生命保険会社に入社した。外資系の生命保険会社では、個人の行動や成果が尊重されていた。プレーヤーとしての楽しさや喜びを味わう。だが、いつしか彼の立場は、プレーヤーからマネージャーへと変わった。考えるタイミングが訪れた。

相手に期待してみよう。高校時代、期待に応えることで自分は成長した。一歩退いたところで見守ろう。野球少年だったころにして欲しかったことを、やってみた。

会社の役割も変わってきた。保険の加入を募るだけでなく、顧客の健康をサポートするようになった。煙草をやめたりＢＭＩの数値がよくなったりすれば、保険料を返したり割引をしたりする。そうしたことがモチベーションになり、健康への取組みが社会に広がる。

何をするべきか、どうするべきか、いつやるべきか、しっかりと考えたい。人々の暮らしや人生を適切にサポートするためにデータを活用していきたい。人生には考えるための、さまざまな時間がある。適切なタイミングで最適なアドバイスができる環境を、吉川清隆は作っていく。

第63話
信頼、安心、幸せに働くこと

損害保険ジャパン株式会社　木戸梓

「木戸梓は仲間と一緒に〝水災害に強い日本〟を目指す」

「やっちゃったかな……」

自身がプロジェクトリーダーを務める会議の席で、思わず強い口調で言葉を発してしまった木戸梓。短期間で成果を出さなければならない焦りがあったとはいえ、さすがにきつすぎる発言だったようだ。瞬時に謝罪したものの、部屋の空気は凍りついている。このままでは会議がスムーズに進んでいかない……。躊躇なく彼女はその場で同じプロジェクトの身近な仲間に頼んでみた。

「今のは、ちょっと強かったよね。ほんとごめん。誰か助けて！」

すると、まるで事前にシナリオを打ち合わせていたかのように、仲間が笑いながら次々と彼女の代わりに発言をし、会議は再びするすると進みはじめた。

今日もありがとう――彼女は心の中で仲間に手を合わせた。

入社して十五年。嬉しい成功体験もあるが、数え切れないほどの失敗も経験し、そのたびに周りに支えられつづけてきた。頼れる仲間がたくさんいて、安心して仕事ができる。そのことがずっと彼女の心の勲章として輝いている。部署やプロジェクトによって仲間の顔ぶれは変わるが、彼女は常に自分なりに仲間のいいところやその人らしさを引き出すように努め、みんなが自分の意見をどんどん出し合える環境を作ることを目指している。仲間と一緒に幸せに働くことこそが、何より大切な彼女の信条だからだ。

現在、保険金サービス業務に携わる彼女が新たに目指しているのが、「日本の地域社会を水災害にめっぽう強くする」こと。ＳＯＭＰＯクエストの水災害プラットフォームプロジェクトに参加して、罹災時ではなく、平常時の備えとして何ができるかを模索しつづけている。気象や災害に関するデータを収集、蓄積、構築するＳＯＭＰＯのリアルデータプラットフォームを将来、自治体やＮＰＯと連携し、社内外へコンテンツとして発信させることで、防災を、だれもが楽しみながら身近な存在と思える社会にしたい。そうして一人でも多くの命を救いたい。

目標の実現に向けて、木戸梓は今日も仲間とともに仕事に励む。

第64話
ゴッホの『ひまわり』が導く未来図

ＳＯＭＰＯコーポレートサービス株式会社　二瓶真由美

「二瓶真由美は、多様な答えのなかから新たな価値を見い出す」

初めて行った海外で観た、ゴッホの『ひまわり』。それが二瓶真由美の原体験だった。

『ひまわり』の前で感動に震えながら、大学生の彼女は思った。いつか歳をとって、人として成長し、人の痛みがわかるようになったとき、もう一度ここへ来て、この絵と対峙したい。そして、作品に込められた作家の気持ちや人生を感じ取りたい。それはきっと、今の自分が感じるものとは違うはずだ。

だからこそ、〝ゴッホのひまわり〟が入社の決め手となった。中学生のころ耳にしていた絵画落札のニュース。この会社にも『ひまわり』があるんだ。

入社してからは、保険金サービス課での自動車物損担当や保険金サービス部でのインストラクター、総務課など、さまざまな職務に就いてきた。仕事に慣れてきたころ、何か新しいことを始めようと、芸術大学に入り直し、子どものころから好きだった写真を学ぶことにした。さまざまな個性をもつ学生が集まるなか、彼女の写真はこう評価された。

「二瓶さん、きれいに撮らなくていいんだよ。君の写真はきれいなだけで魅力がない」

それまでは、勉強でも仕事でも〝ただひとつの正しい答え〟を求めてきた。写真も、美しく撮ることが正解だと思っていた。

「答えはひとつじゃない、いろいろな価値観があっていいんだ」

仕事でも自分の価値観にこだわらず、柔軟に対応するようになった。一番の変化は、一人で抱え込まずに、仲間に仕事を任せられるようになったことだ。そのほうが、想像以上の成果が上がることもわかった。

現在の職場の年代層は、二十歳代～六十歳代までと幅広い。世代だけをみても、まさに異文化だ。そんな職場でのコミュニケーションを彼女は心から楽しんでいる。そして、仲間たちが自分をサポートしてくれていることに気づくたび、あたたかい気持ちになる。

つらいとき、新幹線に飛び乗り、ＳＯＭＰＯ美術館の『ひまわり』を観に行くこともあった。このところ、しばらく行っていないけれど、あの絵を見たら今、自分は何を感じるだろうか。

ひまわりはゴッホにとってユートピアの象徴だといわれている。仲間と良い面や個性を引き出し合えるような職場をつくり、新しい価値を生み出すこと。さまざまな経験がパズルのピースのようにはまり、二瓶真由美の未来図が描かれつつある。

第65話
雨雲を抜けて、広がる青空

損害保険ジャパン株式会社　森永早春

「森永早春は、明るく前向きな職場づくりに心を砕く」

小さいころから、空港で飛行機を見るのが好きだった。子供のときは母親が連れていってくれたが、大人になってからも、一人で空港へ行った。間近に見る飛行機の迫力が好きで、まっすぐにのびる滑走路を眺めてぼーっとしていた。

社会人となり、念願の旅行会社に就職できたときはすごく嬉しかった。しかし、そこで人間関係に悩まされるとは思ってもいなかった。好きで就いた仕事だけど、思い切って転職し、二十五歳で行き着いたのが現在の職場だ。

そして入社十五年目。今や保険金サービス課でチームリーダーとなった彼女が、チームをまとめるうえで常に心に留めていることがある。それは、「職場の人間関係こそが、仕事のモチベーションにつながる」ということ。

過去に自分が職場の人間関係によって悔しい思いをしたからこそ、同じような思いをしてほしくない。職場こそ、常にみんなが前向きに仕事に取り組める居心地のよい場所にしよう。それがひいてはお客さまの満足度や会社の成長につながるはずだ。

部下とは流行りの漫画や趣味の話、ときには過去の恋愛話も交えつつ、ささやかな雑談を大切にしている。自分が仕事で悩んだら、あえて部下に相談したりもする。それもこれも、困っていることがあれば、いつでも自分に相談してもらいたいから。

今、業界ではコネクティッドカーと呼ばれる、自動車とインターネットが常時つながり、事故が起きたときはリアルタイムで情報が送受信できる自動車が普及しはじめている。データの活用でより迅速な対応が可能になる反面、正直なところ、デジタルの普及のスピードの速さに戸惑っている自分もいる。でも、どんな新しいことにも前向きに挑戦していける雰囲気が、自分の職場にはある。

現在は二児の母になり、ますますたくましくなった森永早春。あのころ見た滑走路のように、自分の将来がまっすぐにのびていく。

第66話
スペシャリストを支える使命

SOMPOアセットマネジメント株式会社　泉川直毅

「泉川直毅のドラマーとしての経験が、強い組織をつくる」

ドラムさばきに熱をこめると、それぞれの音が一体となって盛り上がっていく。それが泉川直毅にとっての〝原体験〟だ。

「自分は個性やスキルがあるわけではない。だれもやろうとしないところに目をつけると、ハマる」

高校から大学時代、彼はバンド活動に打ち込んでいた。ボーカルやギターという花形のポジションに人気が集まるなか、彼はあえてドラムを選んだ。ドラムによって、バンド全体の音が引き締まると思っていたからだ。自分の音楽性を求めるよりも、皆の力を集めて魅力的な音楽をつくり上げたい、とバンドの調整役に徹し、インディーズレーベルと契約するほどの人気を得た。

プロを目指す気持ちがある一方で、彼には別の選択肢もあった。それは、金融業界への就職だった。

彼は、貯蓄や資産運用に積極的な家庭で育った。バブルの全盛期だった中学のころ、右肩上がりの株価チャートに衝撃を受け、親に頼んで自分の資金で株式ファンドを購入した。しかし、バブルは崩壊。なけなしの貯金は消えた。そんな経験から、彼はお金を増やすこと、守ることの大切さを痛感し、大学も経済学部に進学した。

プロのミュージシャンとして食べていけるかというと、自信がなかった。さらに彼は気づく。どの組織であっても、調整力を発揮することが自分にとっての生きがいなのだと。

現在、彼の職場には、営業や運用など多くのスペシャリストがいる。いわばボーカリストやギタリストのようなスタープレーヤーたちの集まりだ。

しかし、どんなに優秀な人材がいても、その能力を活用できる組織でなければ、お客さまの資産を増やし、守ることはできない。そう考え、彼は組織がスムーズに回るために必要なことは何か、常に模索している。そして、新しいことやだれもやりたがらないようなことでも積極的にチャレンジしていく。

地味なポジションともいえる。しかし彼には、組織力を上げるためには、自分のような存在が必要だという信念と熱い思いがある。

いまも、かつての仲間たちとライブを開くことがある。

「やっぱりお前のドラムじゃなきゃダメだな」

ライブの後、メンバーの一人がそう声をかける。その言葉が、泉川直毅の思いを一層強くする。

第67話
電話口で漏らした嗚咽

損害保険ジャパン株式会社　塩谷恵理子

「塩谷恵理子は、真っ直ぐにお客様の心に寄り添いつづける」

「主人が亡くなりました」

所得補償保険の支払い業務を担当していたお客さまからの電話に、息をのんだ。まさか。病気の難しさはわかっていたものの、まだ五十代の半ば。回復を信じていた矢先の出来事だった。

奇しくもほんの数日前、かつての同僚が自然災害に巻き込まれて命を落としたことを知ったばかり。人の運命は、だれにもわからない――。命の尊さ、はかなさを思う気持ちが強くなっていた時期と重なった。

いつも冷静沈着なはずの彼女が、お客さまからの電話に珍しく動揺した。

「……もっと……長くお支払いしつづけられると思っていたのに、……残念です……」

思わず電話口で嗚咽を漏らした。プロとして失格だとはわかっていたが、あふれ出る感情を抑えることはできなかった。

後日、お客さまから感謝の手紙が届いた。ありがたい気持ちに包まれたものの、感謝の言葉をかけられるほどに、自分は一〇〇％の力を出しきったのだろうか、お客さまに最初から最後まで寄り添うことができていたのだろうか、と自問自答する気持ちが湧いてきた。

たくさんの業務を並行して進めなくてはいけない日常のなか、作業に追われるだけになっていなかったか。一つひとつの件に親身になり切れていたのか。一途で真面目な彼女は、感謝されるほど、もっとお客さまに寄り添いたいという気持ちが強くなった。

この出来事をきっかけに、彼女は仕事の進め方を自らの意思で見直した。書類や事務手続きのチェック機能も再構築。これまでの経験から、お客さまの不安や相談事を予測し、先回りして回答や提案を出すようにもなった。素早いレスポンスは言わずもがな。医師ではない自分に病気を治すことはできないけれども、悲しみに直面しているお客さまを一貫して思い、サポートしたいという気持ちはだれにも負けていなかった。

第68話
若かりし頃の失敗を糧に

ＳＯＭＰＯリスクマネジメント株式会社　松尾弘史

「松尾弘史は、人々の再チャレンジをサポートする」

あれは若気の至りだった。

仕事の面白さがわかってきた三十代半ば、新しいシステムづくりを松尾弘史は任された。部門をまたぐ大きなプロジェクト、チャレンジ精神旺盛な彼は適任だった。

ところが、実際にスタートしてみると予想外に難航した。計画に対する理解も熱意も異なるメンバーをうまくまとめることができず、苛立ちと焦りが募る日々。多忙を極める本社部門やシステム部門との足並みが揃わない。経験の浅かった彼は業を煮やし、ある日、思わず声を荒げた。

「もう役員の決裁が下りてるんです。会社がやると決めたことだから、やるんです」

場の空気が凍りついた。まずい、と思ったのはあとの祭り。心のなかで冷や汗をかきながら静かにその場をあとにした。

デスクに戻った彼はあの寒い空気を思い出し、逆に冷静さを取り戻した。そして改めて考えた。プロジェクトがお客さまや代理店にとってどれだけ役に立つことなのか。結果として会社にどれだけの効果をもたらすことなのか。ひたすら考え、自分なりの考えと言葉で資料をまとめ、後日メンバーたちに自分の言葉で説明をして回った。

「そうか、君の思いはそういうことだったのか。よくわかったよ、皆に伝えよう」

彼自身の気持ちを込めた言葉は、驚くほどスムーズにメンバーの心に届いた。そこからの回復は早かった。すぐにプロジェクトメンバーが積極的に動き出し、これまでの停滞がウソのように一気に前進した。

チャレンジャーだったぶん、若かりしころはこうした失敗も多かった。でもその都度、上司、先輩、メンバーが助けてくれた。出直すチャンスをくれた。失敗を克服したことで人間力向上にもつながった。この経験のあと、今度は自分が助ける側にまわらなければ、と決意した。思えば子どものころから、家族や友だちの喜ぶ顔を見ることが好きだった。これからは自分が失敗した人を助け、笑顔にしていく番だ。

環境に恵まれたからこそ、いま改めて思う。これからは頑張っている人や企業の再チャレンジを自分がサポートしていきたいと。考えてみれば、損害保険は人びとの再チャレンジをサポートするものだ。たとえ災難に遭っても、前を向き、立ち上がるためにあるのだから。近年、太陽光や風力発電の設備破損など、この時代ならではの新たなリスクも増えている。

事故に関するさまざまなデータを積み上げていくことが、こうしたリスクを回避する対策に役立ち、そして万一事故が起きたときには再チャレンジの力になるはずだ。リスクマネジメントのプロである松尾弘史は、そう確信している。

第69話
だれにも後悔してほしくない、その覚悟

損保ジャパンパートナーズ株式会社　茶谷明美

「茶谷明美は、データ活用の近未来に大いなる期待を抱く」

「どうして、もっと早く……！」

がん宣告を受けた父が主治医と治療方針を話しているのを聞きながら、茶谷明美は、保険の見直しを先送りにしてきた後悔で胸がいっぱいになった。最新の重粒子線治療を、選択肢のひとつにしてあげたい。しかし父が加入している保険ではカバーしておらず、全額実費になる。ほかに良い治療方法はないのか。彼女は連日深夜まで資料を読み漁り、眠れない日々を過ごした。保険の重要性はわかっていたはずなのに、保険に詳しい人のサポートがあると助かることを実感していたのに、現実に即した内容で見直すべきだったのに、忙しさを理由に先送りにしてしまった……、とチクチクする胸のうずきは消え去らない。

彼女は過去に、自動車事故で肩甲骨を骨折し、完治まで二年半を要した経験を持つ。治療中に相手方の保険会社から治療費の打ち切りを言い渡されたときの深い絶望感は、いまでも忘れられない。しかし治療に当たってくれた医師が間に入ってくれたおかげで治療を続けることができた。完治後、自身の自動車保険の弁護士特約を利用し、安心して示談を終えることができ、保険のありがたさを痛感した経験も。

あるとき、彼女ははっとした。

「お客さまもそうかもしれない」

日々の忙しさのなかで、後回しにされているのかもしれない。ご自身のリスクに気づいていないのかもしれない。

「適切に伝えられる人になろう」

だれにも後悔してほしくないから。

彼女の仕事は電話対応だ。時間をかけた説明は現実的ではない。そこで、知り得るお客さま情報から、いつ、何が起こりそうなのかを想像して、簡潔にお伝えし、お客さまに気づいてもらいたい。ここには彼女の常に欠かさない学びや情報収集、そして経験が生きている。

そして彼女は考える。年齢や家族構成に応じて、人生のあらゆるリスクを予測できるシステムがあれば、即時により適切な提案ができるようになるに違いない。

リアルデータを活用しながら、経験を生かした提案をする。そこで活躍する自分の姿は、もう見えている。

第70話
新たな価値とニーズ

損害保険ジャパン株式会社　岩渕倫子

「岩渕倫子は、ワクワクするカーライフの提供で地域社会に貢献する」

岩渕倫子の中学・高校生活は音楽とともにあった。

全国トップレベルの吹奏楽部に所属し、中学時代は全国大会出場を果たし、高校でも仲間と練習に明け暮れた。

だが、どちらも三年生になるタイミングで転校し、彼女の最終学年で活躍することがかなわず、不完全燃焼で終わっている。

「親の転勤だったんだから、仕方がない」

頭ではわかっていても、集大成となる年に二度も同じ理由で辛酸をなめることになったのはこたえた。

どんなに頑張っても、自分の実力とは別の次元で夢に届かないことがある。そんな現実を受け入れることが逆に、彼女のなかで「なりたい自分」を追い求める気持ちを強くした。

いつしか、「チャレンジしないことは後退」が彼女の信条になった。

仕事との向き合い方にある変化が訪れたのは、彼女が三十歳を過ぎたころだった。念願だった海外旅行の時間をつくり、異国の文化や暮らしに触れた。仕事の合間を縫って訪ねた国は、四十か国を超える。

日本では「こうでなければならない」が当たり前でも、海外ではさまざまな価値観がある。年齢や性別で相手を判断することもない。人を喜ばせることを楽しむ「サプライズ」の文化、同調圧力のない世界……。彼女は心が解放されていくのを感じた。

海外には自身が求めている場所があると感じ、身を置きたいと考えるようにもなったが、しかしそれよりも地元愛を大切にしたい気持ちが強く、地域社会に貢献したいと思った。

損保ジャパンでは、地域への貢献が実現できると考えた。

損害保険の代理店営業を経験した九年間は、代理店の営業マンと一緒に、「ひとつの目標に向かって結果を出す」という達成感を味わうこともできた。

「自分自身で勝負している」

彼女は初めてそう思えた。

現在担当しているのは、代理店やお客さまそして地域企業などのステークホルダーに向けた自動車購入のあっせん業務だ。

同様の部署は全国各地に存在しているが、彼女はお客さまをワクワクさせる組織でありたいと考えている。直にお客さまのニーズを拾いに行き、自動車販売店と連携し、工夫を凝らした情報をお届けする。そして、日々進化するモビリティ分野の活動で地域社会に貢献できる部署であるべく模索しているところだ。

いてほしいＳＯＭＰＯ、いなくてはならないＳＯＭＰＯへの実現に向けて奮闘中である。

岩渕倫子は、「地域社会にどう貢献できるか」という新たな視点で仕事を楽しみはじめたところだ。

第71話
データを社会にどう活かすのか

ＳＯＭＰＯリスクマネジメント株式会社　島崇

「島崇は事故のない社会に向けて、開発に奮闘する」

島崇の夏休みの思い出といえば、従兄のお兄ちゃんの人なつっこい笑顔だ。小学三年生の夏休みも、大好きなお兄ちゃんに会えるはずだった。社会人になったばかりのお兄ちゃんを、あのバイク事故が奪わなければ。

幼心にも覚えた深い悲しみは、大人になるにつれ、「事故で苦しむ人をなくしたい」という強い思いに変わっていった。そしていつしか心の奥底に芽生えたのが、「事故のない社会を作る」という使命感だ。

そんな彼の目に飛び込んできたのが、ＳＯＭＰＯのモビリティへの取組みだった。保険の仕組みやデータ、自動運転や新技術を活用して、新たなモビリティサービスや事故を未然に防ぐ開発に取り組んでいた。まさに、「事故のない社会」の仕組み作りに挑戦できる環境だと思うと、胸が高鳴った。さらに、安全運転診断結果に応じてポイントや表彰状を贈るユニークなサービスも新鮮に映った。なにより、「安全運転は楽しい」というポジティブな発想に、可能性を感じた。

「ＳＯＭＰＯなら、事故のない社会の実現に近づくことができるんじゃないか」。直感でそう思った。

そんな思いで飛び込んだＳＯＭＰＯリスクマネジメントで、今、取り組んでいるのは、通信型ドライブレコーダーを活用した安全運転支援サービスの開発と運用だ。

いつも念頭に置いているのは、使う人に喜ばれるものを作ること。事故防止のための優れた機能を備えた通信型ドライブレコーダーであっても、ストレスなく使えるものにしなければ、多くの人に浸透しないだろう。さまざまな会社のメンバーと関わり、ときに白熱した議論を戦わせながら、今日も開発に打ち込んでいる。

肝心なことは、膨大なデータを集めることでも、データから事故が起きる確率を算出することでもない。ＳＯＭＰＯのリアルデータプラットフォームをこれからモビリティ分野にどう活用していくのか、試行錯誤しているところだ。

ゴールはひとつ、自動車をはじめモビリティの事故をなくすこと。自分たちも納得するサービスを一つひとつ世に送り出し、「これがあってよかったね」と、多くの人に喜んでもらう。この積み重ねが、ゴールへの道筋だと思っている。

第72話
お客様が楽しみ、自分も楽しむ

ＳＯＭＰＯケア株式会社　西本愛弓

「西本愛弓は、答えのないサービスを追求する」

現在、西本愛弓はＳＯＭＰＯケアの介護運営部に所属し、研修全般や現場支援の業務を任されている。カリキュラムの作成や講師の仕事を中心に、ブランドマネジャーとしてのクオリティチェック、ガイドラインの作成など、一日があっという間に終わってしまうほど八面六臂の大活躍で介護付きホームや在宅介護サービスをバックアップしてきた。

「介護とは、答えのないサービスだ」

額に汗しながら、彼女はそう思う。小学生のころから、祖父の在宅介護をする母や看護師の姿を身近で見てきた。まだ介護保険制度が制定される前のことだ。

さらに中学生だったころ、阪神・淡路大震災で神戸市の長田区に住んでいた親戚が被災。家屋が全壊したという一報を耳にしたときの恐怖は、いまでも忘れられない。命について真剣に考えるようになり、医療・介護の道に進もうと決めたのは、このころだ。

専門知識を学ぶなか、もうひとつ大切なことを教わったのが飲食業のアルバイトの現場だった。働いていたアメリカン・スタイルのレストランが、マニュアル通りではなくテーブルごとにコミュニケーションを取りながら、来店客の希望する接客を推奨していたことは、その後の人生に大きく役立った。

「案内する席の場所、飲み物や料理を出す順番、これみんな、私がお客さまに一番喜んでいただけると思う提供の仕方に変えられるんだ。変えていいんだ！」

彼女は心から驚き、そのサービス精神に感動した。

「担当するテーブルのサービスは、全部自分で作っていいんだよ。お客さまに楽しんでもらって、自分自身も楽しみなさい」

店長の言葉をきっかけに、人が人に求めるサービスの深さや、やりがいに惹かれるようになった。介護を「サービス」として意識し、追求していきたいという目標の原点である。

同時に、チームで動くことの大切さも知った。医療介護の現場は二十四時間、三百六十五日続くもの。ホームでのサービスは一人でできるものでは絶対にない。常にチームとしてできるサービスを意識し、率先して雰囲気や環境づくりをすることを彼女は心がけている。ＳＯＭＰＯが取り組んでいるリアルデータの活用も、チームワークの向上に大いに役立ってくれるに違いないと感じている。

「サービス」は追求するほど、答えがないものだ。利用していただいた方が一日の終わりに「今日は楽しかったな」と感じていただけたらいいな――西本愛弓はそう思いながら介護の現場を見守っている。

第73話
ダウン症の兄が教えてくれたもの

損害保険ジャパン株式会社　小林広

「小林広は、それぞれの存在が肯定される社会を夢想する」

実家に帰ると兄がいつも笑顔で迎えてくれる。そんな兄の存在が小林広に多くのことを気づかせてくれた。

鳥取県の豊かな自然のなか、四人兄弟の末っ子として育った彼は、中学から野球部に所属していた。高校は甲子園出場経験のある強豪校へ。連日厳しい練習が続いたが、仲間と苦楽をともにすることでチームワークの大切さを学び、同じ目的に向かって邁進した。

「みんなと一緒に野球ができてよかった」

高校三年最後の大会は、準決勝で負け甲子園の土を踏むことはできなかったが、試合後に部員全員で泣きながら肩を寄せて抱き合った経験は、支え合っていた仲間の存在を強く感じた瞬間であり、いまでも鮮明に覚えている。

もともと自動車業界に興味があった彼は、高校卒業後、整備士になる資格を取得するため自動車整備専門学校に進んだ。自動車について学ぶうちに、いつしか「この専門知識を自動車事故で困っている人のために役立てることができないだろうか」と考えるようになった。

その決意を胸に、損保ジャパンに入社。自動車の事故対応業務など十五年近いキャリアを重ねて、現在は本社で保険金サービス部門における自動車種目の損害調査を支援する企画業務を行なっている。

「だれかのために」という思いが強くなったのは、二番目の兄がダウン症という障がいを持っていたことが大きい。兄が幼いころ、近所の子どもが兄に向って石を投げているのを見かけたことがある。非常にショックだった。容姿の違いなどに対する偏見の目、個性をつぶそうとする目を、どうしたらなくしていけるのだろうか。障がいを持つ家族がいたことで、他の人より考える機会が多くあった。

人には、それぞれ能力や価値観などに差がある。他人の気持ちや立場を考え、お互いの存在を認め合い、それぞれの存在が肯定される社会であってほしい。

ＳＯＭＰＯが取り組んでいくリアルデータの活用も、もとをたどれば「だれかのために」という自分の願いと同じところからスタートしたものだ。

「多様性がもっと認められる社会を、後世に残していきたい」

兄は多くを語らないが、つらい経験や悔しい経験をしてきているはずだ。そんな兄がいつも笑顔でいられる社会を実現したい。今後さまざまな人と接するなかで、自分の存在が何かのきっかけになり、ＳＯＭＰＯの目指すところが社会に浸透していく原動力になれればいい。小林広はＳＯＭＰＯグループの一員として、実現したい未来に向かって歩んでいる。

第74話
「家に帰りたい」の声を胸に

SOMPOケア株式会社　堀江純子

「堀江純子は、〝いのち〟と向き合いながら歩む」

朝から降りはじめた雪は、夕方になってもまだ止みそうにない。慣れない雪道で多少時間はかかったが、訪問予定の家庭はすべてまわった。あとは事務所に戻るだけだ。

「堀江さんが来てくれると思うだけで、元気が出るよ」

最後に訪問した家で、ご利用者であるご主人から、こんな言葉をかけられた。

病院ではなく、自宅に戻って療養を続けたい。そんなご主人の希望をかなえるために、ご家族はSOMPOケアに訪問看護を依頼した。堀江純子はその担当だ。

車を走らせながら、彼女は十六年前、病で亡くなった父のことを思い返していた。

「家に帰りたい」

病院のベッドの上で父は、何度もそう言った。しかし、その願いをかなえてあげることはできなかった。自分が看護師でありながら……。

「当時、在宅のターミナルケア（終末期医療）という考え方はまだ一般的ではなく、わたしたち家族もどうすればいいのかわからなかった。体制が整っていなかったのです」

自分の父親を自宅で看取れなかったことを、彼女はいまでも悔やんでいる。それが訪問看護という仕事に関心を持つきっかけとなった。

「三十年以上、病院に勤務して、急性期から慢性期まで大勢の患者さんを看てきました。そこで得た知識や経験を発揮できるのは、やはり訪問看護だという結論に至ったんです」

四十歳を過ぎて、看護のスキルに磨きをかけるため、それまで勤めていた関西の病院を辞め、北海道の看護大学院に進んだ。卒業後、彼女は在宅サービスのSOMPOケア札幌星置で働くことになる。ご利用者のこれまで生きてきた背景を尊重し、安心、安全に在宅で生活できるようにサポートする。「人間尊重」を基本理念に掲げるSOMPOケアに共感したからだ。

「日々の業務を通じて得たデータは蓄積されています。近い将来、それを活用することで病気の早期発見や予防につながれば、SOMPO独自の看護ケアができるようになると思います」

彼女の使命の根っこにある考えは、「生きようとする力、生き抜こうとする力、それを支える力は無限である」だ。福祉、介護、医療の専門家がチームを組むことで、大きな力となる。そのチーム力でご利用者を支えていく。

「医療的なケアが必要な子どもたちのお世話もしていますが、その生きようとする力って本当にすごいんです。子どもたちから『がんばって』なんて言われると、逆にこっちが元気をもらえるくらい。支える側が支えられているんですよね」

堀江純子は明るく笑う。〝いのち〟と向き合いながら、その歩みは止まらない。

第75話
伝えたい、健康のありがたさ。

ＳＯＭＰＯひまわり生命保険株式会社　佐々木美奈子

「佐々木美奈子は、心と身体の健康を訴えつづける」

「へえ、こんな保険があるなんて……すっごくいい会社ですねー！」

佐々木美奈子は自分の予想をはるかに超える相手の反応に驚いた。そして次の瞬間、言いようもない嬉しさが胸にこみ上げてくるのがわかった。

二〇二二年、自身で担当した新たに取引を開始した代理店でＳＯＭＰＯひまわり生命の「インシュアヘルス」について説明したときのことだった。保険の機能にご加入者の健康をサポートするサービスがついた新しい保険。そのサービスに代理店の担当者が強く共感してくれたのだ。それまでも既存の代理店に同じ説明をしてきたが、正直なところ、これほどの賞賛を浴びたのは、初めてのことだった。

よし！　彼女は心のなかで拳を強く握りしめ、インシュアヘルスを一人でも多くのお客さまに届けたい、とあらためて誓った。この保険のなかでも彼女がとくに気に入っているのが、加入時よりもさらに健康になっていたら保険料が割安になる仕組みがある点だ。ご加入者のなかには、それが長年の喫煙をやめるきっかけになったり、肉中心の食事を野菜中心に切り替えた人もいる。ご加入者が健康になるのをサポートできることが、彼女はなにより嬉しいのだ。

仕事とはいえ、彼女がインシュアヘルスにこれほど強い思い入れをもつのには、理由がある。彼女自身、健康管理をおろそかにしたことで、病気を抱えてしまった過去があるからだ。

忙しさにかまけて自分の健康はほったらかしだった。健康診断で再検査項目があっても、自覚症状がないので数年間、そのまま。その結果、数値はさらに悪化して治療を受けることに。再検査が続き、家族に心配をかけて、彼女は初めて気がついた。健康なときにはわからない、健康のありがたさ。その大切さを思い知ったことで、自分が関わるすべての人に、健康でいつも笑顔でいてほしいと思うようになった。

いま、彼女はさらに自信を持ってインシュアヘルスをお勧めすることができている。今後は、ＳＯＭＰＯの持つ健康に関する数値データを活用することで、さらに説得力を増したアドバイスができるようになるのではないかと期待しているところだ。

健康であることの大切さを伝え、自分が生き生きと仕事する姿を同僚や家族にずっと見せていきたい。それが、佐々木美奈子の目標だ。

第76話
農作業を手伝った日々があればこそ

株式会社プライムアシスタンス　三浦梓

「きっとだれかが仕事ぶりを見てくれている、そう三浦梓は信じている」

汗が滴り落ちる。思わず手で拭ったら、指先にこびりついた土が頬を汚した。

母が苦笑交じりでタオルを差し出してくれる。娘は微笑を返す。だが、父は妻と娘に眼もくれず、黙々と農作業を続けていた。

畦道の向こうを、流行中のアメカジファッションの級友たちが自転車で駆け抜けていく。まだ陽は高い。三浦梓は広々とした農地を恨めしそうに見やる。中学生だった彼女は、休日のたび田畑に出て働いていた。

それは、兼業農家だった父の厳命だった。

「正直、当時は複雑な気持ちでした。でも、今となれば、少女だったころのあの体験こそが私を支えてくれていると断言できます」

あれから二十数年――彼女は現在、SOMPOの「プライムアシスタンス」で、モビリティ領域の事業を担当し、主にロードサービス業務の新規獲得や業務改善・収支改善、品質向上などを統括する立場にある。

「直属の部下は十九名ですが、事業としては全国各地に拠点を持つコールセンターの社員も含めると九百人近い社員と働いていることになります」

彼女が考える使命とは、職務を通じて成長しつつ、社会から必要とされていると実感すること。さらに、この想いを社員が共感できるよう心を砕いている。

「私たちの職場はお客さまとダイレクトに向き合います。だからこそ、最上級のサービスを提供しなければいけません。お客さまからは厳しいお言葉をいただくこともありますが、社員にはそれを真摯に受け止め、業務を改善しつつ、一方で心を折ることなく成長の糧にしてほしい」

彼女もコールセンターで電話をとっていた経験がある。その後は新人教育の最前線にも立った。それぞれの職場でつまづきや戸惑いがあり、人知れず涙をこぼしたことも……。

そんなとき、彼女は少女時代を思い起こした。

「休日返上で農作業を手伝う私に、近所の人たちが声をかけてくれたんです」

思いがけない励ましの言葉だった。

「梓ちゃんが一所懸命に育てるお米は、きっとおいしくなるよ」

ひたすら働けば、ちゃんと見て評価してくれる人がいる。眼の前の仕事はつらくても耐え、山場を乗り越えていけば道が拓ける。

「保険の業務も同じ。誠意をこめて働けば感謝され、自分の存在を認めてもらえます。それに、いい仕事は社会貢献にもつながります」

社員を育てていくのは、農作物を手塩にかけて慈しむのと同じ――三浦梓は、この想いを強くするのだった。

第77話
リスクマネジメント文化を浸透させる

損保ジャパンパートナーズ株式会社　原修

「原修は世界企業のトップをも唸らせた」

日本を代表する世界企業のスタッフたちは、口を揃えて原修にいった。

「あなたがいなくなることが、我が社における最大のリスクだ」

二〇一四年秋から二年六か月、彼は産業機器や鉄道、家電だけでなくＩｏＴ分野へも進出するコングロマリットに出向した。彼はここで、ＳＯＭＰＯが培ってきたリスクマネジメントのノウハウを惜しむことなく開示し、実践できるよう粉骨砕身してきたのだった。

彼は経営トップの前でも決して臆さず直言する。それが、いわば彼の流儀でもあった。

「リスクゼロは理想ですが現実的な考えではありません。むしろリスクを計算に入れ、発生の確率とダメージの規模を想定したアクションプランを立案すべきです」

各事業部門の経営陣は彼のレクチャーにうなずく。実際、家電の故障から国内外の政治情勢、自然災害にいたるまで、メーカーは大小さまざまなリスクに直面する可能性がある。

「リスクマネジメントを上手に取り入れることで、リスクをゼロにするだけでなく、リスクを軽減したり受容したりするという戦略的な経営判断が可能になります。リスクと適切に共生するのが企業のあり方です」

これが今日では、彼の揺るがぬポリシーにまで昇華している。そこに、彼の四半世紀を超すキャリアを彩った営業から内勤、海外留学、出向などさまざまな職種と環境での経験と実績が重なっていく。彼の口ぶりには、「ＳＯＭＰＯグループがやろうとする業務をほとんど網羅してきた」という強烈な自負が滲む。

彼は現在、損保ジャパンパートナーズ本店営業部で責任ある立場についている。八百社を超す企業のリスクと対峙する日々だ。

「損保、ことに管財保険には〝守りの保険〟と〝攻めの保険〟のふたつがあります」

守りの保険とは火災や地震、事故などに対応する旧来のもの。

一方、攻めの保険はネットビジネスの台頭で需要が急増している。サイバーセキュリティ対策はもちろん、日本の製品を海外市場に展開する際の商標侵害問題をサポート――というのもその一例。顧客はＩＴ有名企業から、創業まもないスタートアップ企業まで幅広い。

「攻めの保険は新しい挑戦。だれもやったことがない分野を手掛ける醍醐味は格別です」

そんな彼だけに、「リスクマネジメント文化の浸透」という自身の使命を会社や顧客のみならず、社会から家族にまで広範囲に及ぼそうと尽力している。最後に原修は締め括った。

「私は、人生百年時代の前半を終えました。これまでの『恩返し』として、後半戦はリスクと上手に付き合える社会を実現させ、世のため人のために貢献したい」

第78話
介護、見えない気配りとデータの視覚化

ＳＯＭＰＯワランティ株式会社　松田庸介

「松田庸介は、鋭い洞察力と直感的アイデアで会社を支える」

松田庸介は、子どものころから〝聞き上手〟だった。

物事を整理して考えるのが得意で、何が問題なのか、どこに解決の糸口があるのか。感覚的にそれがわかるのだ。

たとえば、本人が悩みだと思っていないようなことでも、

「こういうことがあってさ」

と友達が話しはじめると、彼は自分が感じたことを合いの手のようにして打ち返す。

「それって、こういうことなんじゃない？」

「それだと、こんなふうにも考えられるよね」

そんな会話のキャッチボールを続けるうちに、友達は少しずつ感情や問題が整理されていき、いつの間にか気持ちがラクになってしまう。

「何でオレのこと、ヨウスケのほうがよくわかってるんだよ。今日もサンキューな！」

友達が笑顔で帰る姿を見るのが、彼は好きだった。

彼のそんな一面は、社会に出てからもさまざまな場面で発揮された。

「あれ、何かあった？」

同僚にそう声をかけ、自分が知っていることを伝えたり、わからないことを一緒に考えて解決したり。

社内の人間関係が感情的ないさかいでこじれてしまったときに、課題と感情をうまく切り分けて解決に導き、部署の崩壊を防いだこともあった。

本来の仕事で評価されたときはもちろん嬉しいが、ちょっとした自分のはたらきかけで、仲間から「ありがとう！」と感謝される喜びは、じんわり胸に沁みることに彼は気づいた。

現在、彼はＳＯＭＰＯワランティの経営企画部門で活躍している。

主な仕事は、予算の策定や資金管理だが、予算関連のデータの加工や整理など、守備範囲は広い。さらに、商事法務など、さまざまな部門のすき間に落ちてしまう課題を拾って解決していくのも彼の日常だ。

今後、取り組もうとしているのが、分散化して煩雑になったデータシステムの環境整備。

「必要なデータをもっと効率的に取り出せるように変えていきたい。あわせて、同じデータをさまざまな立場の人が角度を変えて見られるようにしたら、課題や切り口など、新たな発見が生まれやすくなるのではないか」

そのひとつが、データの視覚化だ。積み上げた数値データをワンタッチでグラフ化できるようにすれば、特徴を視覚的にとらえて掘り下げることができる。

松田庸介の細やかな気配りや直感的なアイデアは、見えない形で今日も会社を支えている。

第79話
お客様の感動が品質向上の源

損害保険ジャパン株式会社　芦原葉子

「芦原葉子は、明るい笑顔と声で職場を鼓舞する」

「あなたでよかった。ありがとう」

電話の向こうで声が温かい色に変わったと感じ、芦原葉子の口元がほころぶ。

カスタマーセンターに電話をかけてくるお客さまは、何かしら困りごとを抱えている。よく耳を傾け、ときには時間をかけて掘り下げていく。そのやりとりを丁寧につむぐからこその「ありがとう」だ。

思い返せば、小さいころから、相手が喜ぶことをするのが好きだった。

母親が出かけているあいだに、皿洗いをして、「ありがとう」と言われたときの晴れがましくもくすぐったい気持ちを思い出す。

そして、このひと言こそが、彼女が子育てと仕事を両立する力の源になっていた。

仕事上の緊張やストレスは、家に帰って子どもの笑顔を見ると吹き飛ぶ。プライベートでのもやもやは、仕事をしていると気にならなくなる。そう自覚したとき、彼女は目の前が開けたような気がしたものだ。

「今までありがとうございました」

一方で、さまざまな事情から、そう言い残して退職していった後輩が幾人もいた。横にいながら、何もできなかった自分を悔いた。無力感が彼女をさいなんだ。

だが、そこで沈まないのが、芦原葉子の芦原葉子たるゆえんだ。

仕事があるからこそ、生活が充実するし、逆もまたしかり。自分が実感したその相乗効果を職場全体に広げよう。彼女は密かに力強く拳を握った。

仕事は楽しくやるに限るというのが彼女のモットー。

子どもを連れてきてよい職場のイベントには、必ず子どもを誘った。子どもに自分の働く姿を見せたかったし、子育てをしながら働く社員同士のコミュニケーションにつながると考えたからだ。社員同士が協力しあえる職場・人間関係を築けたら、という思いがそこにある。

多くのスタッフにとって仕事を継続することができれば、スキルアップがかなう。それはお客さまの満足につながり、カスタマーセンターの品質向上に結びつく。

「これこそ、私の仕事」

今日も芦原葉子は、スタッフの耳にお客さまの感動の声が届く様子を見届ける。

第80話
どん底から救ってくれた人々

損害保険ジャパン株式会社　坪井正和

「坪井正和は、支え合い、助け合える社会を目指す」

あれは、会社に入ってから数年後、二十代半ばのころ。私生活において、大きな壁にぶち当たる出来事があった。この出来事によって坪井正和は暗闇に放り込まれたようだった。

どん底にいた彼に手を差し伸べてくれたのは、学生時代の競技ダンスの仲間だ。自らの現況を伝えると、すぐに、福岡にいた彼のもとに先輩、同期、後輩数十人が東京からやってきた。旅に連れ出され、励まされ、すべてを笑いに変えてくれた。

そこから三カ月が経ってようやく、職場の仲間にも心のうちを打ち明けることができた。一緒に泣いて、飲んで笑って、元気をくれた。少しずつではあるけれども、前を向けるようになっていった。

と同時に、仕事も好転しはじめた。そのときの職場は子会社の保険代理店。営業リストとトークスクリプトを自ら作成し、地道に電話営業を開始。既存のお客さま対応を主業務としていた職場のメンバーは、彼の積極的な営業姿勢に驚いた。

「坪井って、なんかすごいヤツだぞ」

初めての契約は忘れもしない、テレアポで縁をいただいた企業の女性専務。女子校時代の親友が営む代理店の保険に加入していたにもかかわらず、彼のアドバイスに耳を傾けてくれた。ひとつ、またひとつと契約を結ぶようになり、結果的にすべての保険を彼の提案に切り替えた。

「坪井くん、いつもありがとね」

振り返れば、保険代理店での三年半は、これまでの人生で最も感謝の言葉をもらった時間だった。つらい時期を支えてくれた仲間、そしてお客さま。支え合い、助け合える環境があれば、人はどんな困難も乗り越えることができるのだと知った。

あのどん底から約十年。営業のチームリーダーになった彼は、互いに支え合える土壌づくりに奔走している。

チームでは、〝寄って、たかって、教え合う、学び合う〟をスローガンにチームづくりに取り組む日々。さらに、地域社会との共存を目指し、蓄積された災害のリアルデータを使った防災・減災システムの構築にも乗り出した。助け合い、支え合う社会を目指して、どこまでも愚直に進んでいく。

第81話
真摯に取り組めば、どうにかなる

MYSURANCE株式会社　金山雄大

「挫折を乗り越えた金山雄大が、チームに与える安心感」

「おまえ、全然わかってないだろ！」

MYSURANCEで働きはじめ、途中から加わった保険の新商品開発プロジェクト。立場はほとんど新入社員。叱責の声にさらされる日々に、金山雄大は「あのときに似ているな」と思った。

人生最初にして最大の挫折を味わった、高校時代のことだ。

中学時代は怖いものなし。成績上位、野球部でも主力として活躍していた。だが高校入学早々、鼻っぱしらをへし折られる。自信を持っていた野球はまったく通用せず、学力も下位グループに転落する。

頭のなかでは、ネガティブなイメージばかりが渦巻いていた。いまにして思えば、心が折れる一歩手前だったと思う。

そんな彼に、あるとき野球部の同級生から明るい声が飛んだ。

「なぁ、もっとできるんだから、がんばろうぜ！」

ぶあつい雲間から、一筋の光が射しこんできたような気がした。彼はふたたび歩きはじめる。

行かなくなっていた朝練習に顔を出し、野球ノートをつけはじめ、一つひとつ目の前のことに前向きに取り組んでいくと、一年生の秋には試合に出られるようになっていた。

変わったのは野球だけではない。成績も下位グループから脱出。さらには、些細なことでこじれて没交渉となっていた親戚間のいさかいも、自らが橋渡し役となって修復してしまった。

どんなに大きな問題でも、真摯に取り組めばどうにかなる――。

挫折から立ち直った高校時代の教訓は、MYSURANCEで開発プロジェクトに臨む彼の大きな原動力となっている。

専門用語を地道に学び、会議で意見が衝突したときには、丁寧に双方の真意を汲み取り、言うべきことがあれば否定されるのを恐れず口にする。

やがて彼は一目置かれるようになり、困ったときにも手を貸してくれる仲間が次々と現われるようになった。右も左もわからない途中参加の新入生は、いまやプロジェクトに欠かせないキーマンとなっていた。

大きな挫折を乗り越えた金山雄大の言葉、背中、まなざし、その一つひとつがチームに掛けがえのない安心感を与えている。

第82話
日々の暮らしを守る

損害保険ジャパン株式会社　井上慎一

「井上慎一は、保険の先にあるものに気づかされた」

白い産着にくるまれて、その小さな〝いのち〟は静かな寝息をたてていた。

「やっと会えたね。ごめんね、来るのが遅くなって」。そう話しかけたとたん、井上慎一の目に涙があふれてきた。

帯広の自宅に、妻から「産まれそうだ」という連絡がきたのは、月曜日の出社前のことだった。妻は一歳になったばかりの長男を連れて、徳島の実家に戻っていた。すぐにでも駆け付けたかったが、そうはいかなかった。異動になって一年。若かった彼は日々データの整理や提案書の手直しに追われる日々。駆け付けられたのはその週末。金曜日に定時にあがると、すぐに帯広空港へ。妻子が待つ病院に着いたのは翌日のことだった。彼は静かに眠るわが子をそっと抱き上げた。産着を通して〝いのち〟のぬくもりが伝わってきた。

「僕が働くのは、この家族のためなんだ」

これからの未来のために、自分にとっての仕事のあり方を見つめ直したい。そんな想いのなか、保険代理店を兼業する自動車整備工場への異動が決まった。保険代理店の社長や社員たちのすぐそばで働くことで、あらためて見えてきたことがあった。それは、保険の申込書の先に、さまざまな人たちの日々の暮らしがある、ということだった。

「自分が守るべきものは家族だけじゃない。私と関わるすべての人たちの未来、その安心・安全・健康を守っていかなければいけないんだ」

自動車整備工場での毎日は、彼に大きな気づきをもたらした。

現在は、損保ジャパンの営業支社の社員として、毎日、常にだれかのフォローやサポートに追われる日々だ。しかし、彼には自分のやるべきことがはっきりと見えていた。「自分が働く意味とは何か」「自分の存在意義とは何か」と問われたとき、彼の答えはすぐに出た。

「私は困っている人の助けになるよう全力で取り組む」

自分が苦しんできたからこそ、助けを求める声にはきちんと応じたい。さまざまな体験を経て、井上慎一は心からそう思う。

いま、長男は小学校二年生、長女は小学校一年生になっている。

第83話
人を元気づける喜び、楽しさ

損害保険ジャパン株式会社　渡邉美花

「相手が成長できたら、自分も成長できると渡邉美花は信じている」

二〇二二年十月一日、百八十人の若者が、オンライン開催となった内定式に臨んだ。

入社六年目の渡邉美花は、このイベントの企画運営スタッフに名を連ねている。

「参加者は初対面のうえ、画面越しという状況です。彼らの緊張や不安を少しでも和らげようと、ちょっとした工夫をしました」

式に先立ち、内定者のもとへ損保ジャパンの公式マスコットキャラクター〝ジャパンダ〟をあしらった紅茶とクッキーを配送していた。これらの茶菓は、内定者同士が自由に語り合う「お茶会」の場で名脇役ぶりを発揮することになる。

「おかげで参加者の表情がほぐれ、とっても明るい雰囲気になりました」

彼女のアイディアは功を奏したようだ。

「人を元気づける喜びは、大学生のときのアルバイトで塾講師をした体験から得ました」

生徒のなかには親に強制され、意に添わぬまま通う子もいた。彼女はそんな塾生が気になって仕方ない。彼女はすぐ行動を起こした。

「バッグに付けていたマスコットや入っている部活をきっかけに会話を始めて、そのあとは得意分野を見つけて激励しました」

やがて生徒の目が輝きはじめた。彼女も授業にいっそう身が入る――こうして、彼女の使命は「相手の成長を支え、状況や気持ちを前向きに変えること」となった。

「相手が成長できたら、私も成長できます」

そんな彼女も営業部に配属された新人時代は「もがき苦しんだ」という。周囲は手練れの先輩ばかりで仕事に抜かりがない。彼女は馴れぬ業務に当惑し、萎縮してしまった。

「先輩と自分を比べて落ち込み、失敗の原因を他人のせいにするようになっていました」

負のスパイラルに落ち込んだ彼女を救ってくれたのは、とある支社長だった。

「支社長は〝ど〟がつくほどポジティブ。失敗してもいいから、どんどん大きな仕事に挑みなさいと勇気づけてくださいました」

彼はこう付け加えるのを忘れなかった。

「渡邉さんの失敗くらい、私が何とかします」

やっと彼女に明るさが戻った。翌年からは後輩のサポート役を拝命し、塾講師で得た相手の背中を押す喜びを追体験することになった。

「もっと広い領域から社員を前向きに！」

その想いが嵩じて、四年目の秋には「ジョブチャレンジ制度」に応募。あふれる熱意を認められ、人材部人材開発グループに異動する。

「昨年はオンラインで社員が学ぶ〝損保ジャパン大学プロジェクト〟をスタートさせました。このデジタルコンテンツの運用を端緒にして、弊社の持つ豊富なデータの活用へと結びつけていきたいです」

水を得た魚さながら、渡邉美花はさらに大きな海原へ泳ぎ出そうとしている。

第84話
お節介焼きは母譲り

ＳＯＭＰＯケア株式会社　森田恭司

「森田恭司は、より人間味ある介護環境をＤＸでつくる」

――これじゃあ、まるでオートメーション工場だ。

森田恭司が、大学の社会福祉の授業で特養老人ホームの実習に行ったときの素直な感想だ。入浴介助ひとつをとっても、スタッフ、洗い場担当に分かれ、ご入居者は、その間を移動する。呼び方も、「○○さん」と一応「さん」付けで呼んでいたが、人と人とがつながる温かみが感じられなかった。

よくよく話を聞いてみると、介護士もヘルパーも思いやりがないわけではない。あまりに忙しすぎて、マニュアル化しないと、介護の現場が回らないのだ。だれもが将来要介護者になる可能性があるからこそ、この現状を改善しなければいけない。これが、少し大げさに言えば彼の入社動機だった。

思い返せば、彼の母も〝超〟が付くくらい「お節介焼き」で「お喋り好き」だった。その血を受け継いだのだろう。彼も小さいころから、何か問題があると黙っていられない性格だった。小学生のとき、行列に横入りした同級生に思わず「順番を守れよ」と注意したことがあった。見て見ぬふりをすればすむのに、ついつい口に出してしまう。同じような例を探せば、大学時代の飲食関係のバイト先でも、調理場の社員同士の不満を、当時アルバイトであった彼が取り持ってトラブルを未然に防いだことがあった。

――あのときも、トイレで先輩に「○○さんは、こう思っているみたいですよ」って、お節介を焼いていたっけ。俺って、そういう性分なんだろうな。

いま、森田はＳＯＭＰＯケア西日本本部中部業務推進課で、愛知県を中心に二十施設ほどの介護付き有料老人ホームを担当している。それぞれの現場から上がってくるケアプランの帳票をチェックするのが主な仕事内容だが、介護の現場も含めてもっとＤＸ化できないかと思っている。いちいち書類に書くのではなく、携帯やパソコンでデータを打ち込めば、多くの人が同じ情報を共有でき、時間も節約できる。

――その余裕のできた時間で、職員とご入居者さまとでもっと人間的な交流ができたらいいのに。

いずれくるリアルデータプラットフォームの本格運用が、その一助になるにちがいないと、森田恭司は願っている。

第85話
出向も、いい転機に

損保ジャパンパートナーズ株式会社　青木由美子

「青木由美子は、長年、苦手だった『変化』を乗り越えた」

「あなたは選ばれてここにきたのだ、という自信と誇りをもって、働いてください」

二〇二〇年夏。新設された損保ジャパンパートナーズのオフィスで、新しい上司からそう言われたとき、青木由美子は素直に「はい」と言えなかった。

彼女は子どものころから引っ込み思案で、まわりと馴染むのに時間がかかるタイプだった。社会に出てからも、担当する代理店の変更やオフィスの席替えでさえも憂鬱になるほど、環境の変化が苦手だった。だから、二十年以上所属した損保ジャパン営業店からの出向が決まったときは、激しく落ち込み、出向した当初もしばらく前向きになれずにいたのだ。

ところが、状況は少しずつ変わってきた。代理店ではお客さまと直接、接する機会が多く、彼女はそれが楽しかった。営業店にいたころには、なかなか思いをはせることができなかった一人ひとりのお客さまとの距離がぐんと近くなって、手応えを感じた。新しい職場はスタッフも少ないが、そのなかで自分で考えて新しいことにチャレンジするのが面白かった。最も苦手なはずの環境の変化が、こんなにも楽しく感じられるなんて……自分でも驚きだった。

さらに、人事部主催のワークライフデザイン研修や櫻田グループCEOによるオンライン・タウンミーティングに参加して、グループ各社の代表たちの対話を聞いているうちに、彼女はこんな確信を得るようになった。

「人生に無駄なことは何ひとつない。どんな状況でも楽しみを見つけることができるんだ」

いま、彼女は最初に上司からかけられた言葉を思い出すたび、素直に嬉しいと思えるし、背中を押されているような気持ちになる。思えば、ここに来る前までは忙しすぎて、指示されたことを自分なりにこなしていくのに精一杯だった。余裕がないことで、ネガティブ思考に陥っていたのかもしれない。

いまの職場では、仕事をしながらセミナーなど、学びの機会が得られるのも嬉しい。自分が得たものを仲間と共有するために、自作のオフィス新聞を月に二回、発行している。明るく楽しく前向きに。自分と関わるすべての人が笑顔になるように。青木由美子は日々、自分にそう言い聞かせている。

第86話
ありがとうの輪が広がる

ＳＯＭＰＯひまわり生命保険株式会社　三森宏美

「三森宏美は、感謝を共有する」

「ありがと」

高校の男子バレーボール部。マネージャーの三森宏美がお茶の入ったヤカンを持っていくと、選手たちが口々に感謝の言葉を口にした。

もともと男子校だったために、女子の部活があまりなかった。中学校までバドミントンをしていた彼女は、マネージャーとしてバレーボール部に入った。

荷物を運ぶ。スコアをつける。ユニフォームの洗濯。何度もかけられる、ありがとうの言葉。助け、助けられ、パス回しのように感謝を共有する。

小学校のころはいつも「言う側」だった。学期途中の二回の転校。教科書が違う、進度が違う。やばい、勉強についていけない。そう思ったとき、まわりの友だちが助けてくれた。

「ありがとう」

彼女にとって、「ありがとう」は生きるための言葉だった。

大学を卒業後、温かい雰囲気を感じる職場として、ＳＯＭＰＯひまわり生命を選んだ。最初の配属は保険金をお支払いする部署。新人時代のＯＪＴで指導してくれた四つ歳上の先輩は、爪が長く、完璧な化粧で、見かけはギャルだが仕事のできる人だった。新人だった彼女は、完成度の低い、ミスだらけの書類を先輩に提出した。

「ありがとう」

書類を受け取った先輩が顔を上げて彼女に言った。あれっと思った。感謝するのは私のほうなのに。同じ勢いで、間違いもバシッと指摘された。サバサバした人で、彼女の失敗をいつもかばってくれた。

同じ部署で十年仕事をしたあと、新しい職場に異動した。今度は、代理店向けのコールセンター業務で、オペレーターの採用や教育も行う。部署で情報を共有するために、録音した音声を聞く機会が多かった。

「ありがとうございます」

代理店からの言葉だ。感謝の声を聞き、みんなで喜んだ。

入社して十五年、会社は変わった。生命保険は、万が一の保障に加えて、毎日の「健康」をサポートすることに重きを置いている。煙草をやめるチャレンジ。血圧を下げると保険料が割安になる。生活習慣の改善。適切なデータでお客さまの健康を応援する。

だれかを助けられる仕事をしたい。互いに助け合い、感謝を共有したい。三森宏美は、ありがとうの輪が広がればよいと思っている。

第87話
チームケアを通じ夢の実現を

ＳＯＭＰＯケア株式会社　福士陽子

「福士陽子は、介護が『なりたい職業』に変わることを願う」

デイサービスとは、ご利用者が自宅で生活を続けていけるように、食事や入浴などの日常生活上の支援や、生活機能向上のための機能訓練を日帰りで提供する施設のことだ。

「みなさんおはようございます。今日は朝から雲ひとつない青空が広がって、とても気持ちいいですね」

大学で福祉を学んだ福士陽子は、介護職は人と人とのふれあいを育み、相手の人生に深く関わりを持てる仕事だとやりがいを感じ、ＳＯＭＰＯケアへの入社を決意した。

十六年勤務し、現在はデイサービスで介護職員兼生活相談員として通常の介護業務のほか、サービス開始時の契約やご家族・ケアマネジャーとの報告・相談業務、事業所内ではスタッフのサポートなど、多忙な毎日を過ごしている。

介護の仕事は「大変そう」「つらそう」と言われることも多い。それでもこの仕事を選んだことに後悔はない。なぜなら――。

「私もお手伝いします！」

目の前には満面の笑みを浮かべた若い女性がいる。半年前、同じ事業所に入社してケアの基礎を一から学び、ご利用者とのふれあいのなかで「介護の仕事は楽しい」と目を輝かせている新しいスタッフだ。

これまで多くの仲間が辞めていく姿を見てきた。自分には向いていなかった。肉体的につらい。そんな言葉に、もどかしさや悔しさを感じていた。だからこそ「介護の仕事が楽しい」というスタッフの言葉を聞いたときは嬉しかった。介護福祉士の資格を目指して一生懸命な姿に自身も刺激を受け、ご利用者の笑顔にもつながると思った。

「一緒に働く仲間に、介護の楽しさを伝えることが私の仕事だ」

夢の実現のために、まず取り組んだのがチームケアを浸透させていくことだった。ひとりでは難しい課題も、チームで支えることで乗り越えられる。仲間が壁にぶつかって悩んでいるとき、声をかけやすい関係を作っておけるよう、積極的にコミュニケーションをとる時間を作った。ケアの品質向上にはスタッフ間の情報共有が不可欠だ。リアルデータを活用できれば、施設にいるあいだにご利用者が取った水分量や食事量、時間帯がデータ化され、ケアの見直しやサービスの向上につなげていくことができる。

ご利用者がその人らしく過ごせるよう支援する現場は、やりがいのある仕事だ。近い将来、介護職が「なりたい職業」のランキングに入る日が来ることを目指して、福士陽子は日々取り組んでいる。

第88話
多様性を求め、故郷から世界へ

損害保険ジャパン株式会社　松原輝和

「松原輝和は、変化を求めて転がりつづける」

小学校のころ、松原輝和は盲腸で入院した。同級生たちは全員お見舞いに来てくれた。一方、県外から転校してきた子が孤立している様子を見て、とても嫌だと思っていた。「同郷の仲間意識が強すぎる弊害かもしれない」とも考えていた。

大学受験のとき初めて、生まれ育った岐阜を出た。そして受験会場に行くために道を尋ねた。

「あそこの筋を入ってな、どんつきを右に曲がったらええねん」

大阪では親切に教えてくれた。

「忙しいんで」

東京では断られて交番に行った。

東京と大阪、こんなにも違う。故郷を離れたことのなかった松原は、大きな衝撃を受けた。

それでも大学は東京を選んだ。就職も地元ではなく、全国区のSOMPOを選んだ。世界がどんどん広がっていく。さらに広い世界を見たいと願った。

損害保険の業界に入り、企業営業部門では製造業を担当した。海外でのビジネスに携わることも多く、自ら駐在職員を希望してイギリスに行くチャンスをつかみ、四年間駐在した。ロンドンオフィスの多様性は、日本の比ではなかった。顔だち、肌の色、目の色、そうした外見だけでなく、キャリアもさまざまだった。ローカルスタッフ、駐在職員、欧州系の企業から転職してきた人、日系企業からキャリアをスタートする人。価値観もばらばらだった。

日本に戻ると、製造業だけでなく、小売業の人たちとも仕事をするようになった。ふたつの異なる文化。作る人と、売る人の違いは、保険に対する考え方にもおよぶ。製造業にとっての保険は「製造原価」であり、小売業にとってのそれは「販管費」だ。

いま、小売業の世界は、POSによる膨大な販売データを持っている。それをどのように活かし、何ができるか。いまも試行錯誤の日々が続く。

欲しい人・欲しいときに欲しい商品を届ける。保険でも、それをやりたい。

旅行に行く人には旅行保険、ペットを飼う人にはペット保険、自転車に乗る人には自転車保険。

個人向けの保険には、もっと可能性があるはずだ。

ロンドン時代の名残りで、妻はいまでも紅茶を愛飲し、松原もいまだにプレミアリーグのお気に入りチームの全試合を視聴する。けれども後ろは振り返らない。イギリスから帰って見えてきた日本の課題に、多様な価値観を積極的に取り入れ、松原輝和は新たなビジネスを切り拓く挑戦を続けていく。

第89話
〝化学変化〟を生む声かけ

損害保険ジャパン株式会社　青本哲也

「寄せ集めチームでの心躍る体験、それが青本哲也を突き動かす」

「大会に出るとか言っているけど、これじゃボロ負けするんじゃないの？」

社会人になって間もないころ、友人に誘われてなんとなく加わったサッカーチーム。青本哲也には不安ばかりが先立っていた。

自分が知っているのは、誘ってくれた友人だけ。チームは知り合いの、そのまた知り合いが呼ばれた寄せ集め所帯だった。高卒で働いている人もいれば、かなり年配の人もいて、互いに会話の糸口すらつかめない。もちろんサッカーの経験値もわからない。

ところがみんなでボールを蹴るうちに、目に見えてチームらしくなっていく。

個人プレーに走っていた若者が連携プレーのおもしろさに目覚め、初心者のミスを上手い人が率先して補う。いたるところで〝化学変化〟が起きはじめたのだ。個の力がまとまってチームが構築されていく。

このチームは成長している――。

そんな手応えを、みんなが感じはじめたのだろう。気がつけば互いを盛り上げるポジティブな声が出るようになり、勝てないと思っていた大会で三位に輝いてしまった。

「寄せ集めかもしれないけど、みんなが成長の実感を共有すると、チームはみるみるうちに強くなるんだな」

サッカーから学んだ教訓は、営業企画部で組織横断型の仕事に取り組む彼の、大きな糧になっている。

サッカーチームがそうであるように、仕事にもそれぞれのポジションや役割がある。そして互いが互いの成長を認め合うようになると、組織の力は大きくなる。自身の体験からそう確信する彼は、営業企画部での新たな仕事に取り組むなかで、とりわけひとりで苦しむ若手に温かい声をかける。

「全然できてないって言うけどさ、この部署に来たころを思えば、できることがものすごく増えたよね」

「あ、言われてみればそうですね！」

悩んでいた若手の表情がパッと明るくなる。

ポジティブな声かけから、またひとり前向きになり、組織に〝化学変化〟が生まれる。

寄せ集めのチームでの心躍るような体験、それがいまも青本哲也を突き動かす。

第90話
モダンバレエの体験を生かして

ＳＯＭＰＯビジネスサービス株式会社　福岡信代

「福岡信代は変化に備え、柔軟に対応できる土台を整える」

「つらいのによく頑張ったね、それであの踊りになったんだね、話してくれてありがとう」

十七歳のとき、モダンバレエ教室の発表会直前に大好きな祖父を福岡信代は亡くした。迷惑をかけたくない気持ちから、仲間にも先生にも伝えることができなかった。でも、先生はいつもと様子の違う彼女に気づいていた。

約二十年間のモダンバレエ生活を振り返ると、先生はいつも温かい眼差しで見守ってくれた。感情を表に出すことが苦手だった彼女をよく理解し、元気がないとき、つまずいたとき、必ず「だいじょうぶ？」と声をかけてくれた。

幼児から大人まで大所帯の教室で、年代も熱意もさまざま。大人になるほど意見がぶつかることも増えたが、そんなときも先生は生徒たちを外から見守り、自分たちで話し合い、解決させるよう指導した。彼女はそこで、自分の頭で考え、自分の言葉で伝える力を得た。教室は、いつしか第二の家族といえる存在になった。

ＳＯＭＰＯに入社すると、その体験が強みになった。

現在マネジメントする事務処理チームは、ほぼ全員が女性の約五十人。二十代前半から母親世代まで幅広い。新卒からパートタイマーまで雇用形態もさまざまで、会社や仕事に対する理解や情熱にも温度差がある。でも、彼女はその環境に怖気づくことはない。一人ひとりを見て、自分の言葉で伝えれば理解しあえる、信頼関係を築けることを知っているから。

自主的に清掃をしてくれるスタッフを見れば、「いつもありがとうございます」と声をかける。新しい業務が始まるときは、業務の目的、背景、役割と、さまざまな視点から自分の言葉で説明する。難しい専門用語は避け、かみ砕いてわかりやすく伝えることを心がけている。

「福岡さんの説明が一番理解できるわ。わかったわ、頑張ります」

そんなメンバーの声を聞くと、疲れやプレッシャーも吹っ飛んでしまう。

事務処理の世界にもデジタル化の波が押し寄せ、業務内容が変わろうとしている大事な時期。今後リアルデータの活用によって業務はさらに変わっていくことが予想される。そうした変化に耐えうる組織、対応できる土台を整えたい――。その思いで、日々メンバーを見守り、声をかけ、地道に信頼関係を築いていく。

第91話
分かち合い、一緒に成し遂げる

損害保険ジャパン株式会社　鈴木理恵

「鈴木理恵は、持ち前の姉御肌で仕事も人生も切り拓いていく」

「思い入れのある食器がたくさん割れてしまって……これ、保険で保障されますか……？」

二〇二一年三月。東日本大震災発生後に立ち上がった災害対策本部で、鈴木理恵は連日の電話対応に追われていた。千葉市では津波の被害こそなかったものの、大きな揺れによる家財の被害が多く、不安と混乱のなかで電話してくるお客さまが、あとを絶たない状況だった。

「はい、ご安心ください。大丈夫ですよ」

彼女は常に明るい声で、丁寧に説明をするように心がけた。電話で話をするだけでも、相手の不安を和らげることができるかもしれない……そんな思いで応対していた。切迫した状況下で言葉が足りず、お叱りの言葉を受けることもあれば、話を聞いてくれてありがとう、と感謝の気持ちを伝えてくれる人もいた。この数か月でのことは、彼女が本当の意味で保険の大切さと、自身の仕事が社会に与える影響の大きさをあらためて実感した、貴重な経験だった。

あれから十一年。人生において大事にしていることは、と聞かれると、彼女はこう答える。

「仲間と分かち合い、協力しあって何かを成し遂げること。相手の立場に立って物事を考え、人の役に立つこと」

子どものころから姉御肌で、人に頼られることが多かった。いじめられたり、一人でぽつんとしている子がいると、自ら声をかけて仲間に引き入れた。みんな一緒のほうが絶対に楽しい、と思うタイプだった。中学校ではソフトボール部に所属し、ピッチャーで四番として活躍。チームを牽引する役割を担った。仲間と一緒に切磋琢磨し、頼りにされて、役に立つ。そのスタンスは、十代のころから少しずつ築き上げられていたものだったのかもしれない。

入社したときから、定年まで働こうと決めている。だから、元気でこのまま頑張りたい。私はこの仕事しかできないし、長らくお世話になってきているので、この先、少しでも会社に恩返しができたら……そんな思いを胸に、鈴木理恵は今日もいつもの道を職場へと向かう。

第92話
人を育てるプロとして

セゾン自動車火災保険株式会社　澁谷千尋

「澁谷千尋は、自分らしく働ける環境を創造する」

「澁谷さん、うちの人事で頑張ってみない？」

子どもにとことん向き合った専業主婦を約十年、その後、念願の人事のキャリアを積み重ねて約十年。人を育てることもすっかり板についた昨年、ＳＯＭＰＯのキャリア採用に応募した。二十年以上一貫して人材育成に関わってきた澁谷千尋は、働き方改革の推進など社員を思う会社の風土、そして自身のキャリアが活かせる環境に魅力を感じ、転職を決意した。

彼女が人の育ち方に興味を持ったことには理由がある。子どものころ、心が不安定だったり、人とのコミュニケーションが苦手な人が身近に何人かいた。子どもながらに、人の生い立ちや生き方、心を形成する環境や過程の重要性に興味を持ったのだ。

実際に人を育てる立場になってみると、一筋縄ではいかないことはイヤというほど体験した。たとえば子育てにおいて、「勉強しなさい」と言ったところで喜んでやる子どもなどほぼいない。上から言葉で指示するだけで動くほど、人間は単純でないことを思い知った。

一方で、本人自身に勉強の意義や目的を考えさせたところ、親に言われずとも勉強したり、進路を見つけ出したりと、驚くほど変わる実感も得た。

仕事においてもそれは同じだった。前職で、隣のチームマネージャーを急遽、兼任することになったときのこと。業務内容は専門外だったが、一人ひとりと丁寧に話をし、チームでミーティングを重ねるうちに、徐々にメンバーが思うことを発言してくれるようになった。するとチームの雰囲気はどんどん良くなった。言いたいこと、やりたいことを自由に言える環境づくりの大切さが身に染みた経験だった。

ＳＯＭＰＯの人事に加わって約二年。さまざまな企業で得た広い知識と視野を活かして、会社に合った新しい人事制度を提案している。データの重要性が人事分野でも言われるようになった現在、人材マネジメントでのリアルデータ活用をさらに推進していきたいと考えている。

すべての社員が自分らしい働き方、納得できる働き方でモチベーションを高く持ちつづけ、パフォーマンスを最大限に発揮できる土壌を整えたい。思い描く高い理想像が、澁谷千尋のモチベーションになっている。

第93話
社会を支えるインフラとして

損害保険ジャパン株式会社　栄昭治

「栄昭治は、次世代に継承し、発展する社会を下支えする」

栄昭治は鹿児島県の奄美大島で生まれ、鹿児島市で育った。スポーツ万能で、いつもクラスの中心人物。中学、高校時代はサッカー部でありながら、他の運動部の助っ人によく呼ばれ、陸上、柔道、相撲の大会にまで出た。

そんな彼が、スポーツではなく損害保険の道を選んだのは、奄美大島で代理店を営む叔父の影響だった。叔父は十人ほどの部下を持ち、島を忙しく駆け回っていた。

「昭治くん、損害保険は、いい仕事だぞ。世のため、人のための仕事だ。日本ではまだまだけど、世界的に見たら本当に必要な社会インフラだ」

小学生のころから繰り返し言われた。叔父は自分の仕事にプライドを持っていた。自身が人々の輪の中心にいると思っていた少年は、だれかを下支えするほうの職業を選んだ。

入社して保険金サービス部門に配属になった。三年目に、人身損害の死亡・後遺障害事案を担当するようになった。夫を亡くした老齢の女性。はじめて人の生死と向き合った。

「あなた、息子に似ているわ」

そう言って可愛がってもらった。しかし示談には、かたくなに応じようとしない。それでも一年間通いつづけた。異動が決まって報告に行ったとき、はじめて示談書を持ってくるように言われた。

「あなたでよかった。あなたのあいだにやりたいの」

誠実に向き合うことの大切さを知った。

ある地域を担当しているときなどは、詐欺まがいの行為に毎日のように向き合い、逃げ出したいと思った時期もあった。入社十二年目に、精鋭の集まる保険金サービス企画部に異動になったが、過去の経験が通用せず焦りを抱いたこともあった。

いま彼は、次の世代の子供たちを手助けできる、事故や災害の負担を減らせる商品やサービスを考えようとしている。保険会社は自動車事故のデータを、自動車会社は車の運転履歴を持っている。それぞれの業種のデータを組み合わせれば、重大事故を未然に防げるのではないか。

本当に必要な社会インフラとは何なのか。栄昭治は、だれかの下支えとなる仕事に取り組んでいる。

第94話
見えないところで支える力

ＳＯＭＰＯケア株式会社　長谷川公子

「長谷川公子のサポートが、みんなを笑顔にする」

「これから通信簿を配ります」

先生の言葉に教室はたちまち蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。

中学二年の終業式。通信簿を受け取った生徒は仲良しグループに分かれ、笑顔で成績を見せ合っている。教室に広がるいくつもの輪。しかし、輪に入れない子は、ぽつんとひとりぼっちだ。表情は硬い。

――あ、またひとりだね……。

そう思いながら長谷川公子は椅子から立ち上がり、孤立しているクラスメイトに声をかける。こわばっていた相手の顔がほころんだ。

彼女も、かつてはグループに入れない子どもだった。

父の仕事の関係で生まれてすぐに埼玉から沖縄に引っ越し。埼玉に戻ってからも、転校を繰り返した。新しい人間関係に馴染めず、ときには仲間外れになってしまうこともあった。疎外感や寂しさを知っているからこそ、できることがある。いつしかクラスに溶け込めない同級生に進んで声をかける自分がいた。

「よくがんばりましたね」

手渡された通信簿には成績表とは別に、わら半紙の〝もうひとつの通信簿〟が付け加えられていた。そこにはこう書かれていた。

『学級を支えるために、ほんとうによくがんばってくれました。ありがとう』

自分の周囲の人に関わり、みんなを笑顔にする。目立つ存在ではないかもしれない、でもこれこそが自分の役割だと〝もうひとつの通信簿〟が教えてくれた。人の役に立つ仕事がしたい。高校卒業後は作業療法士の道を選んだ。

あれからおよそ三十年、彼女は現在、ＳＯＭＰＯケアで財務経理を担当している。作業療法士時代とは違い、高齢者の方に寄り添い直接お手伝いをすることはなくなった。しかし、ホームを健全に運営するためには財務経理部という潤滑油は、決して欠くことができない。

いつもと同じように同僚に声をかけ、経理業務を進めながら長谷川公子は思う。自分の周囲の人に関わり、みんなを笑顔にするためには、こういうサポートの形もあるのだと。そして、それが私の使命だと。

第95話
企業価値を高める営業力

損害保険ジャパン株式会社　柳井隆祐

「柳井隆祐は、チャレンジでSOMPOの土台をつくる」

「なんで保険で修理できないんだ！」

自動車事故受付センターでは、そんな怒号が聞こえるときがあった。大学生のアルバイトとして電話対応をしていた柳井隆祐は、保険内容を把握されていないお客さまが多いことに驚いた。

両親とも保険会社に勤めていたので、保険は社会の重要なインフラだと信じていた。大切な保険を、お客さまに届くようにしたい。それが、この会社の門を叩いたきっかけだった。

「君は写真だと感じが悪いけど、話すといい奴だな」

入社試験の面接は、和やかな雰囲気だった。面接官と、すっかり打ち解けてしまった。あろうことか内定連絡の電話まで「残念ながら……」と冗談を飛ばす。こんな人がいる会社で働いてみたい。そこから、彼の営業担当としてのキャリアが始まった。

高校時代のテコンドーの経験から、物怖じしないことは自分の強みだった。その積極性でさまざまな現場で営業力をつけていくなか、法人営業部で自動車メーカーの担当になった。その部署は、皆が新しいことにチャレンジしていくという活気であふれていた。

「俺もやってみるか！」試合でどんな相手にも果敢に向かっていったときの気持ちを思い出す。最初のチャレンジは、担当メーカーが抱えていたリース車両の問題を解決する保険商品の開発だった。これまでにない商品で数々の困難が伴ったが、まわりのサポートもあり成し遂げることができた。顧客ニーズに応えられたという喜びとともに、手応えを感じたのは、社内の営業担当の多くから「この商品で契約が増えた」という声が上がってきたことだった。そこで意識が変わった。

自分の成績よりも、会社として良い結果が得られることが喜びなんだ。

彼は現在、課長として自動車ディーラーを担当する営業課にいる。自動車保険は損害保険事業の根幹となる商品だ。より多くのお客さまに損保ジャパンの自動車保険を選んでもらえることが、今後グループとしてさまざまな事業を展開し価値を高めていくための土台になると考えている。

そのために、ともに働くメンバーがチャレンジしつづける環境をつくり、サポートする。それが、柳井隆祐の新たなチャレンジだ。

第96話
躍進のための基盤づくりへ、一歩

ＳＯＭＰＯシステムズ株式会社　宇野明光

「宇野明光は、しなやかな問題解決力で次代を切り拓く」

「大丈夫、解決できるよ」

宇野明光がこの楽観性を手に入れたきっかけは、二〇〇六年、保険会社各社で発覚し大きな社会問題となっていた、不払い保険金に対処するための保険金の支払い集中センターへの派遣だった。各部署から職種の異なる百名あまりが集められ、問題解決に当たった。情報システム部門にいた彼もその一人だった。

急ごしらえの大規模なチームは、当初、混乱を極めた。何を、どうすればよいのか。十人ほどのスタッフのリーダーとなった彼自身も混乱した。それでも仕事は待ったなしだ。明確な答えはないまま、手探りで進む。お客さまの情報を確認し、連絡を取り、保険金を確定させていった。

あるとき、ふと、自分が鎧を脱いでいることに気がついた。何に悩み、どんな壁にぶつかっているのか、まわりの仲間に伝え、意見を聞けるようになっていた。

それは、彼が〝こうあるべき〟と捉えていたリーダー像とは違った。けれども、これが問題解決につながっているのだと、腑に落ちた。周囲の人と連携すること、それがものごとを解決に導く。そして、あきらめずに邁進することも、また。

彼はいま、ＳＯＭＰＯが資本提携するアメリカのデータ解析会社、Ｐａｌａｎｔｉｒ（パランティア）社のシステムズ担当の一員となり、両社の橋渡し役として、リアルデータプラットフォームの構築に関わっている。膨大なデータを用いて何ができるのか。

例えば、と彼は考える。例えば法人のお客さまなら、ビルを建てるとき、建物の概要や周囲の環境だけでなく、気象条件や土地そのものの状況など、あらゆるデータを踏まえて、リスクを割り出せれば、よりよい保険が設定できる。

例えば個人のお客さまなら、加入している住宅に対する損害保険や自動車保険の状況を踏まえ、年齢や家族構成を加味し、健康面や仕事の状況などはビッグデータも活用すれば、より適切な保険を、適切な時期に提案できる。彼自身、中学生のとき柔道で怪我を負い、損害保険の世話になったことがある。保険の重要性は経験済みだ。

例えば……、例えば……。その先は、まだまだ大きな可能性に満ちている。

「わくわくするね」

その基盤づくりの一端を担う宇野明光の瞳は、未来を見据えて輝いている。

第97話
進化を支える力

ＳＯＭＰＯケア株式会社　伊藤将義

「伊藤将義は、システムの知識と経験で課題解決に臨む」

「あーあ、将義、またやっちゃったんだ」

少年のころ、時計や家電製品をバラバラにしては、親に呆れられた。イタズラ心ではない。ただただ、中がどうなっているのか、どんな仕掛けで動いているのかを知りかったのだ。好奇心のおもむくままに分解したあげく、もとに戻せなくなり、泣く泣く捨てる――。そんな記憶は数知れない。

そんな性格だからか、開発エンジニアという職は、性に合っていた。しかし、ＩＴベンダーで働くなかで芽生えたのが、「システムだけを考えるのではなく、一歩踏み込んで、もっとその先、根っこにある課題を見つけて解決に導きたい」という思いだった。

その思いをかなえるには、ＩＴを作る側のベンダーにいては限界がある。いっそのこと、ＩＴを必要とし、使う側に身を投じてみよう。選んだのは、非ＩＴ企業。しかも当時、最もＩＴ化が遅れていると世間で言われていた介護業界だった。

「中身を知りたくて時計を分解していたころと、あんまり変わってないな」

我ながらおかしく思ったが、そこに飛び込んでみる価値は十分あると確信した。

もちろん、転職してすぐ思い描いていたような仕事ができたかといえば、そう簡単ではない。だが、嬉しい驚きもあった。それは、ＳＯＭＰＯが組織全体で、真剣にＤＸに取り組んでいることだ。

たとえば、ＳＯＭＰＯケアでは、ご入居者のバイタルデータや日常の活動データを集め、それを業務の大幅な改善につなげようとしている。正直、これは嬉しい誤算だった。自分がこの気流に乗れたのは、とても幸せなことなのだろう。いや、偶然乗れたのではなく、「この流れに呼ばれたんだ」と言えるように、自らも結果を出さなければと思っている。

目下、めざすは、〝課題解決型のシステム屋〟。事業部それぞれの課題を、いかにセキュリティーを保ちつつ、エンジニアとして柔軟に解決できるかに挑戦している。いずれは、最前線で業務を担う仲間にとって、「ＩＴ分野の頼れる相棒」になるのが目標だ。

課題に向き合う情熱は、リアルデータ活用という気流のなかで、静かに、熱く、燃えている。

第98話
常にお客さまの味方であるために

損害保険ジャパン株式会社　市川大介

「市川大介は保険金サービスの理想を追いつづける」

市川大介は新卒で入社以来、二十八年も保険金サービス部門ひと筋でやってきた。

この職場では交通事故に火災、台風や地震の自然災害などに際し迅速かつ適切、冷静な対応が求められる。これまで、卓越した業績を残してきたからこそ、彼は保険金のエキスパートとして活躍しつづけているのだ。

現在は豊富なキャリアを活かすべく、業務のデジタル化を推進するチームを率いている。

柔和な表情と落ち着いた声で彼は語った。

「これだけスマホやSNSが普及しているのに、保険業のデジタル対応はまだまだ追いついていません。事故現場の写真でAIが保険金を査定したり、保険金にまつわる書類のペーパーレス化など課題はたくさんあります」

蓄積されたリアルデータの活用も急務になる。

「新人時代に阪神淡路大震災があり、現場の応援に駆け付けました。あの記憶が鮮烈なだけに、SOMPOのデータを自然災害の減災・防災に役立てたいです」

リーダーとして彼が心掛けるのはチーム内の「切磋琢磨」と「思いやり」だという。

「部下たちがそれぞれ高い目標に挑み、悩みや苦労を抱えながらも成功体験を得られるようサポートしています。しかも、それをチームとして共有できるようにしたい――これが私の使命でもあります」

だが、ここに至るまでには彼にも苦悶の経験があった。阪神淡路大震災と同じく、二十代前半の事案だ。

「トラックと原付バイクの事故があり、加害者と被害者の狭間で困惑してしまいました」

保険契約者のトラック運転手は「バイクの運転が乱暴だった」と非を認めない。一方、重傷を負わされた側がそれを承服するはずもない。双方が一歩も引かない状況だった。

彼は責任を感じていない運転手に義憤を感じ、被害者に同情を禁じえない。同時に、保険金担当者としての自らの職務を自問した。いち早く示談金や治療費を支払わねば……だが、どうにも納得できない。堂々巡りの末、彼がたどり着いた結論はこうだった。

「あの案件で体得したのは、一方の言い分で説得したり、片方を否定しないこと。何度も事故現場に足を運んで原因を究明し、矛盾点を見つけ出し、きちんと整理することです」

このような事例には、現在の部下たちも遭遇する。そんなとき、彼は新人時代の貴重な体験談を語ってみせる。

「大事なのは信頼関係。SOMPOはお客さまの味方だとご理解いただくことだよ」

デジタル化が進んでも、忘れてはいけないマインド――市川大介はそれを熟知している。

第99話
介護・福祉業界の不条理を解決する

SOMPOケア株式会社　馬来秀行

「馬来秀行の稀有な〝原体験〟が業界を変える」

馬来秀行は物静か、柔和な印象を漂わせる青年だ。しかし、外見とは裏腹に彼の胸中には熱い想いが燃えさかっている。

「だれもが必要とする介護を、だれもが働きたいと思える仕事にしたい」

彼が新卒で介護・福祉事業に身を投じたのは二〇〇九年。当時、この業種は決して人気のある業種ではなかった。

「マスコミは3Kつまり〝きつい、汚い、危険〟だけでなく、低賃金だとマイナスイメージを煽っていました。そういう状況だけに、世間の介護・福祉事業や従事者に対する理解はもちろん、敬意も乏しかったと思います」

だが、超高齢社会の到来と介護の充実は切り離せない。ならば、業界を変えていこう――この目標は彼の使命となった。

「介護・福祉を担う人がプロフェッショナルとして成長を続け、プライドを持てるようにしたい。同時に、介護関係者が物心ともに豊かな人生を実現できるよう、業界の不条理を私なりに解決していきたかったのです」

彼の情熱の源は、小学生時代に発症した「場面緘黙症」にある。家族とは話せるのに、学校に着いたとたん、「声が喉でピタッと止まって出ない」。場面緘黙症の原因や発生メカニズムは現在も研究段階だという。

幼かった彼が苦闘と苦慮を強いられたことは想像に難くない。この原体験は「不条理」そのものだった。彼が介護・福祉業界を語るとき「不条理の是正」を口にするのも、特定の人が、不幸な目にあうという納得のいかない状況が身に染みているからこそ。

「現在は介護スタッフをはじめとした全従業員のための研修センターである『SOMPOケア ユニバーシティ』の運営に携わり、社内で介護福祉士という国家資格の取得支援などを推進してきました」

彼の創り上げた企画に「SOMPOケア グランプリファイナル」がある。地域の児童を招いての「高齢者疑似体験会」、認知症当事者や家族、地域住人が交流する「認知症カフェ」など介護現場の企画事例の発表の場を作り、関係者を表彰する。介護のさまざまな取組みが成功し評価されることで、現場の士気は自ずと高揚していく。彼は語った。

「今後は介護と薬に関するリアルデータを有効活用していきたいですね」

例えば、深夜に失禁してしまうご入居者が複数、連続してあった場合。ご入居者の疾患や服薬、排尿回数や時間帯などのデータを集積、解析することで服薬を見直し、介護スタッフの業務効率改善やご入居者へのサービス品質改善が図れる。

「まず介護スタッフが満たされなければ、ご入居者さまに満足いただけるケアは生まれないと考えます」

馬来秀行の温和な顔が引き締まった。

第100話 心の矢で的を射る心構えで

損害保険ジャパン株式会社　井上真梨子

「井上真梨子は、お客さまの心の不安時間ゼロを目指す」

弓を構え、十五間半（約二十八m）先の的を見据える。井上真梨子は静かに呼吸を重ね、気合が体の丹田に満ちるのを待つ。

「矢を的に当てようと意識するほど、心はもちろん形も乱れてしまいます。〝正射必中〟というのですが、静穏な心境で、美しく正しい形を整えなければ成果は得られません」

彼女は青春期を弓道の鍛錬に捧げ、インターハイ出場も果たした。

「弓道のおかげで、心の修行をさせてもらったと感謝しています」

彼女が目指す「理想の心」とは「調和のとれた自由な状態」に保たれていること。しかし、心を整えることの難しさは、他ならない彼女自身がいちばん痛感している。

「まだまだ私は未熟。一生をかけて磨いていくしかありません。だから、自戒を込め『心の力で困っている人を援け、世の中を明るくする』を自らの使命に掲げています」

謙遜する彼女だが、保険業務においても、「心」をキーワードに据え成果をあげている。

「〝SOMPOムーブメント〟をスタートさせました。お客さまのそれぞれの特性、ニーズにあった自動車保険を確実にお届けできるよう、代理店さんと全国の社員と本社が一体となって、提案力を高める運動をしています」

これはトップダウンではなくボトムアップである点が重要だ。彼女は向き合う人々に素直な気持ちで語りかけた。

「数字のためや競合他社に勝つために、会社の方針だと押し付けるのは楽。でも私は、代理店さんや全国の社員のみなさんが現場で感じていることを知って、正しい仕事がしたい。一緒にお客さまのために必要な支援をしていきましょう」

真摯でありながら実直な態度が聞く者を動かして成果をあげた。彼女の心の矢は見事に的を射たようだ。続いて「ムーブメント塾」も開講。全国の社員を対象に、本社各セクションと連携してテーマごとにコミュニティを展開し、お客さまの側に立ったサービス実現のため緊密な切磋琢磨と情報交換がなされている。

だが彼女は満足していない。

「データやAIを活用して、お客さまの〝不安時間ゼロ〟を実現させたいです」

ドライブレコーダーを届けることで運転の不安を解消、スマートフォンやウェアラブル端末からお客さまの健康状態を把握、災害データを活用した防災・減災、高齢者介護のサービス充実……保険やグループ事業とデータの組み合わせで、お客さまの心を安心へと導き、明るい社会をつくる――。

「弓道の他にも絵画やハープ演奏、演劇、心理カウンセラーなどいろんな分野で体験を積んできました。どれも大事なのは、やっぱり〝心〟。それを、どう業務に反映させていくか、これからが正念場です」

井上真梨子は次なる的に視点を合わせ、弓を引こうとしている。

日本経済新聞　2022年11月11日掲載

「なぜＳＯＭＰＯは、社員１００名の伝記を作ったのか。」2021年度、ＳＯＭＰＯグループで働く役職員１００名のMYパーパスを未来伝記として、約５００時間かけて取材・執筆・編集し、公開しました。その１００冊の未来伝記を整然と並べたものをビジュアルにし、『ＳＯＭＰＯ伝』実施の背景をメッセージにしています。

日本経済新聞　2022年11月18日掲載

「だったら、会社を使ってみよう。」自分の志や素直な欲望を叶えるヒントを会社の中で探したり、ＭＹパーパスを実現する場として会社を活用するといった、「会社を使いたおす」働き方を応援する姿勢を表現しています。広告には、ＳＯＭＰＯケア そんぽの家S 淡路駅前の職員 圓藤 香津子を起用しています。

日本経済新聞　2022年11月25日掲載

「失敗したら、始まり。」役職員一人ひとりが自分の志に従い、失敗を恐れずに思い切って挑戦することを後押ししていく姿勢を表現しています。
広告には、ＳＯＭＰＯひまわり生命　事業企画部　サービスデザイングループの職員松本 洸徳、蓮井 智子、正木 彩茄を起用しています。

＜2021年度新聞広告＞

2022年3月1日
『介護、そこにあるべきもの』

2022年3月8日
『技術と才能と仲間たち』

2022年3月15日
『未知と向き合う、その決意』

2022年3月22日
『眩き非常識』

2022年3月29日
『世を、人を、深く想う。』

2022年4月25日
『ANOTHER STORY』

第71回日経広告賞「金融部門 最優秀賞」受賞

日本経済新聞社が主催する「第71回日経広告賞」において、「金融部門 最優秀賞」を受賞しました。ＳＯＭＰＯグループのパーパス経営の主役であるグループ役職員一人ひとりが「ＳＯＭＰＯ」という舞台で自分ならではの志（ＭＹパーパス）を実現していく物語を、「未来伝記」として書き記し、パーパス経営に取り組む企業姿勢を５回シリーズで表現しました。また、認知症に対するＳＯＭＰＯの取組みをアナザー・ストーリーとして紹介しました。